
機動戦士ガンダムSEED Z.O.E~the blue bird~

豪商院影正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED Z・O・E
the blue bird

【Nコード】

N2228W

【作者名】

豪商院影正

【あらすじ】

ある日、主人公はある世界を救うために、いわゆる『転生』をさせられることになる。

そしてその世界に来て主人公が最初に訪れたのは、宇宙コロニー『ヘリオポリス』。

そう、彼が送り込まれたのは、『ガンダムSEED』の世界だった。
・・・。

異世界で彼は何を見て、何を感じ、そして、何をなすのか。

次元を超えて、駆け抜ける！！ジエフテイ！！
一応、これが事実上の初連載作品になります。
駄文などといわれぬよう、精進いたしますので、どうか応援よろしく
お願いします。
ちなみに設定に一部スパロボZを使っています。
ご意見ご感想は無制限でいつでもお待ちしております。

序説（前書き）

はい、というわけで序説です。（というわけだよ）

序説

無限に存在する平行世界。

ある世界では平和が、ある世界では勝利が、またある世界では悲劇が、さまざまな事象が、さまざまな世界で生まれ、続き、そして終わっていった。

平行世界という文脈において、ありえないことは『ほぼ』無いと言っている。

たとえばある世界ではひとりの男が世界を大きな戦争の渦から守るために戦っていた。

またある世界では前だけを見て突き進み、螺旋を描き、天を突いた男たちがいた。

またある世界では、唯一つの大切なものために戦う少女もいた。

あるときには、それらの世界が集合し、砕け、一つになることもあった。

あるときには、それらの平行世界間で『1』であったものや、平行世界を渡り歩き、その世界を破壊し、そして救う、そんな『通りすがり』もいた。

しかし、その一見、何でもありな世界にもルールはあった。

そして、どの世界においても、イレギュラーは常にどこかで起こるものだ。そして、どの世界においても『調整』は必ず行われるものだ。

これは、その調整のためにある一つの世界に送り込まれた、一人の男と、彼の身に起こる数奇な運命の物語……。

序説（後書き）

というわけで次回予告！まずは彼から！

「はい、SEEDエンダースの数奇な運命に翻ろうされる方、主人公（名前未定）です！

っていきなりなんだよこれ！俺一体なんかした！？

・・・え、世界を救ってほしい？ということだ？

次回、機動戦士ガンダムSEED Z・O・E } the blue
bird }、略してSEEDエンダース！！・・・てまだプロロ
グだろこれ。」

あ、一応いっておきますが、次回予告は全てタイバニ風です（笑）

プロローグ(前書き)

プロローグにしちやちよっち長いか？

プロローグ

「ん……。」

「気がついたかね？」

『彼』は目を覚ましたとき、とりあえず最初に思ったのは、「ここが自らのベッドの上ではないということだった。」

「……どこだ？ここは……。」

「どこでもないさ。しかしそれは同時にあらゆる全ての場所ということでもあるがね。」

この段になって『彼』は、どこからか『声』がすることによつちく気づいた。

「！！だれだ！どこから！？」

「ここさ。この空間の全てからだ。」

『声』は、男の声でも、女の声でもなく、逆にその両方のような感じでもあった。

「あなたは……？」

「私かね？私は、全てであり、一であり、世界であり、個人であり、力であり、思いであり、君でもある。まあ、ここではわかりやすく『神』、とでも言っておこうか。」

「神だつて？」

「正確にはそうとも言いきれないんだがね。」

「……どういうことだ？それにここは一体？」

「最初の質問から答えよう。私は、さまざまな世界で、さまざまな呼ばれ方をする。原理の力、大極、オリジン・ロー、次元力……。しかし先ほどの『神』という名も含めて、そのどれもが正確な呼び方ではない。いってみればまあ、世界そのもの、といったところが一番近いかな。」

「ちよつと待て、今『さまざまな世界』とかいったように思えたんだが……。」

『神』とやらは平然と答える。

「ああ、平行世界については知ってるかね？」

「まあ・・・なんとなくは・・・。」

『彼』は戸惑いながらも答える。

「私はその平行世界の総体を含めて、世界そのものであり、同時にその管理者なのだ。」

『彼』はわけがわからなくなった。

「まあわからなくていいよ。先ほどいったように、ここでは『神』という名で充分なのだからね。さて、二つ目の質問だが、ここは私の中、言ってみれば平行世界間での次元の狭間とでもいっておこうか。」

わけがわからないが、とりあえずここはそのまま受け止めたほうがいいのだろうと思い、『彼』はとりあえずそういうものだと思っておくことにした。・・・勿論、全て納得がいったわけではないが。

「・・・まあいい。で、そのカミサマとやらが俺に何の用なんだ？」

「君に頼みがある。」

『神』は続ける。

「頼みというのは他でもない。君に、世界をひとつ、救ってほしいのだ。」

『彼』は目を見開いた。

「おいおい、ちょっと待てよ。何でカミサマが俺みたいなの・・・あれ？」

「ここにきて、『彼』はようやく、あることに気づいた。

「俺って・・・誰だ？」

知識はある。少なくともさっきまで言葉を話していた。感覚も・・・多分、ある。ここが何色かはわからないが、とりあえず、自分の手が肌色に見えている。ということは、体も当然、ある。

しかし、『記憶』がなかった。自分は何者で、どう育ち、何を好み、どう生きたのかがまったく思い出せない。

「君には先に言っておいたほうがいいだろう。」

「君は先ほど死んだのだ。」

啞然となった。そしてすぐに自覚した。

「そうだ、俺は死んだ。どうして、どうやって死んだかはどうも思い出せないが、少なくとも俺は確かに死んだ。」

「君に記憶が無いのは、おそらく死んだ際のショックだろう。ちょうど君が死んでくれたので、まあ、不謹慎な話かもしれないが、好都合と思い、君の魂をこちらに持ってきたのだよ。」

「そうなのか。そうか。」

何も疑問に思わなかった。不思議な話だが、未練だとか、悲しいだとか、（記憶が無いからかもしれないが）無かった。

「とりあえず、話を聞こう。」

『彼は、自分に特に断る理由も無いことを自覚し、聞くだけ聞いてみることにした。』

「さまざまな平行世界があることは先程にも言ったね。」

「ああ・・・、それが？」

「その平行世界郡、つまり私だが、その数は君の知覚を越えたはるか無限の数ある。その中には、別の世界で、ファンタジーだとか、フィクションとして存在する世界もある。しかし、ここで気をつけてほしいのは、そのフィクションは、あくまで『フィクション』、つまりお話の中の世界でしかなく、その世界の記述では決して無いということだ。たとえそれが、その世界と100パーセント一致していたとしてもだ。ここまではわかるね？」

「まあな、どうやら、そこまで馬鹿じゃあないようだ。」

「これらを踏まえて本題に入ろう。その平行世界だが、これらにはルールがあつてね。その内の一つに『全く同じ世界が同時に複数存在してはならない』というものがある。」

「もしあつたらどうなるんだ？」

「お互いにぶつかり合い、消滅する。」

「な……!!」

驚いた、まさか消滅してしまうとは思わなかったからだ。せいぜい、一つになつて終わりだとか、そんなところだろうと思つたからだ。

「しかしながら、何事にもイレギュラーがあるものでね。実は、同じ世界が『二つ』、生まれてしまったのだ。このままにしているもいずれ同じような世界が生まれるだろうが、それではその二つの世界の可能性を消してしまうことになる。私としても、そしてそれらの世界の住人たちにとつても、それは是非とも避けたい。まあ彼らに関して言えば、そのことに自覚もしていないのだが。そこで君の役目だ。そのうちの一つに行き、二つの世界を救つてほしいのだ。」

なるほど、確かに『俺』は適任だな。俺は先程死んで、しかも自分のことについて記憶が無い。過去だとか、そんなしがらみも一切無く、その世界に行くことができる。『彼』はそうおもしろい、更に質問する。「で？俺はそこで一体何をすればいいんだ？」

「いや、何もせずとも、ただそこにいればいい。」

「……なんだつて？」

「いやなに、私に、そしてその世界にとって重要なのは、『その二つの世界が同じでないこと』なんだ。そこで、君の存在だ。君の存在が一つ増える。確かにそれはちつぽけな、些細なものかもしれない。しかし、君という存在は、確実に二つの世界を『同じもの]でなくする』。『君がいる世界』と、『いない世界』の二つにね。何なら、世界に言つてすぐ、自殺してくれてもかまわないんだ。」

「……。死んでくれてもかまわない、か……。」
すでに死んだ身とはいえ、さすがにそんなことを言われてはショックだ。

「ははは、すまないね。まあ、こちらが勝手に頼んでるわけだし、いろいろと特典もつけるさ。断つたつていい。そうすれば、君は真正銘死ねるわけだし。」

「そうだな……。」

受ける義務は無い、しかし、だからといって断る理由があるわけでもない。それに、特典をつけるというのも魅力だ。

何より、死んだことを自覚しているといえど、生き返りたくないと思っているわけではない。むしろ是非とも、といったところであり、どうやら、義務は無くとも、理由はあるようだ。

「……特典つて具体的には何だ？」

「いろいろさ、まずはその世界での資金。とりあえず、かなりの額を出してあげよう。次に武器、その世界に見合ったものを、いや、君が望むものでもいいかな。次は……過去かな。君がその世界にいても、なんら不思議は無い、そんな過去をね。あとは能力、君には、そうだな……『ニュータイプ』と呼ばれる力と、『CQC』と呼ばれる格闘技、後はいろいろあげよう。」

「わかった。他のはともかく、生き返れることと、過去がもらえるのは願っても無いことだ。受けよう。」

『神』は嬉しそうに、

「ありがとう。……と、そういえば、君には名前が無かったね。

どうする？自分で決めてみるかい？」

「ふむ……。」

『彼』は思案する。彼の頭に残った知識をフル動員して、名前の候補を挙げていく。そしてしばし経ち……

「……ブリスキン。」

「ん？」

「デイビット・ブリスキン。俺の名前だ。」

その名は、自分がおそらく好きだったゲームの主人公。偉大で、勇敢な戦士から取った名前。

あるいは彼も、無限の平行世界の中にいるのだろうか。

「いいだろう、デイビット。後の望みに関してはこちらでかなえてあげよう。じゃあ行きたまえ。君の新たな人生の舞台へ……。」

そのとき、耳鳴りのような音がして、『彼』の、デイビットの意識

が遠くなる。

「……待つてくれ！」

「……なんだい？」

「俺に……俺に……を……！」

「ああ、それなら問題ない。ちよつど、その世界でも『そういつたもの』は必要だしね。使い方も教えておくよ。それ以外にも、いろいろと都合がいいようにしてあげよう。」

その言葉を最後に、彼の意識は途絶えた。

プロローグ（後書き）

さて、プロローグはこれで終わり、やっと本編です。

デ「・・・おい。」

ん、なに？

デ「ちょっといいか。俺の名前が決まっていなかったのは、わざとか？」

いや、ガチ。

デ「・・・。。。。。。。」

ハハ、メンゴ！

デ「メンゴじゃねえよ！」

と、言うわけで次回予告です。

「ちわっ！SEEDエンダースの朝起きたらすぐに歯を磨く方、デイビットだ！」

というわけでついに俺の新たな人生の始まり！流石にちょっとだけわくわくしているな。

つてアレ？ここって・・・。ていきなり爆発！？ななんだよおい！

まあ、どうせ一度死んだ身だ！せいぜい楽しませてもらうか！

次回、SEEDエンダース！ようやくの第1話！「偽りの平和」！

see you! next time!

ちなみにデイビット以外にもたくさんのキャラにやらせるつもりです。ただしその際、の方ってのはだいたいテキストです（笑）。

第1話「偽りの平和」・前編（前書き）

めっちゃめっちゃ長くなったのでのっけから前後編に……。

第1話「偽りの平和」・前編

この世界には二つの『人間』がいる。

一方は、この世にホモ・サピエンスという種として現れたままの『ナチュラル』。

もう一方は、その身のうちにある己自身を構成する要素　　遺伝子を調整され、力を得た『コーディネーター』。

彼らは互いを憎み、ねたみ、警戒していた。いや、あるいは恐れていたのかもしれない。

一方は現代の歪みとして、一方は過去の遺物として。

そしてある日、一発の災いによって、両者の鬱積していた感情は決壊し、ぶつかり合い、潰しあうことになった……。

機動戦士ガンダムSEED Z.O.E \ the blue bird

chapter 1 . strange visitor

「ん……。」
目を覚ますと、そこには空があつた。いや、正確には『そのようなもの』といった方が正しいのだが。

デイビッドはその偽りの空の、偽りのまぶしさに目を覚ました。見渡せば、偽りの自然がそこにあつた。

「ここは……。」
デイビッドはいまだ覚醒しきらない頭をどうにか動かす。少しずつ、しかし確実にさまざまなことを思い出す。

自分がここにいる理由、経緯、そして役割を。
そしてそれが今、終わったことを。

要するに、あの『神』とやらが必要としているのは、自分が今『こ

「ここにいる」という事実だ。

つまり、この世界に、自分というファクターが一つ加わったことにより、二つの世界は自分という存在を軸にして別物になった。

そしてその時点で、二つの世界は救われたわけで。

「どうせなら、クラッカードの何だの、もう少しお祝いがほしかったな……。」

はつきりいって、世界を救った後にしては、ものすごく殺風景に過ぎた。なので、そんな風に愚痴るのも無理は無い。

その時。

「すまないね。私としても、盛大に祝いたかったのだが。」

とたんに、どこからか声がして、デイビッドは少し、いや正直に言えばかなり驚いた。

「!!!……なんだあんたか……。声かけるなら前振りなり何なりしてくれ。」

「じゃあそうしよう。と、その前にポケットに入っているだろうコーナーデッキをつけてくれ。」

「ポケット……?」

と、デイビッドがズボンをまさぐると、そこにはバンドナが入っているだけだ。

「このことか。」

「そうだ。それは一見するとただのバンドナだが、骨伝導を通して通信を送り、君の体内にあらかじめ入れてあるナノマシンを通じて、君自身が声を出さずに会話が行える通信機、コーナーデッキが内蔵されている。ほかに、好きなときに、好きなだけの弾薬を取り出せる、無限バンドナ機能もついている。」

「無限バンドナあ?いくらなんでもサービスすぎじゃないのか。」

「いいんだよ。別の世界ですでに一般化している技術だ。この世界でオーバーテクノロジーだからって、気にする必要は無いさ。」

つまり、この世界ではとんでもない技術だといいたいわけか。

「まあいい。で、これをつけてどうすればいいんだ?」

言いながら、デイビッドはバンダナを頭に巻きつける。

「つければ、通信があった時に君にだけコール音が聞こえるはずだ。こんなふうだね。」

すると、確かに甲高い電子音が、デイビッドの頭に小さく響く。

「頭の横のあたりを押せば、通信が始まる。」

そのままおもむろに押すと、電子音は止んだ。

「よし、じゃあこれからはこれで話そうか。」

通信機を通じての、少しこもった風の『神』の声が聞こえた。

「ああ、そうだ。コーデックは君の左腕についている端末からでも操作が可能だ。君の方から呼びかける際に使用したまえ。ああ、それと。」

と、いきなり左腕から立体映像の様なものが現れる。どうやら、三次元の地図のようだ。

「その中に赤い光点が移っているだろう？」

「ああ。」

「その光点の位置に、君が望むものがある。」

「俺の望むもの？」

「ああ、ちょうど、状況的にも必要になるかもしれない。」

「・・・どういうことだ？」

「これから、君には君の運命を選択してもらうことになる。」

「俺の運命？」

「そうだ。戦うか、それとも逃げるか。どちらを選ぶかで、君の人生は変わる。決定的に。」

「どちらを選んでもいいんだな？」

「ああ。知っての通り、ここでの君の役目はすでに終わっている。だから、ここから先は君が好きにすればいい。」

「しかし、これだけは忘れないでくれ。この世界に来た時点で、君はもうすでにこの世界の住人なんだ。この世界のルールには従わなければならない。だからこそ、これからの選択のために、この力はおそらく必要になる。」

「……………」

<そして、先に言っておくが、この通信をきいたら、そこから先は、私と話をする機会は無くなる。>

「……………そうか。」

<まあ、当然だといえば当然だろ？それとも、私が居なくなるから寂しいのかい？>

「よせよ。」

<はは。じゃあ、そろそろ通信を切ろうか。因みに、この世界で生きていくために必要な知識は、後で君に『入力』させてもらうからね。>

「わかった。……………ああ、あと。」

<なんだい？>

「色々ありがとう。」

<……………どういたしまして。>

うれしそうな声を最後に、通信は切れた。

「さて……………どうするかな。」

『神』からもらった知識を整理しながら、デイビッドは呟く。

「とりあえずは、その力とやらを取りにいくか。」

マップに示された道筋をたどり、道を歩く。

(宇宙コロニー、ヘリオポリス……………ねえ。)

正直、ここが宇宙だとは信じられなかった。

重力があり、緑があり、町がある。

しかし、ここが地球ではないことは、はっきりと『感じていた』。

これは、彼の能力、『ニュータイプ』によるものだ。

ニュータイプとは、簡単に言えばものすごい直感、というべきものだ。

宇宙空間では、空気も無ければ、重力、つまり上下感覚は皆無だ。

そんな中、ある世界では宇宙に進出した人類のうち何人かが、そういった環境に適応進化するために、まるで超能力としかいえないよ

うな力を持つにいたった。それがニュータイプである。

優れた空間認識能力、人の思念を感じ取り、未来予知といったいいほどに、行動を先読みする。

それは、ものすごく勘がいい、と切り捨てるものもいるかもしれない。

しかし、ニュータイプ能力は、もはやそういつていい領域から、完全に逸脱していた。

そして、その能力の発展応用によって、デイビッドはここが宇宙コロニーであると、実感できたというわけだ。

ふと、デイビッドは街中で足を止め、その中の店の一つにあったシヨールウィンドウを覗き込み、自分の顔を見た。

(ふむ、なかなかいいんじゃないか?)

ハンサム顔、というよりは堀の深い、渋めの容姿。

自分のものらしきIDカード(おそらく『神』が作ったのだらう)に書かれている25、という年齢からすれば結構なふけ顔だが、少なくともブ男では決して無いし、彼自身の好みにも合っている。

何より、つけているバンダナがよく似合う。

「なかなかいい顔にしてくれるねえ……。」

そう呟きながら気分よく歩いていると、デイビッドは学生の一団にであった。

どうやらここは、コロニー内にある大学のエレカポ・トらしい。

学生、とデイビッドが表したのは、こここの位置情報と、彼等の若さ

というより幼さ からだ。

彼女たちは、手紙がどうのこうの、そういうのじゃないだの、楽しそうに話している。

(さて、それじゃああのエレカを借りるか。)

ここから徒歩で行くにはどうも遠そうだ。

そう思ったそのとき、一人の女性と、若い男性二人が、先程の学生たちを下がらせて、エレカに乗り込んだ。

エレカの走り去った後、先程の学生の一部が次のエレカに乗り込み、

走りさった。

残った学生は三人。さらにそのうちの男女二人が残り一人の少年に応援するように語り掛け、しどろもどろとする少年を尻目に、エレカに乗り込んだ。

最後に一人、取り残された少年ははまだ戸惑っている風だ。

なるほど、とデイビッドはいたずらげに微笑む。

さしずめ意中の相手が先程の女子学生たちの中に居たということころだろう。

「恋するお年頃ってところか。青春とはいいものだな。」

少しばかりいたずら心のをいたデイビッドは、からかい気味に少年に語りかける。

「え？い、いやその・・・、そういうわけじゃ・・・。」

少年は恥ずかしげにうつむく。

「違う風には見えないが？」

「そ、そんなことより！あなたは乗らないんですか！？」

「ああ、そうだった。っと、ところで君はどこに？」

「え？ああ、モルゲンレーテですが・・・。」

モルゲンレーテはちょうど、例の光点の位置だ。

ふむ、とデイビッドはうなり、しばしした後、

「ちょうどいい、俺もその辺りに用があつたんだ。からかつた俺びだ。乗せてってやる。」

そう提案したので、少年は少し戸惑ったが、

「あ、ありがとうございます・・・ところで、あなたは？」

そう質問したので、デイビッドは自分が名乗っていないことに気づいた。

「ああ、自己紹介が遅れたな。おれはデイビッド・ブリスキン。君は？」

「キラ・ヤマトです。キラって呼んでください。」

「わかった。俺もデイビッドでいい。さて、行くところか。」

これが、二人の運命を変える決定的な出会いだと、デイビットですら気づいていなかった。

第1話「偽りの平和」・前編（後書き）

やっとキラが出ました。後半の、しかも終わりの方に。

キラ「あの……。」
ん？

キラ「僕の出番、少なくともいいですか？」

まあ、前編だし、後編で結構出るから、気にしなくていいよ。場合によっては、キラSIDEの話にもするつもりだし。

キラ「そうなんですか？」

まあ、どこでやるかは未定なんだけど。

キラ「……。」

デイビッド「お前頭の中で大筋や所々のストーリーが無駄に詳しく思いついてるくせに、結構なところで無計画が目立つよな。」

……何故わかった!?

デイビッド「お前がニュータイプにしたんだろうが。」

……そうでした。

ま、まあ気を取り直して次回予告!!

キラ「こんにちは!SEEDエンダースの靴下は必ず右足から履く方のキラ・ヤマトです!

デイビッドさん……不思議な人だな……。

なんというか、親しみやすいし……。

つていきなり爆発!?一体何が起こったんだ!?

え?これは……。

次回!SEEDエンダース!第1話、「偽りの平和・後編」!

えつと……また見てください!

デイビッド「一応聞いておくがこの　の方ってほんとに公式設定つてわけじゃないんだな?」

ええまあ。少なくとも大体そうなる予定です。

デイビッド「……てことはネタに詰まって公式設定引つ張り出し

てくる可能性はあるんだな？」

まあ・・・無いとは言いきれませんが（笑）

第1話「偽りの平和」・後編（前書き）

さて、やっとジエフティの登場です。

第1話「偽りの平和」・後編

ここ『ヘリオポリス』は地球の衛星軌道上、L3に浮かぶ宇宙コロニーだ。

宇宙に国境は無い、といえる時代はすでに過ぎ去り、宇宙に建造されたコロニーは、必ずといっていいほどどこかの国や企業の持ち物だ。

そして『ヘリオポリス』は、『オーブ連邦首長国』が所有している工業コロニーの一つだ。

この時代、すでにエネルギーの枯渇した地球において、宇宙港、つまりコロニーを持つことは、工業的にも大きな意味がある。

金鉱の小惑星の採掘、エネルギー採取、宇宙空間を利用した新物質の開発……。そのほかにも枚挙に暇が無いほどの利用価値が宇宙にはあった。

そしてその中には、そういった宇宙コロニーの外から隔絶された構造を利用した『隠し物』も含まれていたのである。

幹線道路をエレカが走っていく。

エレカは基本的に自動操縦で、目的地を入力すれば後は勝手に連れて行ってくれる。

「そつえば、キラはコーディネイターなのか？」

『コーディネイター』。

遺伝子的に調整され、常人を超える能力を生まれながら身につけた新人類。

年号が西暦からコズミック・イラ（C・E）に変わってから急増し、そしてその存在が、今の世界のあり方を決めてしまったといっている。

「えー！よ、よくわかりましたね。」

「昔から勘がよくてね。そういうのはぱっと見でわかる。」

実際にはニュータイプ能力でキラの思念を軽く『読み取った』というところなのだが。

「えっと・・・デイビッドさんは？」

「俺か？俺はナチュラルだ。まあ、天才だがな。」

『天才』というのは、おそらく『神』が与えたらしき特典の一つだ。「そうですねか・・・。」

とたんに、キラの表情が暗くなる。

コーディネイターでない、遺伝子操作をされていない人間を『ナチュラル』という。

ナチュラルとコーディネイターの間には、かつて肌の色や歴史的『根拠』に基いたくだらないものとは比べようの無いほどに、深い溝がある。

「安心しな。俺は相手がどんなやつだろうと、何も考えずに差別するような馬鹿とは違う。」

天才だからな、とデイビッドが笑うと、キラもそれにつられて微笑む。

「大体な、俺はあのブルーコスモスって連中が大嫌いなのだ。」

『ブルーコスモス』。

ナチュラルの中でも、特に過激なコーディネイター排斥派の一団。もともとは自然保護団体であったが、反コーディネイターの宗教団体などが無茶苦茶に寄り集まり、思想と呼べないまでに混沌とした集団に変わっている。

共通しているのは、反コーディネイターという、思想とするにはあまりにもお粗末な項目だけ。

「大体、何だよ連中のスローガン『青き清浄なる世界のために』って、センス無さ過ぎるだろ。金くれりゃ、俺が変わりにいいスローガンを考えてやるのに。」

「へえ。いくらぐらいで引き受けるんですか？」

「そうだな、最低でも10億ドルは・・・と。」

そうこうしているうちにエレカは目的地に到着した。

モルゲンレーテの工業カレッジ。

「じゃ、俺はここで別の用事があるから。」

「はい、ありがとうございます。」

キラと分かれ、デイビッドは目的地に向かって歩を進める。

目的地は工業区。デイビッドは、その一角にある、巨大なコンテナを見つげ、それを見上げた。

「ここか……。」

赤い光点は、明らかにここをさしていた。

見れば、コンテナの横に、入り口のようなものがあるのがわかる。

しかし、どうやらロックがかかっている。

「ってどうすんだこれ。あけ方なんてわからないし……。」

とりあえず、近づいてみないことには始まらないと、歩き出そうとしたそのとき。

自分の背後で、轟音と、熱風を感じた。

「な……！！」

思わず、デイビッドは転びそうになる。

何が起こった!?

見ると、自分の周囲で、爆発が続いていき、その轟音に隠れて、乾いた破裂音がする。

そして感じる、この明らかな敵意と、先程のキラの時にも感じた感覚。

「コーディネイター……? ザフトの連中か!??」

『ザフト』。コーディネイターのみで構成され、宇宙コロニーの国土しか持たない国家、『プラント』の軍隊。

しかし、何だつて、中立国であるはずのオーブのコロニーに……?

「とにかく、今は『アレ』の確保が先か!」

そういつて、デイビッドはコンテナの入り口までかける。

しかし、相変わらずあけ方がわからないことに変わりはない。

その時、

<愛国者は?>

入り口にあるスピーカーから音声が出る。そして、

「『ら・り・る・れ・ろ』・・・なんだ?」

思わず口をついて言葉が出た。

と、そのとき、

<声紋認証、パスワード認証ともにクリア。ロックを解除。>

とたんに、入り口のシャッターが開く。

「『神』のしわざか・・・。しかしありがたい!」

そのまま、コンテナ内の通路を駆け抜ける。

そして、その中には10メートル台の巨大なロボットがいた。

「これが・・・俺の力?」

その時、いきなり轟音と、激しい揺れがコンテナを襲う。

デイビッドはとっさに、キャットウォークの手すりにつかまる。

「くそ!とにかくあれに乗るしか!」

そして下半身のコクピットに乗り込む。

すると、コクピットからオレンジ色の光の膜が現れ、コクピット全

体を包んだ。

操縦桿と思しき球体に手を置くと、とたんにコクピット内部が輝く。

『バイオメトリクス認証、指定されたフレームランナーと確認。全

システムオールグリーン。』

周りに、さまざまな画像が現れては消えてゆく。

「はっ!何がなんだかわからないが、どうせ一度死んだ身だ!」

そこでデイビッドはにやりと笑い、

「だったらせいぜい死ぬ気で楽しませてもらおうか!」

最後にコクピットの前方に、エジプト文字と思わしき何かが浮かぶ。

『おはようございます。戦闘を開始いたします。』

「デイビッド・ブリスキン。ジェフティ、起動!」

「

」

コンテナが宙に飛び出した。

コンテナが真つ二つにわれ、その中から『何か』が飛び出す。

青いボディ。細く、それでいて力強いデザイン。背中から生えた光の翼。そして体を走る溝には、青い光が通っている。

今までのどのモビルスーツとも、モビルアーマーとも違うその姿。

そしてそれが、この世界を大きく変える、その始まりを告げるもの姿だった。

第1話「偽りの平和」・後編（後書き）

デイビッド「・・・あのな。」
なに？

デイビッド「今気づいたが、何気にMGSのネタ仕込みすぎじゃないか？」

いや、最初はそのつもり無かったんだけど、まあ、ジェフティもコジプロ作品だし、ねえ？

デイビッド「大体、あのパスワードなんだよ！完全にわかる人にはわかっちゃうじゃねえか！！」

ま、まあそれはとにかく、次回やっと、ジェフティの大暴れの回だから、がんばってね！

それじゃ次回予告！

「よ！SEEDエンダーズのお金を払う時は端数の小銭を必ず用意する方のデイビッドだ！

これが・・・俺の機体・・・。

！！あのモビルスーツ・・・どうした！？

つてお前・・・キラなのか！？

次回、SEEDエンダーズ第2話！！「その名はジェフティ」！！

see you! next time!」

と、その前に設定とか掲載しますね。

デイビッド「ええ！？」

主人公・機体設定（前書き）

やっところさ主人公と機体が出揃ったのでここらで解説。

主人公・機体設定

デイビッド・ブリスキン

AGE・26

身長・176cm

体重・76kg

外見・顔は『メタルギアソリッド』のスネークに似ている。

このときのスネークが33という設定（小説版より）なので、年の割りにふけ顔だが本人はこれを気に入っているらしい。

体型は痩せていながら、体格のいい、引き締まった体。

CVイメージ・森川智之

性格・たびたびジョークを言い、人をからかうことを楽しむので、一見するとお調子者のように思えるが、その一方でナチュラル・コーデイネイターの分け隔てをしない寛容さを併せ持ち、そういった差別を何より嫌う。どちらかというとスネークより『デビルメイクライ』のダンテに近いキャラ。

人種・ナチュラル

能力・ニュータイプ・『一応』この世界では唯一の能力者なので、比較対象が存在しないが、UCの世界ではアムロやシャアに匹敵、あるいは超えるほどの能力。

CQC・非常に優れた技の使い手。

声真似・一度聞いた声ならどんな声でも真似られる。

身体能力・非常に優れているが、コーデイネイターほどというわけではない。ただし、前述のCQCと、ニュータイプ能力と合わせて、実戦ではコーデイネイターより強い。

頭脳・いわゆる『天才』。並列情報処理能力はキラ以上。

操縦技術・エースパイロット並み。さらにここにニュータイプ能力が加わるため、卓越した技術を発揮する。

好きなもの・ビール、ピザ（必ずコーラは欠かさないらしい。）、人をからかうこと

嫌いなもの・差別、およびそれを行う人間全て、たくあん
所有装備・コーデック・本来は暗号通信方式のことをさすが、劇中ではデイビッドのバンダナ型通信機や、デイビッドが持っていた、あるいは作った通信機の事を指す。ナノマシンを利用した通信機で、声を出さずに会話可能。デイビッドはバンダナや、腕についている多目的通信端末を使って操作する。

無限バンダナ・バンダナ型通信機についているもう一つの機能。好きなときに、好きな弾薬を、好きなだけ取り出すことができる。ジェフティのジェネレーターを使って生成されるらしい。ほかの世界では一般化している技術らしい。耐水使用なので、洗濯も可能。同じものが5個は存在するらしい。

多目的通信端末・デイビッドの腕に取り付けている腕時計のような端末。腕時計としての昨日の他に、コーデックの操作、3Dマップの表示、ADAとの通信などを行える。これはジェフティの人工知能であるADAのサポートによって行われ、そのためリアルタイムでADAと繋がっている。

コルト・ガバメント・デイビッドの愛用する拳銃。自動拳銃の代名詞として知られる、非常に使いやすい拳銃。デイビッドは2丁持っている。

CQCナイフ・CQCの使用に特化したナイフ。

死んですぐ後に『神』によって転生させられ、ヘリオポリスに現れた今作の主人公。

本人は自分に関する記憶が一切無いため、転生自体にはまったく抵抗が無かった。

本人は『この世界を楽しませてもらう』と第二の人生に意気込みを見せているが、その一方でこの戦争に対してかなりまじめに取り組もうとしている様子。

転生時の特典としてかなりの資産があるらしい。

ジエフテイ

デイビッドの乗る機体。

この世界で唯一のオービタルフレーム（OF）であり、モビルスーツを超える性能を持つ。

この世界では火星移住者、『マーシャーン』の中の秘密組織、『ゾーン・オブ・ジ・エンダース』が作ったことになっている。ちなみにコズミックイラの世界では、OFの構成物質であるメタトロンについては知られているが、活用できるほどに研究が進んではない。武装・パドルブレード・ジエフテイの右腕に直接搭載されている。エネルギーをまとっているので実体剣でありながらPS装甲にも対抗できる。

多目的型ビームシステム・パドルブレードに搭載されているビーム兵器。通常の射撃、ホーミングレーザー、バーストショットの三つを使い分けて使用する。

シールド・ベクタートラップを利用したエネルギーシールド。現行の兵器なら実弾、エネルギー兵器を問わず防御可能。

サブウエポン・マミー、フアランクス、ゲイザーを使用可能。そのほかのサブウエポンも全て搭載しているが、現時点でロックがかかっている。

出典は『Z・O・E』、および続編の『ANUBIS』。

出典との違いは、自己修復のためのナノマシンが搭載されていること、バイオメトリクス認証によりデイビッド以外には扱えないこと、デイビッドの寿命以外の死亡に反応して自爆することなどがあげられる。

関連用語・メタトロン・OFの構成物質。火星でしか取れないレアメタルで、その希少性ゆえにプラント、連合ともに研究が進んでい

ない。ジェフティでは機体のほぼ全てにメタトロンが使われている。

ベクタートラップ・ジェフティの使用する空間圧縮技術およびそれを利用した装置のこと。対象の物質を周りの空間ごと固定、圧縮することで収納する。この機能によりジェフティの積載量はほぼ無限である。また、これを利用してジェフティは相手を『つかむ』ことも可能。

A D A

ジェフティに搭載されている戦闘用人工知能。会話も可能だが客観的事実や戦略的効率を重視した意見しか言わないため、かなり口さがない。多目的機能端末からでも会話可能。主にデイビッドのサポートを担当する。

『神』

本人曰く『全ての平行世界を含む世界そのものでその管理者』。

デイビッドをこの世界に送り込んだ張本人。

『神』という名は、あくまでも便宜上のものであり、このほかにも次元力、オリジン・ローなど、さまざまな呼び名を持つ。

もともとは意思を持たない力であり、デイビッドの前に声として現れたのも、その力の一つの現れ方ではない。

平行世界間でのルールとして、『同じ世界が二つあると消滅する』というものがあり、それを回避するため、死亡して間もないデイビッドをそのうちの一つであるこの世界に送り込んだ。

主人公・機体設定（後書き）

はい、というわけで設定集です。

デイビッド「それにしても、こうしてみると俺って結構チートだな。」

いや、そういうわけじゃないよ。一応キラやシンが、成長の具合によつては、互角以上になれる位の能力地設定にしてあるから。

デイビッド「そうなのか？」

まあね、これからキラも君にCQCを教わる予定だし。

デイビッド「おお。キラが俺の弟子になるのか。って、ん？いまシンっていわなかったか？」

あ！！謎の妨害電波だ！

デイビッド「おい！お前ちゃんと答えるよ！おい！！」

第2話・「その名はジェフティ」(前書き)

SEEDエンダース！前回の3つの出来事！

1つ！デイビッド・ブリスキンが、新たな命と人生を得て、コロニー・ヘリオポリスに転生する！

2つ！デイビッド・ブリスキンとキラ・ヤマト、二人が運命の出会いを果たす！

そして3つ！！いきなり現れたザフトに対抗するため、デイビッドがジェフティを起動させる！

Count the weapons！現在、ジェフティの使えるサブウェポンは！

マミー

ゲイザー

ファランクス

第2話・「その名はジェフティ」

そろそろ、この世界の状況を語らねばならない。

ナチュラル、コーディネーターの間に深い溝があるのは先に行った通りだが、その中でどちらが不利か、と聞かれればコーディネーターであつたといわざるを得ない。

彼らはその新しさと脅威ゆえに弾圧を受け、その殆どがスペースコロニーに追いやられた。

そしてそれらスペースコロニーは地球の国家の支配を受け、搾取されるままだったが、いつの時代でもそうであつたように人間はそんな状況にいつまでも甘んじているほど弱くは無い。

そしてその結果、彼らは独立国家『プラント』を設立した。

が、それをすんなり受け入れるほど、かつての搾取側、地球が甘くないのも、やはり歴史が証明していた。

そしてC・E・70年、2月14日。

プラントの農業用コロニー、『ユニウスセブン』に、1発の核ミサイルが打ち込まれた。

核ミサイルは、宇宙では多くの人間が思っているほど強いわけではない。地球では数十キロにも及ぶ爆発も、宇宙では空気が無いのでせいぜい500メートル程度。

しかし、スペースコロニーにとっては、それだけでも十分脅威だ。

結果として、ユニウスセブンは崩壊、その中の人間には、自分たちがその崩壊するコロニーに生命線の全てを預けたといつていい状況で生き残れたものなど、いるわけもない。

そして、この『血のバレンタイン』を切欠に、戦争が始まった。

地球の国家のほぼ全てが集合した『地球連合軍』と、プラントの所有する義勇軍、『Z A F T』の間での戦争。

当初、戦局は地球軍の有利だと思われていた。

如何に地球軍の殆どがナチュラルで、プラントの殆どがコーディネ

ーターで構成されているにしても、地球には核がある。しかし、その予想は裏切られた。核分裂を阻害する装置、『ニュートロンジャマー』によって、ザフトは核兵器を使用不可能にした。だがそれでも、やはり地球軍の有利は変わらない、そう思われていた。

地球にはプラントには無い物量がある。いずれプラントは息切れするだろうと。

しかし、それもまた裏切られた。

Nジャマーの勢力下では、核分裂だけでなく通信もうまく働かない。そのような状況下で、効果的な作戦行動は戦闘機、モビルアーマーではそうそう取れない。

しかしながら、ザフトにはそれができたのだ。

ザフトには新兵器、モビルスーツがあつた為だ。

人型兵器であるモビルスーツは、Nジャマーの影響下での戦闘を想定したものだ。

それはつまり、モビルスーツという兵器が、地球の物量に対抗できるといふ事実を表している。

結果、戦局はザフトの有利に進み、開戦から1ヶ月という、誰も予想していなかった途方も無い時間が流れていた。

あちこちで火の手が上がっている。

そしてその中には複数の巨大な人影がみえる。MSだ。

そしてその上空には、青い鳥が、ジェフティがそこにいた。

「・・・さてと、どうするかな。」

デイビッドは、ジェフティのkokopitt内で考え込む。

正直、何も考えていない。

乗っただけ、というのが正直な話である。

そのとき、

『何か行動をお願いします。』

ジェフティのkokopittから声が発せられる。

「お前は？」

『私は独立型戦闘支援ユニット、ADAです。』

「なるほど？で、エイダ。何か面白そうなものは無いか？」

『質問の意図不明。より具体的な内容をお願いします。』

「ああ・・・じゃあ、何か変なものは？」

『モビルスーツ1機の内部に、二つの動体反応を確認。』

「二つ・・・？通信をつないでくれ。」

こいつはなかなか面白そうだ、そう勘が告げている気がする。

『了解。』

そしてサイレンのような音の後、二人の人間のいいからそう声が聞こえた。

「あ、あーそのMS。聞こえるか？」

『え？・・・その声、デイビッドさんですか！？』

「・・・お前、キラか！？どうしてMSに乗ってんだ！？」

『あ、あの・・・成り行きで・・・』

「とにかく、急いでそこを離脱しろ！！急がないとやられるぞ！！」

『そうしたいですけど、このMS、OSが無茶苦茶で・・・！』

「なっ・・・！まあいい。せつかくだ、そちらを援護する。」

『え・・・？あ、あの！デイビッドさんは、どこなんですか！？』

「真上だ。エイダ、さっきのMSの位置を。」

『先程の動体反応を、マークで示します。』

すると、コクピット内から見える景色に、別の画面が移り、そこにマークがつく。

「このモビルスーツは・・・？」

『GAT-X105、『ストライク』です。』

「ストライク・・・？」

『地球連合軍のMS開発計画、通称、『G計画』によって作られた、連合製MSの1機です。』

「連合製！？ちょっと待て！連合の兵器が、どうしてオーブのコロニーに！？」

そのとき、ストライクがジンのターゲットになったのが見えた。
「ツクソ！！キラを助ける方が先か！」

ジェフティを急降下させ、ストライクの元へと駆けつける。
ストライクの正面に現れるようにして、ジェフティは降下した。
突然現れたジェフティに、ジン2機は戸惑っているらしい。

『周辺に民間人のものと思われる動体反応を確認。』

「わかった。注意しておく。」

『・・・デビッドさん！？その機体は・・・』

「キラ！話は後だ！お前、OSの書き換え、できるか！」

『は、はい！今やつてるところです！』

「わかった。俺が前の連中を片付ける。お前はその間に！！」

『わ、わかりました！』

タイミングよく、ジンはジェフティに向かって攻撃しようと詰め寄ってきた。

「初戦闘か・・・。だが！」

デビッドはジェフティのブーストを起動させ、一気にジンの元へと寄せる。

戦闘が始まった。

ミゲル・アイマンは、目の前の光景が信じられなかった。

ストライクを攻撃しようとしたとき、上空から突然識別不明のMSらしき何かが現れたのだ。

『何か』といったのは、彼にはそれがどうしてもMSと思えなかったからだ。

ストライクは、見た目には全然違うが、そのフレームの形状から、もともとジンを元に関与されたことが伺える。しかし、目の前の機体には、人型であること意外には、ジンと共通の要素が殆ど無い。言ってみれば、技術系統がまったく違う、ということのを完全に主張していた。

『おい、何やってる！ぼさっとしてるとやられるぞ！』

隣のジンから通信が入って、ミゲルはようやく落ち着きを取り戻した。

「す、すまない。」

そうだ、自分はザフトのエースパイロット、ミゲル・アイマンだ。この程度のことであわててどうする。

『あの機体・・・アレも連合のものなのか?』

「わからねえ。だが、どうも敵つてのははっきりしてるぜ。」

『らしいな。』

「しかけるぞ!!!」

『了解!』

そして自分はマシンガンを、隣は重斬刀をかまえる。

そのとき、目の前の期待は隣に向かつて一気に加速した。

そしてミゲルは、再び一瞬ながらも呆然とした。

目の前の機体が構えた瞬間、右腕にマウントされていた剣が一瞬で

『飛び出た』。少なくとも彼にはそう見えた。

回転もせず、刃が前面に出て、そして先程より伸びている。

ジンと敵の剣が当たる。そして、重斬刀は切り落とされた。

『何!?!』

隣のパイロットが驚きの声を上げる。

そしてミゲルは、ジンが敵の剣に真っ二つにされる光景を見、自分

の戦友の断末魔を聞いた。

一瞬でジンを切り伏せた後、もう1機が退却する光景を見ながら、

デイビッドは自分の胸が少しだけ痛むのを感じた。

『どうかしましたか?』

「いや・・・ちよつとな・・・。」

初めての『人殺し』。このことに関して、何も感じない人間はそういない。

『デイビッドさん・・・。その機体は一体・・・。』

気を取り直し、デイビッドは覚悟を決める。

そつだ、これは戦争なのだ。少なくとも、これで自分はこの戦争にかかわつたのだ。

その事実から逃げられない。それがこの世界の『ルール』なのだ。「公園に移動しよう。とりあえずそのMSじゃまともに戦えない。」デイビッドはそつキラに語りかけた。

「……しかしすげーな、これ、キラが動かしてたわけ？」

「そつちもだけど、こつちのほうがすごいよ。」

「ああ……なんていうか……違つよな。MSとは……。」

トールたちが二つの機体を見上げながら感嘆の声を上げている。

ストライクをコンテナに腰掛けさせた後、キラは自分を助けた青い機体を見上げていた。

青い機体が降下していき、ひざをついた後、その下半身のコクピツトのハツチが消え、中からデイビッドの姿が見えた。

「……デイビッドさん！」

「キラか。とりあえず状況を説明してくれ。後、これを。」

そついつてデイビッドはブロック型の携帯食と、水をキラに手渡した。

「そいつをそこの連中に配つてやれ。」

「あ、ありがとうございます。」

キラがトールたちに食料を渡していると、デイビッドは先程の自分の同乗者であつた女性兵士が気絶しているそばに食料を置いて、彼女の作業服のポケットを探り、拳銃を取り出した。

「やはり軍人か……。モルゲンレーテの作業員に化けていたか。」

そついいながら、慣れた手つきで拳銃を分解していき、適当に投げ散らかすのを見て、キラを含む全員が驚きの声を上げた。

「おい、キラ。あのロボットといい、あの人何者だよ。」

「いや、僕もさつき会つたばかりで……。」

トールが耳打ちしてくるも、キラも何がなんだかわからない。

さつき会つたとき、キラはこの男に、とても気さくない人、とし

か思っていないかったし、今もそのときの雰囲気とあまり変わっていない様に見える。

「俺がどうかしたか？」

「あ！いえ！」

「そうか？じゃあ、そろそろ何があったのか教えてくれ。」

「いきなりザフトが攻めてきて、逃げ回っていたらこいつに出くわした、と……。」

「ええ。まあ、そういうことです。」

キラから話を聞いて、デイビッドは思案する。

「こいつ以外に、何かMSは？」

「そういえば……何体か。」

「あのさ、キラ、そろそろこの人について聞きたいんだけど？」

この段になつて、ようやく二人はキラの友人たちにデイビッドについて何も説明していないことに気づいた。

「ああ、すまなかったな。俺はデイビッド・ブリスキンだ。キラとはちょっと前に話したただけなんだがな。ところで。」

「な、何でしょう？」

いきなり自分の方を向けられて、キラは一瞬たじろぐ。

「お前、ボディーガードを雇わないか？」

いきなりのデイビッドの提案に、一同は呆然となった。

「ど、どうしてそうなるんですか？そりゃ、今の状況が普通じゃなあってわかってますし、ありがたいとは思いますが……。」

「何、お前に少し興味がわいた。ただそれだけなんだがな。デイビッドは楽しそうに言う。

「お前といると、もっと面白いことが起きそうな気がする。」

そしてにやりと笑った後、

「俺の勤はよく当たるんだ。」

この状況下ではあまりにも物騒なことを言った。

「えっと……でも……僕……お金が……。」

「大丈夫だ、出世払いで良い。俺としては、金はどうでも良いんだからな。」

「そ、そうですか？えっと・・・じゃあ、お願いします。」

「決まりだな。」

そういつて笑顔を見せた。

キラは、自分は相当危険な人物に　あるいは変人に、とんでもないことを頼んだのかもしれないと思った。

そのとき、気絶していた女性兵士が意識を取り戻す。

キラが駆け寄り、手を差し伸べようとすると、彼女は状況を認識したようので、拳銃を取り出そうとした。

無論、あるはずが無いのだが。

「機体から・・・え？」

一瞬きよんととして、あわてて銃を探す。

「無駄だぜ、お前さんの銃は、たった今バラバラ殺人の被害者になつてる。」

そういてデイビッドは先程自分の分解した銃の残骸を指し示した。

なるほど、確かにここまで哀れな姿もそう無いだろうと、キラは少し噴き出した。

「い・・・一体あなたは何者！？どうして・・・！」

「どうしてって、そりゃ、物騒だから決まってるんだろ。」

「ところでデイビッドさん、あの機体は一体何なんですか・・・？」

「ああ、そうだったな。そろそろ説明しとくか。」

「話を聞きなさい！って、あなた・・・あの機体のパイロットなの！？」

『正確にはパイロットではありません。オービタルフレームについては、フレームランナーと呼ぶのが適切です。』

そのとき、デイビッドの腕時計から声がして、一同はさらに驚愕した。

「ええっ！！な、なんか腕時計から声が・・・！！」

「おい、エイダ。みんなに一から説明してやれ。」

「エイダ・・・？それがその腕時計の名前なんですか？」
『私は、腕時計ではありません。』

『私は、オービタルフレーム、ジェフティに搭載されている、独立型戦闘支援ユニット、エイダです。』

「戦闘支援・・・要するに、戦闘用AIってこと？それにオービタルフレームって・・・？」

キラがたずねると、エイダは肯定の意を示した。

『概ね、その通りです。オービタルフレームは、メタトロンを基本構成要素とした、機動兵器のことです。』

「ちよつと待ちなさい！」

先程の女性兵士（名前はマリユ・ラミアスというらしい）が話をさえぎった。

「メタトロンって言ったわね・・・。ふざけないで！アレがどういうものか、解って言うてるの!？」

『あいにく、冗談を言うプログラムは設定されていません。』

「あ・・・メタトロンって何ですか？」

「メタトロンはな、言ってみりゃ、火星でしか取れないレアメタル、ってとこかな。」

「よく知ってるわね・・・じゃあ、これも知ってるはずよ！メタトロンは、あまりにも希少で、実用段階に至ってない事ぐらい！」
メタトロン。

もともとは『神の代行者』を指す名を与えられたその鉱物は、シリコンをベースとした高分子金属の複合体で構成されている。

そして、その量が多量にも少ないことでも知られている、まさにレアメタル中のレアメタルである。

火星で無ければ見つからない上、埋積量が少ないのか、その絶対量が、十分な研究ができるほどにないという理由から、運用方法が決まらず、連合、プラントともに実用段階に至っていないのだ。

『事実です。実際、ジェフティにはメタトロンを使用した技術の多

くが使用されています。簡単なリストアップを行ってもよいですが、希望しますか？」

「止めとく。それって絶対相当な数になるぜ。」

『了解しました。』

「勝手に話を進めないで！」

マリューが怒鳴りつける。このままでは、泣くか、ヒステリーでも起こしそうな勢いだ。

「……とにかく、詳しい話は後で聞かせてもらっわ。それに、あなたたちをこのまま解散させるわけには行きません。事情はどうあれ、軍の最高機密を見てしまったあなたたちを……」

「断る。」

「な……!!！」

堂々と臆面も無く言うデイビッドに、マリューはたじろいだ。

「そういつて、俺からジェフテイを取り上げようつてハラのようにだが、そいつは無理な話だな。まず、こいつにはバイオメトリクス認証が施されている。つまり、俺以外の人間にはジェフテイは動かせない。」

何回も出鼻をくじかれ、マリューは本当に泣きそうだ。

「第二に、それじゃあ操縦者が、ランナーがいなけりゃいい、て思うかもしれないが、それも残念。俺が殺されるようなことがあったら、ジェフテイはすぐさま自爆する。」

「そんな……!!！」

マリューはうなだれる。ここまでくると、キラも同情するしかない。「ジェフテイには半永久機関が搭載されている。自爆なんてしたら、相当大変なことになるぜ。血のバレンタインなんてメじゃないほどのな。」

ここまで言われて、マリューは半永久機関とデイビッドがとんでもないことを言ったのに気づくことすらできない状態だ。

キラたちは次々と現れる単語に驚きながら、マリューに対して同情していた。

常識をここまで覆されて、彼女のようにならない人間はいないだろう。

「さて、そろそろ聞かせてもらおうぜ。あんたら連合と、連合製のMSが、どうして中立のはずのここにいるのかを……。」

そこまで言いかけたとき、背後から爆発が起きて、一同は（マリユもどうにか立ち直って）振り返る。

爆発があっただろう場所から、煙や炎と一緒に、1機のMSとMAが現れた。

MAのほうは、武装の殆どを破壊され、満身創痍、といった様子だ。

しかしデイビッドは、その中でただ一人、MSの方を驚愕の目で見つめていた。

第2話・「その名はジェフティ」（後書き）

今回はマリユールさんがかわいそうな回になりました。

デ「ちよつといいか。」

何？

デ「MGSの次はオーズか！」

キ「ネタに走りすぎだよ！」

ははは。。。

デ「しかも俺の渡した携帯食料つてあれだろ！カロリーメイトか！」

そうです（笑）

キ「うん。。。何か悪意を感じた。。。。」

いやいや、そういわずに次回予告お願いだよ。

キ「もう。。。。」

さてそろそろ次回予告！

キ「こんにちは！牛井はつゆたく卵入りで頼む方、キラです！

MS！？こんなときにまた。。。！

あれ。。。？デビッドさん、どうしたんですか？

。。。アスラン！やつぱり君なのか！！

次回、SEEDエンダース！「崩壊の大地」！

次回も見てくださいね！」

そろそろ他のキャラもやりたいな。。。。

第3話・「崩壊の大地」・前編（前書き）

今日はずいぶんと長い文章になりました。しかも前編だし。デ「そうか？結構普通かも知れねえぜ？」ま、それを感じるのは読者様しただけだね。それでは本編をご覧ください。

第3話・「崩壊の大地」・前編

火星。

太陽系第4番惑星と呼ばれ、地球のすぐ隣にあるそこにも、すでに人類は根を下ろし、その営みを行っていた。

こんな話がある。

アメリカのとあるラジオ局が臨時ニュース仕立てでSF小説をラジオドラマにした。

その内容は、『火星から来た地球外生命体が、アメリカを襲撃してきた』といったものだ。

それはあまりにもクオリティの高いものだったが、その肉薄した迫力に聴衆は現実のことと思ひ込み、一大パニックとなった。

この話を、当時のメディアアリテラシーの低さを指摘する題材とするのはたやすい。しかし、少しだけ視点を変えてみれば、これは我々地球人にとって、火星がどれだけ身近なのかを示している、とは取れないだろうか？

しかしながら、それでも火星と地球の距離はやはり遠く、二つの惑星の環境の違いもあり、火星に住まう者と地球テラナーに住まう者の心の距離もこれに比例することになった。

それはすなわち、テラナーに対するマーシヤンへの関心の薄さもあらわしている。ならば、火星が地球に内緒で兵器を製造しても、そして先程の話のような事態が現実のものとなっても、なんら不自然は無いだろう。

デイビッドは、突如現れたMS、その気配に驚愕した。

全身が強烈な寒気に襲われ、それなのに体中から真夏の中にいるのかと言っほどの汗が吹き出てくる。

言ってみれば、それは無理やり押さえつけられた強烈な『悪意』、あるいは憎しみだ。

例えるならば、ホースからあふれる水を、先端を押さえることで無理やり水が流れるのをとめ、それでもなお勢いよく飛び出る水を浴びている様だ。

そしてそれは、強く押さえつけられているために、今にもホースがはちきれそうになっているのも感じられた。

「・・・さん、デイビッドさん!!」

キラに呼びかけられ、ようやくデイビッドははっとなった。

「おい、キラ!! とりあえずあのMSを如何にかする!!」

「え・・・!!」

「よくわからんがあいつはやばい!!」

「わ、わかりました! ぼくも・・・」

「何言ってるんだ! お前のストライクの武装でどうにかなる相手じゃない!!」

「でも・・・!!」

『お話の途中失礼ですが、先程の発言に対して、訂正の必要あり、と判断します。』

突然、エイダが会話に割り込んだ。

「どついうことだ。」

『ストライクには、ストライカーパックと呼ばれる追加武装を装着することで、機体の性能を変更できる、ストライカーシステムが搭載されています。それを使用すれば、ストライクでも十分な戦闘が可能です。』

エイダの言葉と同時に、デイビッドの腕の多機能端末から、立体映像が現れる。

そこには、ストライクと、3つのバックパックのような何かが映っている。

『現状では、コロニーへの被害とそれによる不都合を考慮し、近接戦闘用パック、ソードストライカーの使用を提案。』

「よし、キラ、じゃあお前はそれを使え。俺の援護を頼む。」

「わかりました。」

「ちよ、ちよつとまてよ！」

そこに、キラの友人の一人、ツールが割り込んだ。

「キラを戦わせようつてのかよ！」

「現状はお前が思っている以上に悪い。それに、」

そこでデイビッドはふつと笑う。

「心配すんな。俺はこいつのボディガードだ。ちゃんと守ってやるよ。」

そこでマリユートのほうを向くと、

「というわけだ。こいつを安全なところまで送ってやれないか。こ

いつらは、俺のクライアントの大事な友人だからな。」

「デイビッドさん……。」

キラは少し感動したようにデイビッドを見つめている。

「……わかりました。ただし、条件があります。」

「なんだ？」

「そのMS、ストライクは、できる限り無傷で戻ってこれるようにしてください。……それと、あなたも。忘れないで。もともとそれは、私たちのもので、あなたには、聞きたいことがいろいろあるの。」

「了解だ。」

一見非情に聞こえるマリユートの言葉、しかし、そこに自分たちの心配が隠されていることを、デイビッドはしっかりと感じ取っていた。

ソードストライク（ストライクがソードストライカーを装備した状態）とジェフティが、先程のMS、シグーの元へ飛んでいく。

（あれは……ストライクか！）

それを確認して、MA　メビウスゼロに乗っていたムウ・ラ・フラガは、これ以上の戦闘ができないことを確認し、戦闘宙域を離れた。

（あのMS……なんだ？）

いや、MSであるかどうかも怪しい、そんな奇妙な機体

ジ

エフティを見やる。

(いや・・・それ以上に)

その機体から感じるもの。それは、先程のシグーのパイロット、ラウル・クルーゼと見えたときのそれに近いながらも、本質的にまったく別物の感覚。

(ちよつと・・・面白いことになるかもな。)

ムウはほくそ笑んだ。

一方、ジェフティとストライクがシグーと退治したとき、エイダが話しかけてきた。

『敵、ザフト製MS、ZGMF-515、『シグー』です。ジンより高性能の隊長機ですので、注意してください。』
すかさず、ジェフティがしかけた。

パドルブレードを展開し、シグーに切りかかった。

しかし、シグーはそれを受け止めず、一気にバーニアをふかして回避すると、すかさずライフルを連射した。

「くっ！」

ジェフティがライフルの雨をもろに受ける。しかし、ジェフティには衝撃以外の何の影響も受けていない。

言ってみれば、これがメタトロンの硬さ。ジェフティの強さだ。

メタトロンでできた装甲は、基本的には押せばへこんでしまうほど柔らかい。

しかし、衝撃やエネルギーの攻撃に対しては、殆ど無敵といって良いほどの強さを見せるのだ。

そこに、OF特有の柔軟性、反応速度が加わり、MS以上の性能が約束されるのである。

ジェフティの後ろから、ストライクがロケットアンカー『パンツァーアイゼン』を発射し、シグーの腕をつかむ。

「いけえっ!!！」

キラは、ストライクの左肩の『マイダスメッサー』を引き抜く。

マイダスメツサーは、本来はビームブーメランとして使用する武装であるが、キラはそれを投げつけず、短刀として使用し、シグーの右腕を切り落とした。

「とどめだ！」

そこでジエフティが入れ違いにパドルブレードを構え、シグーに突き刺そうとした。

そのとき、轟音とともに巨大な『何か』が、山を突き破って現れた。
「なっ！！！」

『何か』、それは巨大な戦艦であった。

それにデイビッドが驚き、そこに一瞬の隙が生まれる。

すかさずシグーの回し蹴りがバーニア全開で飛んできた。

「うわっ！」

「くっっ！！！」

かなり近づいていたために、2機とも蹴り飛ばされ、一瞬、意識を飛ばされた。

そのままシグーは全速力で退避していった。

『状況からすれば撃墜可能でした。先程の事態も決定的な不確定要素とはいえません。一言で言えば、無様です。』

エイダの評価が下る。

「・・・手厳しいな。っと、キラ、大丈夫か。」

『ええ、まあ。それにしても、エイダって、かなり口さがないですね。』

「はは、まあな。ところでエイダ、あの戦艦は何だ。」

『強襲機動特装艦、アークエンジェル。G計画と平行して建造され、Gの搭載を想定した構造になっています。』

「連合製か・・・。」

『その通りです。』

『アーク、エンジェル・・・。』

キラが思わずつぶやく。

実際、その輝くような白いカラーリングと、ある種の美しさを秘め

たフォルムは、確かに大天使の名を冠するにふさわしい。
「俺としちゃ、天使エンジェルより女神ヴァイナスを御所望、てとこだがな……。」
心なしか、キラにはデイビッドの軽口がどこか切実さを感じさせる
かのように聞こえた。

「よかったあ、キラ！」

「無事だったんだな！」

アークエンジルの格納庫に入って聞いた第一声はそれだった。

キラの友人たちが駆け寄って、キラの無事を確認するのを、デイビッドは少し嬉しそうに眺めている。

「そうだ、あ、あの……キラを助けてくれて、ありがとうございます。」

トールが先程の失言を反省するかのようにお辞儀をする。

「いいさ。これも仕事のうち、ってな。第一、ちよつとしたアクシデントこそあったが、むしろ、こっちの方が助けられたよ。」

「い……いえ。それにしても、ジェフフエイってすごいですね。P
Sズシフト装甲でもないのに、あの銃弾の雨に耐えられるなんて。」

「まあな。」

『当然です。本機は、ビームにも一定の耐性を持っています。あの程度、蓄積ダメージの大きさを考慮に入れても、問題ありません。』

「え……。」

「び、びーむう!?」

「なんとというか、ますます化け物ですね……それ。」

皆が口々に感想を漏らす。

「あのさ、そろそろいいかな。」

後ろから呼びかける声を聞いて、デイビッドたちは声のしたほうを振り向く。

そこには、軍服を着た、短い金髪の男がいた。

顔立ちは端正だが、どこか軽薄そうな印象を受ける笑顔でこちらを見ている。

「へえ、こいつは驚いた。」

そして一呼吸置いた後。

「きみたち、コーディネイターだろ？」

空気が変わった。

「……はい。」

「いや、違うぜ。」

それぞれの答えに、回りの兵士たちに動揺が走る。

当然だろう。

民間人がストライクをあそこまで見事に操縦した上、その民間人がコーディネイター敵だったのもそうだが、それ以上に得体の知れない謎のMSは味方ナチユラルなのだから。

正直なところ、銃を構えたいのが本音だろうが、デイビッドがさりげなくキラの盾になるような位置に立っているのでそうすればナチユラルであるデイビッドに銃を構える格好になる。

「おいおい、あんたいい年して人をからかうのは止せよ。さっきの戦闘、見せてもらったけど、どう見てもコーディネイターのそれだぜ？」

「言つとくが本当だぜ？あと、俺はこれでも26だよ。」

「へえ、そいつは失礼した。」

「じゃあ、あなたは何者？」

マリユールが尋ねてくる。

しかし、それは実のところ、この場にいた全員の疑問でもあった。

「あのよ、さつきも言ったが、ジェフティは主にメタトロンで構成されてる。んで、メタトロンは火星でしか今のところ採れない。そこから導き出される結論は……わかるな？」

そして、キラが一番早く、
実際のところ、誰もがもつと早く
気づくべきだったのだが
ある一つの事実に気がついた。

「デイビッドさん……もしかして、マーシャンなんですか？」
さつき以上の同様が、格納庫の内部で走った。

「待て！！その少年はまだしも、何でマーシャンがこんなところ

にいます！」

マリユールとは別の女性仕官がデイビッドに詰め寄る。

「とにかく、あなたにはまた個別に尋問することになりそうね……

」。

マリユールが深いため息をついた。

艦長室に、男女がちょうど二人ずつ、合計4人が向かい合う。

そのうち、艦長の座る椅子に、マリユールが鎮座している。

「なんと言つか、あんたには全く似合わねえな。」

「……自覚はしてるわ。」

「現状では一番適した人間が大尉しかいないのです。似合う似合わないの問題ではありません。それと貴様。」

もう一人の女性　　ナタル・バジールがマリユールに意見した後、書類の束を見せながら、デイビッドを睨みつける。

「貴様がよこしたあの機体の詳細データ……これは全て本当だ、とでも？」

デイビッドはいたって余裕な顔で肯定の意を示す。

「ああ、間違いないな。」

「ふざけるな！！！」

ナタルが怒りをあらわに、デイビッドに書類の束を投げつけた。

「こんなふざけた内容！信じろという方がおかしい！！！」

『詳細データ』、それはジェフテイの内部にあらかじめ入れてあったジェフテイの設計図を含むいわば、取扱説明書のようなものだ。

どうやら『神』が、もしものとき（まあ、本来ならデイビッドが操作に困ったとき、なのだろうが）のために用意したらしい。

しかし、驚くべきことに、デイビッドはそれを惜しげもなく見せた。勿論、何の考えも無いわけではない。

というのも、現状、地球軍、ザフト両軍にはジェフテイを作る技術が無い、という点をついたのだ。

ジェフテイには基本構成要素としてメタトロンが使われているのは

すでに話した通りだ。しかしジェフティの特徴はそれだけではない。ジェフティを作るための『技術』、それもメタトロンを軸として生み出されたものなのだ。

そして、地球、プランとともにメタトロンの研究は進んでないし、そもそもメタトロンの量が少ない。

つまり、地球上のどこにおいても、OFを作るのは不可能なのだ。結果として、設計図を見せられても何がどうなっているのかわかる人間は皆無だし、よしんば理解できたとしても、それを作るには素材が足りない、ということになる。

これでは、設計図を見せても、問題も何も無い。ナタルが怒ったのは正にそこだ。

要するに、デイビッドが言いたいのは、これはオーバーテクノロジーの塊です、ということなのだから。

「まあまあ、少尉もそんなに起こらないで。しかしまあ、気持ちはわからんでもないぜ、これは。」

もう一人の男　ムウが渋い顔をしながら先程の書類を拾い上げる。

「性質の悪いジョークだ、って思ったほうが普通だぜ。こんな御伽噺みたいな代物。」

『御伽噺ではありません。事実です。』

「・・・そこのお譲ちゃんも含めてな。」

マリユールが困惑したような面持ちで口を開く。

「確かに、私自身信じられません・・・。ですが、私はこの目で見てしまいましたから・・・。」

「まあ、艦長サンがそういつてんなら、確かにそうなんだろうけどさ。」

「しかし！このように見るからに胡散臭い男の話信じてることなど！！」

「・・・まあ、そこだよねえ・・・。」

ムウはデイビッドのほうを見やる。

デイビッドは、書類を投げつけられたことに痛がる様子も無く、欠伸までしている。

「だから、事実なんだよ。俺がマーシャンだつても含めてな。」

「なら、それを証明して見せる。」

ナタルが若干脅すような声色で言い放つ。

「無理だな。」

しかし、デイビッドはそんなことなど意に介さず、再び欠伸をした。「何？」

ナタルの額には、既に血管が浮かんでいる。

「俺は、マーシャンだが、向こうに問い合わせても、俺なんて知らないって言うだろうさ。何せ、実際に知らないんだからな。」

「どういうことですか？」

マリユールが尋ねる。

そしてこの後、デイビッドは彼ら3人にとってあまりにも信じられないことを口走った。

「俺は、ZOEの人間だったからな。」

デイビッド以外の3人が息を飲んだ。

ZOE、正確に呼ぶなら、ゾーン・オブ・ジ・エンダーズとなる。

彼らは、言ってみればマーシャン内部の秘密組織で、ほかのマーシヤンたちに隠れて、数々のレアメタル、及びそれに関連した技術を研究し、地球側に渡す組織である。

そして勿論、その恩恵はある程度地球軍も受けているために、極秘作戦であるG計画の関係者である3人も、その名前を知っていた、というわけだ。

「ZOEの人間だと!？」

ナタルが驚愕の声を上げる。

「おいおい・・・あんた、ZOEが何なのか判つてて言ってるワケ?」

ムウの質問にも、デイビッドは平然と答える。

「ああ、ついでに言っとくと、ZOEはもう無くなっちゃったんだ。」

「無くなった？」

「ああ、なんか、どっかのテラナーの連中が、吸収しちまったみたいだな。」

「で、何でお前がそのZOEの作った兵器に乗ってるんだ？」

「デビッドはムウの方向に顔を向ける。」

「確かに、あんたが本当にZOEの人間なら、結構な疑問が解決する。連中が俺たちに隠し持った技術があることも、その技術であれが作られたこともな。そのことに関しては確かに納得はあった。でも、それとこれとは話が別だ。普通ならそのどっかの組織とやらが持ってしかるべきものだろ。」

「そいつは簡単だ。その上の連中が潰しやがったのさ。OFの、開発計画をな。で、そいつが気に入らない連中が、OFの主だった研究を行っていたコロニー『アンテリア』を占拠、武装蜂起を行った。しかし、その結果は大失敗。ジェフティ以外の機体は全て破壊された。そして、俺はジェフティをどさくさに紛れて手に入れた後、そのままコンテナを偽装してヘリオポリスに入って、こうしてここにいる、ってワケだ。」

「その組織が、計画を凍結したのは何故？」

「そいつも簡単だ。まあ、簡単に言えば、採算が取れなかったのさ。実際、作られたOFもごく少数に終わってたし、後は殆どコンピュータでのシミュレーションだけ。殆ど結果が出なかつたんだよ。」

「あなたの話からすると、あなたは開発チームとは別のようすけど、どうしてジェフティを手に入れられたんですか？」

「俺はアンテリアで暮らしてたが、ZOEが吸収された後、上の連中のやり方についていけなかつたんだ。ところで、その武装蜂起をしやがった連中、俺を含む何人かを人質にしてな、もともといつらも気に入らなかつたのもあったが、そいつに本気で腹が立ったんだよ。で、うまいこと奴等の監視から抜け出せたから、まだ未稼

働状態にあつたジェフテイのバイオメトリクスを登録して、他の奴等に使えないようにしてやったんだ。ま、それが決定打になって、連中のテロは失敗したわけだが・・・、さつきも言ったとおり、俺は新しい上司についていけなかったんで、ジェフテイを行きがけの駄賃代わりに勝手にもらつて、火星を抜け出したと。」

勿論全て、『神』の作った設定だ。しかし、これは過去にさかのぼつて作られた事実でもあるために、嘘は言っていない。

「つまり、あなたは組織の裏切り者だということ？」

「・・・まあ、そうなるかな。でも、ま、連中も秘密組織な分、表立つて追つ手を出せないから、実際の所、たいしたことは無いだろうさ。俺がジェフテイを奪つたつてことを知ってるかどうかも怪しいいな。」

「結局のところ、あなたは何をしたいのですか？」

マリューが最後に核心的な質問をしてきた。
詰まる所、何よりもそれが一番重要だ。

それ次第で、この男を拘束するかどうか（処刑は自爆してしまうので行えないが）が決まるのだ。

「そいつは・・・キラ次第だ。」

「キラ？あのストライクに乗った少年のことですか？」

「ああ、実は、俺はあいつのボディガードになつたんだよ。ちょっと前に。だから、俺はクライアントの意向に従つて、俺は行動する。それだけだ。」

「あいつはコーディネイターだぜ？どうしてナチュラルのあんたがそんなに肩入れするんだ？」

「ま、理由はいろいろあるが、俺がブルーコスモス嫌い、つてのが一番の理由だな。」

「どういうことだ？」

デイビッドはいきなり身を乗り出しておかしそうに、

「だってよ、あいつらのスローガン、センスがねえにしてもひどすぎるだろうが。『青き清浄なる世界のために』ってんなら、町のご

み拾いからはじめた方がまだ建設的だろ。なあ？」

ジヨークをかました。ムウが思わず噴出すのを、ナタルがきつい目でにらみつけた。

「それに、あいつが最初にこの辺に来て世話になった相手、つてのもある。ま、あんたらにしてみれば、どっちにしろ、あいつの力を借りる必要があるだろうがな。」

「・・・どういうことだ。」
ナタルが険しい目で尋ねたのを、ムウが引き受ける。

「あいつの書いたOSだよ。みたか？あれ、どう見ても人間の、少なくともナチュラルの扱える代物とは思えねえよ。」
そう。

あの最初の戦闘時、キラはデイビッドの援護の下、速攻でOSを使える段階まで書き上げた。

勿論、その速さも十分に驚愕に値するレベルのものだ。

しかしながら、最も驚愕すべきは、そのOSによって引き上げられたストライクの『性能』だろう。

はつきり言って、余りにも極端なまでに引き上げられたその運動性能は最低限というよりはむしろ乗り手のいないモンスターマシンへとストライクを変貌させてしまっている。

だからといって、ストライク抜きでアークエンジェルを地球軍の宇宙坩地である月まで移送するなど、現時点で無謀としか言いようが無い。

それは、今彼らが置かれた状況に由来する。

デイビッドは艦長室への移動の間にエイダから聞かされたのだが、実は製造された『G』はストライクだけではない。

それぞれ目的、性能の異なる5機が製造された。そして、今手元にあるのは1機。

そう、つまるところ、ザフトが狙っていたのは、中立コロニーであるはずのヘリオポリスを襲ったのはGを奪うためだったのだ。

Gはそれぞれ、今までのザフトの機体を大きく上回る性能を持つ。

つまりそれは、戦況を変える可能性を持っている、まさに切り札としての可能性を持っていたということだった。

そして、その5機のOSが完成する前に、機体を奪い、現在の有利をなんとかしても維持する必要があったのだ。

しかし、それでもナタルは反論する。

「ですが！これ以上民間人、それもコーディネイターに最高機密であるGを触らせるなど……！」

「じゃあ、俺にのろくさ出ているのにならったの？」

ナタルが押し黙る。

確かに、ムウは地球軍のエースパイロットに違いない。

しかしながら、それはMA、それもその中で最大の性能を持つメビウスゼロに乗ったの話に過ぎない。

つまり、そんな彼をMSに乗せるのは、まったくの筋違いとしか言いようが無い。

「その通りです。使う人間を選べるほどの余裕が現在無いのは事実です。それに、奪取作戦が行われた時点で、もう機密とは言いがたい状態です。」

エイダが止めとばかりに追い討ちをかける。

ナタルはついに完全に沈黙し、話は終わったも同然であった。

「……で、俺はお前の警護をする延長線上として、このアーケエンジンジェルを守ることになったわけだ。」

デビッドは、今までの話を簡単にまとめ、キラたちに話していた。

「キラ、お前には後で正式に艦長サンからお願いされるだろう。お前がどうするか、言っとくが、俺は関与はしない。でも、この艦を降りる、って選択はやめたほうがいい。もうシエルターには入れそうに無いからな。」

デビッドの言葉を聴いて、キラの顔は一層暗くなる。

それを見て、デビッド派閥の悪そうに頭を書いたと、すぐに笑顔になってキラの頭を叩いた。

「大丈夫だ。お前がどんな選択をしようが、俺が守ってやる。絶対に。そういう契約だからな。」

そういわれて、少しだけ安心した様子を見せたキラ。

キラの目の色が変わる。『迷い』から、『決意』に。

「デイビッドさん。」

キラがデイビッドの顔を見上げる。

「依頼の取り消し、あるいは追加をしても良いですか？」

「取り消しはできないが、追加依頼なら受け付けるぜ。」

「わかりました。じゃあ、追加依頼をします。僕は、戦います。みんなを守るために。だから、デイビッドさんには、僕だけじゃなくて、みんなも、僕の友達も、守ってほしいんです。」

キラの瞳に迷いは無く、澄み切った瞳をしていた。

「わかった。クライアントの頼みだ。それくらい、聞いてこそそのプ

口だからな。」

「キラ・・・デイビッドさん・・・。」

トールたちが感激の声を上げる。

「さ、そういうことなら準備をしないと。とりあえず、残りのスライカーパックと・・・後はほかのコンテナに残った武器とかも探さないといけないんだ。キラは、艦長たちと話が終わってからにでも来てくれ。」

「はい。」

そういうとすぐにデイビッドはジェフティに乗り込み、アークエンジェルを出発した。

そのころ、ザフトの戦艦、『ヴェサリウス』から、要塞攻略用装備『D装備』を搭載したジンが、崩壊しそうなヘリオポリスに迫っていた。

第3話・「崩壊の大地」・前編（後書き）

デ「今回は殆ど解説で埋め尽くされてる感があるな。」

すいません……。ファン小説、というよりは殆ど完全リメイクの感じで書いてるもんだから、原作を知らない人でもわかるように工夫したらこうなりました。

キ「時系列も若干原作と前後してるよね。」

うん、まあ話を書いてたら自然とそうなったよ。

デ「ところでこの話ならではのオリジナル要素とかはあるのか？」

まあ、全部はいえないけど考えてあるよ。たとえばジェフティに武器を増やしたりとかね。

キ「増やす？」

まあ、SEEDの世界ならではの武器も使わせないと、さすがに基本武装とサブウェポンだけじゃきついだろうから。

デ「お前がな。」

う……。と、とにかく次回予告！今回はこの人！

「よお！！SEEDエンダースのハンサムでかつこいい方！ムウ・ラ・フラガだ！

いや〜にしても大変なことになったもんだねえ〜。

ん？あれは……。D装備！？

くそ！クルーゼのやつ！一体何を考えてんだ！

次回、SEEDエンダース、「崩壊の大地・後編」！また見てくれよ、子猫ちゃん！」

さあ、次は誰の次回予告にしようかしら……。

第3話・「崩壊の大地」・後編（前書き）

何とか後編完成。

今回はこの作品だけのオリジナルサブウェポンが顔出しするよ！

第3話・「崩壊の大地」・後編

「ん〜。やはりたいした物はあまり残ってないな・・・。」

ジェフティは今、瓦礫を書き分けながらMSコンテナを漁っていた。コロニー内部に残されたG 正式にはXナンバーというらしい

専用の武器を探しているのだ。

しかし、その殆どが先程の戦闘で壊れたらしく、（どうやらザフトは機体と最低限の武装しかもって行かなかったようだ。）使い物になりそうなものがなかなか見つからない。

「デイビッドさん！どうでしたか？」

なかなかお宝が見つからず少しうんざりしていたところにキラがストライクに乗ってやってきた。

「ああ、これが全然。いくらなんでも泣きたくなるな。少しはよさげな物があつてもいいはずなのに・・・お！」

愚痴りながら瓦礫を漁ると、ようやくお目当てのものが一つ見つかり、それを持ち上げる。

「お〜なかなか。」

それは1本の巨大な『剣』。

片刃で、その全長はジェフティも軽く超えていそうだ。

「へえ、大きいですね。」

『XM404、グランドスラム。長さを生かした遠距離からの斬撃、刺突を目的とした武装で、本来はX103、バスターに搭載される予定だったものです。』

「ほう・・・。」

「でもそれ・・・実体剣ですからね・・・。ストライクには、ソードストライクがあるから・・・。」

「そうだな・・・まあ、一応回収しておこう。」

そういうとデイビッドはグランドスラムを横に構える。

すると、あっという間に剣が小さくなって消えた。

キラは目の前の光景に息を呑む。

「え！？な、何なんですか今の・・・！」

『ベクタートラップ。メタトロン関連技術の一つです。スピンとエネルギーを与えられたメタトロンによって空間を圧縮、それを内部に物質を入れた状態で固定して、物質を収納する技術です。この機能により、ジェフティは武器弾薬の搭載量を事実上無制限とします。』

「へ・・・へえ・・・。」

キラは驚きの声を上げるくらいしかできない。

「ま、俺自身、いろいろと化け物じみているとは思ってるよ。さて、他には・・・。」

それから、宝探しはずいぶんといい調子で進んだ。

まず、X102、デュエルが使用する予定だったらしいレールバズーカ、及びその弾薬。

次に、MSの使ういわゆるモーニングスターと呼ばれる打撃系投擲武器。

これは、先程のバズーカ同様、デュエルが使用予定だったらしい。他にも、ジンのものを改良し、独自開発したマシンガン、遠距離狙撃用ライフルと、次々と武器が見つかる。

「・・・しかし、見事に実弾兵器ばかりだな、おい。もっとビーム兵器みたいな凄いの期待してたんだが。」

「仕方ないですよ。ビーム兵器だって無敵じゃないんです。MSのバッテリーを消費しますし。」

『その通りです。加えて、PS装甲には実弾兵器は確かに聞きませんが、決して無効、というわけではありません。被弾時には、通常時より大量の電力を消費し、バッテリー残量が規定値以下になるとPS装甲が解除されます。』

「へえ・・・。PS装甲って無敵じゃないんだな。」

「そんなこといったら、ジェフティなんか無敵以外の何者でもないじゃないですか。ビームにだって耐えるって言うし。」

「あ、そうか。でも、言つとくが無敵じゃないんだぜ？ ジェフティにはナノマシンでの自己修復機能があるから良いけど、そうじゃなきゃメタトロンを供給して修復しない限り、ダメージがどんどん溜まるんだからな。」

「いや、ナノマシンの自己修復とか・・・正直言つてそれもそれですごいですから・・・。」

そのとき、ジェフティのコクピット内でアラームが鳴り響く。

そしてスクリーンに『CAUTION』の文字。

「・・・敵か！」

『はい、機体コードから、ジンが4機、及びX303、イージスを確認。』

「Gか！」

『その通りです。一撃離脱の高速戦闘を想定した指揮官タイプの機体です。』

敵がこちらからも視認できる位置にまで近づく。

その中に、真紅のカラーリングがひととき目立つ機体が見えた。

「あれは・・・！」

「キラ！ どうした？」

一瞬、キラの様子がおかしくなったのを、デイビッドは鋭く感じ取る。

「い、いえ・・・あの機体・・・もしかしたら・・・。」

『警告、ミサイル接近。』

そのとき、赤い機体の後ろに控えていたジンが、担いでいたミサイルランチャーを構え、ミサイルが煙を景気よく噴射しながら迫ってくるのが見える。

「あんなものがコロニーに当たったら・・・。」

「させるかよー！」

すかさず、ジェフティの腕にマウントされたパドルブレード、その待機状態の『柄頭』に当たる部分から青白い光が飛び出す。

光はびったりミサイルの弾頭部分に当たり、ミサイルは大きな音と

赤い光を発して爆発した。

「すごい……！」

「感動するのは後だ！キラ！やれるか！」

「は、はい！」

『現在、ストライクの武装はエルストライカー、高速戦闘を目的とした、現時点での武装の中で、最もバランスがよい武装です。ミサイルの迎撃も不可能ではありません。』

「聞いたな！とりあえずあのミサイルを打ち止めにしてやれ！やれるな！」

「はい！」

すぐさまジェフティとエルストライクが、敵小隊に向かって飛び出した。

少し時を遡り、ここはザフトのナスカ級戦闘艦、『ヴェサリウス』。その作戦室で、6人の男性がモニターを固唾を吞んで見ている。

金髪の、顔の上半分を仮面で隠した男、ラウル・クルーゼ。

同じく金髪の、褐色の肌をした多少、いやかなり軽薄な印象を受ける雰囲気のディアツカ・エルスマン。

大していかにも厳格そうな顔つきの、銀色の髪をおかっぱのように切りそろえた、イザーク・ジュール。

緑色の髪をした、ともすれば女性と見間違っような幼い顔立ちの少年、ニコル・アマルフィ。

金色のショートヘアで、ディアツカとは対照的なまでに透き通るような白い肌、ミゲル・アイマン。

そして、藍色のセミロングの、いかにも真面目そうな顔の、アスラン・ザラ。

ザフトのエリート部隊、『クルーゼ隊』の面々がそろっていた。

「……どうおもっね。これは。」

クルーゼが口を開くも、他の誰も返すことができない。

彼らが見ていたのは、ストライクとは別の、MSのような『何か』

ジェフティだった。

「私は、あれはMSとは思えない。」

クルーゼが誰も発言しない、いや、できないのを確認して、話を続けた。

「まずあの外見からしてもそうだが、どう考えても技術系統が根本的なところで違つとしか思えない。それに、あの起動性能。明らかにGを超えている。」

その言葉に、聞いていた全員が身をこわばらせる。

地球軍が、ナチュラルがMSを製造していて、しかもそのMSが自分たちのそれを大きく上回る性能を持っている。それを聞いただけでもずいぶん驚いたものだが、それを奪おうとした矢先、このような機体が登場したのだ。

「ミゲル。君はどう思うね。」

考え事をしていたミゲルがいきなり話を振られて、多少戸惑いつつも、すぐに持ち直し答える。

「は、はい。俺も・・・正直に言うと、同じ意見です。認めたくは無いですけど・・・。」

正直、ミゲルにしてみればこの場にいること自体嫌だろう。

未確認の機体が現れたことに戸惑い、味方をみすみすやられ、すぐと退散したのだから、居心地が悪いことこの上ないはずだ。

「ミゲル。誰もお前を責められないさ。あんなものを見たら、な・・・。」

アスランが慰めるように言いながら、モニターを見つめる。

「そうですね。確かにあの性能、断片的ですが、あれだけでも隊長の意見の裏づけには充分です。」

ニコルもそれに続けて言う。実際、この意見はこの場全員の意見と断言してもいい。

「でもよ、じゃあ、どこがあれを作ったんだ？」

ディアツカが、おそらくはこれも全員が抱いていたであろう疑問を口にする。

「確かに。MSではないということ、そもそもあれが地球軍の作ったものかどうかも怪しい。だが、あれを作れるだけの技術力を持った組織なんて……。」

「そうでもないさ。」

イザークの意見にクルーゼが口を挟む。

「どうということですか？」

「いるだろうか？我々や地球以外で、あれだけのものを作れる、高い技術力を持っていそうな連中が……。」

その言葉の意味することに一番早く気づいたのはアスランだった。

「まさか……火星ですか!？」

その言葉に全員が動揺した。

「そうだ。ありえん話ではないだろうか？」

「しかし！なぜマーシャーンが……!！」

「さあな。私にもそれはわからぬさ。だが、兎に角、あれはストライクに味方している。なんにせよ、注意せねばなるまい？我々が足つきを相手にする以上はな……。」

「足つきを追うんですか!？」

イザークが驚きの声を上げる。

「ああ、ストライク1機だけでも、あれが月についたら大変なことになるのは目に見えている。ならば、不安の種は早めにつんだ方が良いだろう？それに、今、少なくともストライクを倒せるのは我々だけだ。いや、君達だけだ、といった方が正しいかな？」

そういつて、ミゲル以外の4人を見やる。

その視線に、アスランだけが少しだけ狼狽したように見えた。

あの後、アスランはD装備を施したジン3機、そして改修の終わった彼専用のジンに乗ったミゲルとともに、再びヘリオポリスに来ていた。

しかし、その顔には動揺の色が、隠しようもなく表れている。

(キラ……あれは本当にキラだったのか?)

あの時、ヘリオポリスでGを奪取しようとしたとき、地球軍の兵士とともにいたのは、紛れも無く自らの幼馴染の、親友のキラだった。(何で、あんなところにキラが……)

キラと最後にあったのは、3年前、自分がプラントに行くとき、選別にと小型ロボット、トリイを手渡して以来だ。

あの日、自分たちがあのような形で再開するなど、どうして思えたらう。

だが、二人は出会ってしまった。その事実を変えられず、今もこうして、自分がここにいる。

自分が最初に乗っていたからという、半分成り行きのような理由でパイロットを務めることになったイージスに乗って。

そして今、彼はあのときのモニターに映る映像を見たときと同じ驚きを感じていた。

味方の撃ったミサイルを『ジェフティ羽付き』がいとも簡単に打ち落としたのだ。

「おい、アスラン！何ぼつとしてる！」

ミゲルからの通信でようやく正気を取り戻す。

「す、すまない。」

「まったく、何だつてんだ。ん？こいつはまるであの時の……ああもう！止めだ止め！なんか悪い予感しかしねえ！！」

アスランはミゲルの言っている意味がわからずにいると、羽付きとストライクが接近しているのがみえた。

(キラ……！)

思わず、通信機の周波数をストライクに合わせる。

確かめなければならない。あれに乗っているのが、本当にあのキラなのか。

その衝動がアスランを動かし、その声帯を震わせた。

「キラ……キラ・ヤマト！」

『キラ……キラ・ヤマト！』

通信機からの声に、キラははつとなる。

「アスラン?・・・アスラン・ザラ!?」

キラはその声に驚きを隠せない。

アスランは、今までの生涯で一番の親友だった。

言い過ぎでもなく、本当にそうだった。

今でも、彼の作ってくれたトリーは、自分にとって、一番の宝物だ。そのアスランが、やさしくて争いごとの嫌いだったアスランが、ザフトの、しかもMSのパイロットとして戦っている。信じたくなかった。どうしても、何が何でも。

しかしその声は、声変わりが進んでいたけれど、紛れも無い、アスランの声だった。

『やはりキラ?キラなのか?』

その言葉を聴いて、キラは確信した。してしまった。

あれはアスランだ、と。

「なぜ・・・なぜきみがっ!!」

その周りでは、デイビッドが次々とミサイルを打ち落とし、キラもそれにあわせてミサイルを落としていく。

ミサイルを落としながらも、キラは感情のままに叫ぶ。

「ヘリオポリスに・・・中立のコロニーに、何でこんな酷いことを・・・!!」

しかし、キラたちの健闘もむなしく、もともと限界を迎えていたらしいコロニーは、大きく開いた穴に耐え切れず、亀裂を走らせていく。

『お前こそ・・・どうしてそんなものに乗っている!?!』

コロニーの崩壊は、もれ出た空気の流れを発生させる。

『コーデイネイターの君が・・・なぜ地球軍のMSに・・・!!』
爆炎が上がり、轟音が響き、それらが乱気流に乗って崩壊をさらに加速させる。

「うわあああああ!!」

ストライクが気流に流され、無茶苦茶な回転を伴って流されていく。

「キラっ!!」

ジェフティがストライクを助けようとバーニアを全開にして近づこうとする。

その時、オレンジ色のジンが、ジェフティめがけて飛んでいった。

『待ちやがれえっ!!』

オレンジのジンが重斬刀を構え、乱気流の中、ジェフティめがけて飛んでくる。

「あれは!!」

『ザフトのエースパイロット、通称、『黄昏の魔弾』、ミゲル・アイマン専用のジンのカスタムタイプです。』

しかしデイビッドには相手をかまう余裕は無い。

「邪魔だあっ!!」

そしてデイビッドは一気に相手の方に近づき、そしてそのジンを『掴んだ』。

ここで言うところの『掴み』とは、ただ相手を掴むことをあらわさない。

ジェフティのベクタートラップは、基本的に動かない物体を収納することを前提にしている。

逆に言えば、空間内部でもがこうとすると、圧縮された空間学位だけ、脱出されてしまうため、収納は不可能である。

しかし、だからといって、捉えることができないわけではない。

この『掴み』は、ジェフティがマニピュレーターで直接触れている間は、相手の周りの空間後と掴むので、ほぼ完全に相手の動きをとめることができる。

そして今、ジェフティに掴まれたジンは、完全に動きを止められ、もがいている。

『・・・!何だよこれっ!!』

「そのまま寝てる!!」

そういつてデイビッドはジェフティの操縦桿に指令を送り、ジンを

ミサイルの切れた一般機に向かって投げつけた。

なす術も無く投げ飛ばされたジンは、そのまま味方の方に一直線に（この乱気流の中で）激突した。

その時、運悪くオレンジのジンの重斬刀がコクピットに突き刺さり、オレンジの機体が乱気流に飛ばされると同時に、不幸なパイロットは爆炎の中に掻き消えた。

デイビッドにはそんなものを見ている余裕など無く、乱気流に流されるストライクを追いかけようとしたが、激しい空気の流れには勝てず、結局ジェフティもコロニーの外、真つ暗な宇宙に投げ出された。

「うおおっ!?!」

激しい乱回転に飲まれ、デイビッドの意識が遠のく。

デイビッドは、すでに一度死んだ身でありながら、臨死体験とはこういうものかななどと、くだらないことを考えながら、暗い闇の中に落ちていった。

第3話・「崩壊の大地」・後編（後書き）

いや〜大変だった。

デ「第3話は全体的に解説が主の回だったな。」

まあ、序盤だからどうしてもね。

キ「そういえば、今回ミゲルが専用機だね。」

ああ、そこはちょっとした俺の趣味。と言っかお遊びかな。

デ「あとミゲルが何か生きてるっぽいな。」

そうです。やっぱりこんな感じで二次創作らしい適度な原作プレイクを行いたいなーって思っつて。

キ「ミゲルが生きてるのには何か理由とかあるの？」

いや、それはこれから生き残る予定のキャラたち殆ど全員に当てはまる理由だからここではいえないね。

キ「そっか。」

ミ「やっぱり俺が大人気だからだろ！」

いや、だからいえないっつてば。

デ「後何よりあれだな。俺専用の武器がちらほらと……。」

キ「でも使うときあるの？公式のサブウェポンもまだ出てないのに。」

まあ、予定はあるよ。どこで使うかとか、誰に使うかとか。

でもまあグランドスラムを愛用しそうだなー。このまま行くと。

そろそろ次回予告！

「こんにちは。SEEDエンダースの某磁石入り絆創膏が手放せない方、マリユール・ラミアスです。

キラ君！デイビッド君！無事なの！？

よかった……。でも、あのシエルターは何？

回収！？ちよっと待って！今アークエンジェルにはそんな余裕は……。

次回、SEEDエンダース、「サイレントラン」。

さて！次回もサービス、サービスう！」

デ「最後でネタに走ったぞこいつ！」

そろそろ二回目の設定書く時期かなあ・・・。

デ「話をそらすな！」

ご意見、ご感想をお待ちしております。

デ「だから話を聞け！て言うかそれ最初から言つべきことたるそれ

！だから感想がなかなかこないんだよ！」

正直ちよつと寂しかったです。

デ「自業自得だ！」

第4話・「サイレント・ラン」(前書き)

今回は1話ですみました。

デ「結構短いな。」

まあ、比較的、ね。

それでは本編をどうぞ。

第4話・「サイレント・ラン」

真つ暗な宇宙。

そこは、我々が知るどの夜空とも違う。

星々が瞬いているわけでも、真つ暗な中に月がぼつんと浮かんでい
るわけでもない。

そこには、まさに死んだ光しかない。

激しく自己主張することも、かといって影に隠れるわけでもない。

ただそこに『ある』だけの光達。

その中で、飛び交うヘリオポリスの残骸たちは、例えるならシマウ
マの群れの中にかばがいるくらい不自然な光景だろう。

その『残骸』のひとつが動き出す。

勿論、それは先程までコロニーを支えていたシャフトでも、コロニ
ーの大地であった土の塊でもない。

その青い人型は、むしろコロニーの中に『いた』といったほうが良
い。

『残骸』 ジェフティのコクピットの中で、デイビッドは目を
覚ました。

「く、うとうとう……。あゝ気持ち悪い……。」

『メンタルレベル、バイタルレベル共に低下。酔い止め薬の服用を
提案。』

「いや……。そいつは後でいい。と……。とりあえずキラを……
。」

『前方にストライクと、多数の動体反応を確認。』

「多数？」

疑問に思いながらも、ジェフティのモニターを見やると、ストライ
クと、円筒形の『何か』。

「非難シエルターか……。」

『そのようです。どうやら、推進部が故障している模様です。』

「なるほど？おい、キラ、聞こえるか？」

「あーデイビッドさん！よかった！無事だったんですね！」

「無事じゃない。」

「え？」

「さつきから気持ち悪くて適わん。」

「ああ……。そんなことより、これなんですけど……。」

キラは苦笑しつつも、ストライクの抱えているシエルターを見せる。
「ったく……。こんなタイミングで壊れるたあ……。メンテちゃん
とやってたのか？とりあえず、エイダ、アークエンジェルの位置を
確認して、ストライクにも情報を転送。」

『了解しました。』

その時、デイビッドの目に、宇宙空間を漂うオレンジ色の機体が見えた。

「貴様ら……。武器を拾って来いとは行ったが、人を拾って来いと
言った覚えは無いぞ。」

ナタルがいらいらしながら愚痴をこぼす。

「おいおい、俺たちは人道的観点から難民救助を行っただけだぜ？」

「貴様のような胡散臭さの塊のような男がいうことか！第一、お前
が拾ったのは難民ではなく捕虜だろう！」

デイビッドのからかいに、ナタルがとうとう、といってもあまりに
早すぎるタイミングで怒鳴った。

マリユーは少し疑問に思う。

個別尋問の時もそうだが、ことデイビッドを相手にすると、ナタル
の沸点は異様なまでに低い。

確かに、この男はなんと言うか、どうにも信用しきれないというか、
かなり軽薄なところがあるのは確かだ。

しかし、そういった面では、ムウも大して変わらない。

せいぜい、軍人らしい、真面目な一面を垣間見せてくれる程度だろ
う。

そこまで考えて、マリューはようやく思い至る。

あるいは、そこが彼女は気に入らないのではないか。

一方は、エリートコースを進む型にはめたような軍人。

もう一方は、何を考えているのかわからない、完全な自由人。

そもそも根本的なところが水と油なのだろう。少なくとも、真面目

一辺倒のナタルにとっては。

しかし、彼女の言うことも判らないではない。

彼が運んできたのはシエルターではなく1機のジン。

それもオレンジのカラーリングから、専用機と判る。

普通の状態なら喜ぶべきことだろう。『これで敵情がわかる』と。

しかしながら、今は普通の状態ではない。余裕が無いのだ。

今のアークエンジェルのとおりあえずの目標は、ことと月本部の間の

中継地点、衛星『アルテミス』に行くことだ。

しかし、それには重大な問題がある。

アルテミスは、地球連合の一角、ユーラシア連合の所属だ。

対して、アークエンジェル、というかG計画自体は、大西洋連合の

主導で行われていた。

その何が問題なのかというと、状況が状況であるため、今のアーク

エンジェル、ストライクには友軍認識コードが無い。

それはつまり、所属の違うアークエンジェルでは、アルテミスに味

方と認識されないかもしれない、という問題があるのだ。

そこにこの捕虜である。

さすがにこれを見て、アークエンジェルを敵艦とするような、安っ

ぱいミステリーのお約束のような事態にはならないだろうが、それ

でも向こうの心象が大きく悪くなる危険がある。

そうでなくとも、捕虜である以上、食事も用意しなければならず、

そのことを考えても、この艦には難民がいるわけで。

はつきり行つて、迷惑にしかない、というところ少しばかり言います

ぎか。

兎に角、難民も含めて、面倒なことになりそうだと、マリューは頭

を抱えた。

デイビッドとナタルは、いまだに言い争いをしている、いや、正確にはナタルが一方的に怒鳴りつけていて、デイビッドはそれをのりくらしとかわしている。

マリューは再び頭を抱えた。

結局、あのジンは格納庫の隅に追いやられることになり、捕虜も、艦内の牢獄に入れられた。

捕虜　ミゲル・アイマンに対する尋問は、艦長達にそれだけの余裕がない、ということと結局行われなかった。

ミゲルは、「ナチュラルどもの世話になるなんて」などといっていたものの、結局大人しくしていた。

そうした事があった後、デイビッドは、艦内をうろついていたふと、キラが窓を眺めているのが見えた。

デイビッドは、窓を眺めるキラのその雰囲気を見逃さなかった。

「……どうかしたか？」

「あ……。」

キラが声を漏らす。

キラの心は今、再び『迷い』の色を見せていた。

それなのに、キラは無理に笑おうとする。

「だ、大丈夫ですよ。ちょっと、疲れてるだけ……。」

「嘘付け。お前、迷ってるだろ。」

「え！？そ、そんなこと……。」

キラは困惑した表情になる。

「良いから話してみるよ、何かあったんだろ？あの、イージスのパイロットと。」

「!？」

確信を突かれたのか、キラは驚愕した。

「……やはりな。」

「ど、どうして……。」

「いつたる。俺の勘はよくあたるんだ。」
キラは黙り込む。

「・・・まあ、強制はしないさ。俺はあくまでボディガードで、お前の教育係でも、親でもない。だが、ここはもう、戦場だ。」
デイビッドの言葉に、キラが身をこわばらせる。

デイビッドの口調は、すでにいつもの軽さをなくしていた。

「お前を守るって決めたから、俺はここにいる。だから、俺は何も知らないでいることはできないんだ。いいか。ボディガード、ってのは、ただ身の回りにいて守れば良いってもんじゃない。対象がどんな行動をするか、どう考えるか、何をしたいか。そいつがわかって、先読みして行動できなきゃいけない。」

キラが俯いた。

『迷い』が大きくなる。

「結局の所、俺たちに必要なのは『信頼』だ。時には、仕事の関係を超えた、な。お互いにとって、そいつが何より重要なんだよ。」
キラはデイビッドの顔を見上げる。

「守るってのは、力があれば良いってもんじゃない。力も必要だ。でも、そこに思いがなきゃ、結局何も守れない。だが、俺たちの関係がもともと仕事である以上、そういつたもんがおいそれと簡単にできるわけじゃないんだ。・・・わかるだろ。」

キラはすでに理解していた。

デイビッドの言うとおり、彼が自分を守るためには、まず自分たちが信頼してないといけない。ここが戦場である以上、なおさらに。そして、戦場（いくさば）にいることを選んだのは、ほかでもなく自分だ。

「・・・友達、だったんです。」
ようやく、キラがポツリポツリと語り始めた。

「アスランとは、僕が小さいころ、月の幼年学校にいたところからの付き合いでした。」

そして、キラはアスランとの思い出を語り始めた。
自分たちが家族ぐるみで仲が良かった事、

アスランが昔から電子工作が得意だった事、
そして、3年前、アスランがプラントに引っ越す際、鳥型ロボットのトリイをくれたこと。

「・・・その、トリイってのは？」

「ここにいますよ。」

見ると、キラのそばにいつの間にか緑色の小鳥がいた。

小鳥はデイビッドを見やると、かわいらしく首をかしげ、これまたかわいらしい声で『トリイ』と鳴いた。

「大事にしてるんだな。」

デイビッドが微笑んだ。

「友達なんです。・・・今でも。」

キラも微笑みで答えたが、すぐに暗い面持ちになる。

デイビッドは窓の景色を眺める。

「キラ。俺はお前とボデイガードの契約を結んだ。だから、俺は戦うのやめるつもりはない。」

トリイが羽ばたき、いつの間にかどこかに飛び立っていく。

「だから、そいつと戦うこともあると思う。」

「・・・。」

「その時、お前たちを守るためにどうしても撃たなきゃいけないときは、俺は誰であろうと撃つ。」

キラが身をこわばらせた。

「俺はお前のボデイガードだ。だから、俺はその仕事を全うする。」
デイビッドがキラのほうを向く。

「だが、もしお前がそのことで俺を許せない、ってことになるんだ
ったら、俺に復讐してもかまわない。」

「！！！」

キラが驚いた顔でデイビッドを見る。

「俺は抵抗も、恨むこともしない。おとなしく殺されてやる。」

デイビッドは窓にもたれかかった。

「・・・なあ、キラ。やめても良いんだぞ？元々、お前は地球軍と

は何の関係もない。それに、俺みたいな傭兵扱いでもない。」
二人の間に、少しだけ、沈黙があった。

「逃げたって良いんだ。元々お前はこの戦争とは何の関係も・・・」
「逃げられないですよ。」

「・・・え？」

キラの目に、ほんの少しだけ、決意が戻ってくる。

「デイビッドさんが、僕の事を守ってくれて、僕だけじゃない、友達も、アークエンジェルも、みんな守ろうとしてくれるのに、戦える僕がここで逃げたら、僕は、僕に一生顔向けできなくなるから・・・。」

迷いが無い訳じゃない。躊躇っていないといったら嘘になる。だけど。

「僕たちを守ってくれてるデイビッドさんを・・・守れるのは、僕だけだから・・・。」

「・・・そうか・・・。」

デイビッドの顔は、静かに、ただど確かに微笑んでいた。

二人は、長い間そのまま動かずにいた。

あの後、デイビッドはジェフテイのコクピットをあさっていた。

「デイビッドさん。何をしているんですか？」

「キラか。いや、ちよつとな・・・お！」

そういつてデイビッドはコクピットのハッチを空けると、そこから青い布のようなものが出てきた。

「ほう、これは・・・。」

デイビッドが取り出してみると、それはパイロットスーツであった。オレンジの下地に、青い装甲をつけたようなそのデザインは、まさしくジェフテイの姿のそれだった。

「これって・・・ジェフテイ？」

キラが思わずつぶやく。

「に、見えるな。お、ヘルメットもある。」

そういつてデイビットが取り出すと、ヘルメットもまさしくジェフ
ティを模していた。

デイビットがかぶり、バイザーをおろすと、ますますジェフティに
似ている。

違いといえば、ヘルメットになって、サイズが少々変化しているぐ
らいだ。

「へえ、かなり凝ってますね。それ。」

「だな。えっと、他には……。」

そういつてデイビットが取り出したのは、銀色で、先端にボタンの
ようなものがついた円筒形の、所謂ハイジェット型注射器と呼ば
れる注射器。

『医療用ナノマシン注射器です。ジェフティのコクピットに接続す
ることで、ジェフティの生成した医療用ナノマシンを注射器に注入
します。注射された場合、対象の自然治癒力が上昇するほか、薬物、
腫瘍などの悪影響を分解、無効化します。』

「すげえな。ジェフティがそこまでできるなんて。」

『ただし、副作用として、投与対象者に、一定期間の昏睡状態にな
ってしまいます。』

「昏睡って……どのくらいだ？」

『怪我の状態によってさまざまです。また、連続して投与する場合、
最低でも十時間の間隔をあけてください。』

「へえ……。」

そういつて注射器を元の場所にセットする。

その後に取り出したのは、

ヘッドカム型のコーデック3機、

デイビットがつけているものと同型の無限バンダナ5枚、

CQCナイフの予備数本、

医療用とは別のコーデック操作用ナノマシン注射器。

「なんていうか……改めてすごいですね、ジェフティって。いろ
んな技術を、一纏めに詰め込んだって言うか……。」

「流石にやりすぎといえはやりすぎだがな。ま、いろいろ役に・・・
そういや、キラはパイロットスーツは？」

「あ、なんか軍のものを使うそうです。」

「そうか、だったら、後でナノマシンを注射するから、ヘルメット
にこれを付けるか？」

「そういつてコーデックを取り出す。」

「え、ち、注射？・・・大丈夫なんですか？」

『人体へのナノマシンによる影響は皆無です。』

「あ、そうなんだ・・・。じゃあ、お願いします。」

「待つてる、すぐにこれを・・・。」

「そういつてジェフティのコクピットから降りようとしたときだった。
《敵艦影発見！敵艦影発見！第一戦闘配備！軍籍にあるものは直ちに
持ち場に着け！》

サイレンと共に差し迫った声のアナウンスが流れる。

「これは！」

「ああ・・・敵だ・・・キラ！」

注射器を所定の位置にセットした後、デイビッドはパイロットスー
ツを掴んでコクピットから飛び降りる。

《キラ・ヤマト、及びデイビッド・ブリスキンは艦橋へ。キラ・ヤ
マト、及びデイビッド・ブリスキンは艦橋へ・・・》

「わかってます！」

「最後に聞くぞ・・・本当にいいんだな。」

デイビッドの眼を見て、キラは理解する。

「ここは分水嶺だ。」

ここを超えれば、もう自分に逃げ場はない。

でも、答えはすでに決まっている。

「・・・はい！」

「分かった！急ぐぞ！」

そしてデイビッドは不適に笑い、

「・・・お客様は、丁重におもてなししないとな。」

デイビッドのジョークに、キラもつられて笑う。

二人は艦橋に向けて駆け出す。

角を曲がったとき、二人は目を見開いた。

そこにいたのは、地球軍の制服を着た、トール達がいた。

「おい、いきなり仮想パーティか？悪いが、こっちにそんな余裕はないぜ？」

デイビッドが笑いながらもいう。

軽口こそ叩いているが、彼にはもう、わかっている。彼らの決意が、そしておそらく、キラにも。

「ブリッジに入るなら軍服着ろってさ。」

カズイがあっさりとする。

「ぼくらは艦の仕事、手伝おうかと思っただけ。人手不足だろ？普通の人よりは機械やコンピューターの扱いには慣れてるし」

サイが襟を直しながら言う。

「二人にだけなんて戦わせられないよ。俺たち、守ってもらってるんだから。」

トールが笑顔で話す。

「こっこの状況なんだもの。私たちがって、出来ることを……。」
ミリアリアがやさしく微笑む。

デイビッドはため息をついた。だがその顔は、笑みに満ちている。

「まったく、人の気も知らねえで……。だったら早くしろ。」

「……みんな……。」

キラが嬉しそうに声を漏らした。

二人は、彼らの思いに感謝しながら、ブリッジへと急いだ。

格納庫に彼らがパイロットスーツに身を包んで再び現れたとき、ムウは口笛を吹き、デイビッドのほうを見ながら言った。

「へえ……なかなかオシャレだな。それ。」

「だろ？俺もなかなか気に入ってる。」

二人の会話に、キラは思わず笑ってしまふ。

ムウが、今度はキラのほうを向いた。

「やる気みたいだな。そのカツコは。」

「・・・戦いたいわけじゃありません。でも、僕はみんなを守りたい。だからここにいます。」

「俺たちだつてそうさ。意味もなく戦いたがるやつなんざそうそういない。戦わなきゃ守れねえから、戦うんだ。」

ムウの言葉に、キラは頷く。

そこにデイビッドが茶々を入れる。

「しかしまあ、ちよつとでかくなえか？キラの。」

「・・・そうですね。ちよつと大きいです、これ。」

キラがスーツの襟を引つ張る。ムウはふつと笑う。

「お前のほうが規格外なんだよ。やせつぼち。」

「安心しな。暇なときに、俺が鍛えてやる。」

デイビッドがキラの肩を叩きながら言う。

「ほお。よかつたな。ボウス。」

ムウが茶化する。

彼らにはわかつていた。これが生き延びるための『誓い』だと。

だからこそ、次に笑えるときのために、今笑っている。

あつという間にブリーフィングを終え、彼らは各々のコクピットに向かう。

「エイダ。敵影は？」

『現在確認できるだけで10機。Xナンバーも確認されます。』

「じゃあな！ボウス。兎に角艦と自分を守ることだけ考える。」

ムウの乗るメビウスゼロが一番にカタパルトに登る。

「はい！大尉もお気をつけて！」

「ムウ・ラ・フラガ、出る！」

猛スピードで発進するゼロ。

それに続き、今度はストライクがカタパルトへと歩いていく。

『キラ。』

「ミリアリア!？」

モニターには、インカムを付けたミリアリアが映る。

『以後、私がMS及びMA、それと、オービタル・・・フレーム？の戦闘管制となります。・・・よろしくね。』

笑いながらウインクするミリアリアを、クルーの一人、トノムラがしかっている。

エールストライカーを装備し、ストライクが発信体制へと移る。

「キラ・ヤマト、『ガンダム』、行きます！」

ストライクがカタパルトから一気に射出される。

そして、最後にジェフティがカタパルトへと『浮遊』する。

OFは、総じて地上に降りての戦闘を想定していない。

つま先も、というか、足首自体がなく、先のとがった形をしている。ジェフティも、地上に降りる際のランディング・ギアで立つことは可能だが、歩くことを想定していない為、基本が浮いての移動になるのだ。

『・・・デイベッドさん。』

ミリアリアが不安げに語りかける。

『キラのこと、お願いします。』

デイベッドが笑う。

「ああ、任せておけ。」

『発進シークエンス、スタンバイ。ジェフティ、発進体勢へ移行。』

エイダの言葉と共に、ジェフティがその身を少しだけ縮める。

『発進シークエンス、オールグリーン。ジェフティ、発進どうぞ！』

「デイベッド・ブリスキン、ジェフティ、発進！」

『ジェフティ、戦闘体勢に移行します。』

そして、アークエンジェルを守る青い鳥が、ジェフティが光の尾を引いて宇宙へと飛び出した。

第4話・「サイレント・ラン」(後書き)

今回デイビッドのパイサー初お披露目の回。

デ「ANUBISのデインゴとは違う・・・というか、何だよ、あれ。」

いやさ、ANUBISのパイサーって、何かヘルメットがあれば良いのか？って感じじゃない？いや、あれはあれで良いんだけど、SEEDの世界観に合わないな、と思ひまして。

キ「で、ジェフティスーツ？」

まあ、そこはね。なんかインパクトが欲しかったので。

実はSEEDエンダースのパイロット版として、ジェフティのランナーにマユを乗せる予定があっただわ。

キ「え？じゃあ、時系列的にいうと・・・。」

そう、本当はSEEDの3クール目辺りからのスタートでした。

キ「ということはオーブでの地中軍との戦闘辺り？じゃあ、そこでマユが偶然ジェフティに・・・。」

デ「乗り合わせる事になるな。だがそうなるとシンはどうなる？」

まあ、そこに詰まって結果やめたんだけど、その時思いついたのが、ジェフティスーツでした。

なんというか、バイザーを上げたとき、マユの顔が出てかわいいな、とかいう感じの理由なんですよ。

デ「で、それを今回転用したと。」

まあ、バイザー下ろした状態だとジェフティっぽくてかっこいいしね。

因みに俺の中ではマユのはパイサーより、君のはジェフティよりのイメージ。

デ「俺のはかっこよさ重視、って所か。」

そゆこと。

ではそろそろ次回予告！

デ「よう！SEEDエンダースのカレーは福神漬けよりラッキョウ派の方、デイビッドだ！」

大尉の発案した作戦・・・うまくいくといいが・・・。

つておい！キラ！何やってんだ？

・・・！しまった！ストライクのバッテリーが！

次回、SEEDエンダース、第5話「フェイスシフト・ダウン」！

see you next time!

そろそろこのコーナーにもキャラ増やしたいけど・・・まだ無理かなあ・・・。

第5話・「フェイズシフト・ダウン」(前書き)

今回はジエフティ対ガンダム初戦闘!!

デ「あ、そうか。俺はアスランと戦ってなかったな。」

それでは本編をどうぞ!

第5話・「フェイズシフト・ダウン」

さて、ここである人物について話しておこう。

この世界の有様を決めた男の話。

世界に革新と、歪みを与えた男の話。

その男は、まだ世界が神の子が生れ落ちた時からの暦を刻んでいた頃、その最後の偉人として生まれた。

なぜ当時の世界がいまだに世界が西暦を使っていたのかといえば、イエス・キリスト以上のインパクトとセンサーションを与えた人物が歴史上に現れなかったためだ。

大いなる神の子の教えは、今の世界の人々にとって、その精神の奥深くの生き方を規定する重要なものとなっている。

倫理、正義、常識。

そのどれをとつても、良きにつけ悪しきにつけ、いかに無宗教を吹聴しようとも、誰にとつても宗教の影響の無い物は無い。

だからこそ、西暦は使われてきたのだ。

言い換えれば、それほどの影響力を持つ人物が現れたとき、新たな歴史が生まれるのだ。

そして、その時が訪れた。

その名はジョージ・グレン。

後に『ファースト・コーディネイター』と呼ばれた男。

彼は若くして世界的カリスマだった。

その頭脳、その美貌、そして、その強さ。

『天は二物を与えず』とはよく言うが、彼のそれは二物どころか十、いや百を超えているといつても過言ではなかった。

もちろん、西暦がC・E・へと変わったのはそれだけが理由ではないだろうが、その有り余る才能が少なからず影響を与えたのは間違いない。

C・E・15年、彼は世界を揺るがした。あるいはキリスト以上に。

彼は木製探査ミッションに、自ら設計した宇宙船で、自らを船長として参加した。

『その時』は、地球軌道上からの中継で、ほんの少しの時間のずれを伴い訪れた。

「僕の秘密を今明かそう。」

僕は、人の自然ナチュラルそのままに、この世に生まれた者ではない。」

なぜ彼がそう生まれたのか、なぜ彼がそれを知ったのか、それはわからない。

しかし、彼についてわかることがいくつもある。

受精卵の段階で、遺伝子进行操作し、後にこうなるであろうという予測の下、作り出された新たな人類。

人より多くのことを記憶し、人より強靱な力をもつ、人の手で作られた存在。

彼は天才ではなかった。

いってみれば、それは『奇跡』。

人類を導く、第二のキリスト。新たな伝説。

「僕をこのような人間にした人物は、こう言った。「我々ヒトにはまだまだ未知の可能性がある。それを最大限に引き出すことが出来れば、我々の行く道は果てしなく広がることだろう」と・・・」

「彼はまた、僕に言った。「ヒトとヒト、そしてヒトと宇宙に調和をもたらす調停者コーディネーターたれ」と。それが彼の、そして僕自身の願いだ。

僕に続くものが今後、現れてくれることを願って・・・。」

そして、彼の『レシピ』 遺伝子操作技術のすべてが、デジタルの海を通じ、世界に解き放たれた。

その行動はなんだったのであろうか。

彼の純然たる善意によるのか、それとも何か目的があったのか、あるいは、誰かの欲望を阻止するためだったのか。

兎に角、世界は覆された。

宗教家たちは憤慨し、政治家たちは動揺し、そして、人々は渴望した。

『第二のジョージ・グレンを』と。

こうして、第1世代のコーディネイターが生まれ、10年ほどの月日が流れた後、ジョージが14年の長い宇宙の航海を終えた。そのときに、ジョージは再び世界をひっくり返した。

彼は一つの石を持ち帰った。

その名は“エヴィデンス01”。外宇宙からの地球外生命体、その化石。

地球以外の生命の証拠^{エヴィデンス}。その存在が、世界を大きく変えた。まだジョージの告白から世界が立ち直らないうちに。

そして、それを発見したジョージの偉業は、世界的遺伝子操作プログラム　コーディネイターの誕生を引き起こしたのだ。

ジェフティがジンの小隊に向かって飛ぶ。

現在、アークエンジェルはザフトの戦艦2隻に挟み撃ちとなっている。

そこで、ムウが状況を打開するための作戦を思いついた。

ムウの発案した作戦はこうだ。

まず、ストライクとジェフティが派手に暴れまわる。

その間にムウのメビウスゼロが敵艦2隻の内1隻に接近、奇襲。

戦艦にダメージを与えれば、おのずから敵は退却せざるを得ず、その間に逃げる事が出来る。

この場合、ジェフティとストライクで時間を稼ぐことが重要になる。だが、デイビッドはそこにさらに案を足した。

ジェフティでもう一方の敵艦を叩く。

勿論、これも囷のうちで、ジェフティが敵を惹きつけられればいい。戦艦を落とせばなおよしだ。

まあ、デイビッドには戦艦を落とすだけの自信があったのだが。

兎に角、今はジンの相手が最優先だ。

すぐさまジンがマシンガンを構え、銃口が火を噴く。
すぐさまジェフティは左腕を構える。

確かにジェフティには左腕に盾のような突起がある。
だが、目の前のジンたちにはそんな貧相な盾で防ごうとするなど、
薬中か何かと思うだろう。

が、彼らの予想は裏切られた。

突然、ジェフティの周りを青い光が包み、銃弾を防いだ。

これがジェフティの防御、エネルギーシールドだ。

このシールドも、メタトロンによる空間圧縮技術が使用されており、
空間断層が形成されることによつて攻撃を防いでいる。

一瞬ひるんだ彼らを、デイビットが見逃すはずもない。すぐさま、
背中のブースターを展開し、猛スピードで突進する。

そして、ジェフティの右手からすぐさまエネルギー弾が発射され、
1機、また1機とジンが落とされる。

そこに、迷彩色のような色合いの『バスター』、青い機体色の『デ
ュエル』が飛び出してくる。

『敵、連合のXナンバーです。注意してください。』

「わかつている！」

すぐさまパドルブレードを展開し、デュエルに切りかかる。

その時、バスターの腰部の大砲の一方が、弾丸を撒き散らした。
避けきれず、ジェフティはその威力に押されてしまう。

「うおおっ！」

すぐさま応戦しようとするが、今度はデュエルがジェフティのエネ
ルギー弾をシールドで防ぐ。

「こいつら……！」

しかし、デイビットには彼らの作戦が『読めていた』。

今の戦力では、彼らにジェフティを落とせない。

あれを落とそうと思えば、それこそ一個大隊クラスの戦力を必要と
するだろう。

だが、それ以外はどうか。

ストライクはもしかしたら落とせるかもしれないし、アークエンジンならジンでも全力で行けば撃墜可能だろう。

そしてそこを叩きさえすれば、ジェフティはじわじわと追い詰めていけばいい。

と、思っていたが、

「甘いんだよ！」

ジェフティが2機に向かって『何か』を投げつけた。

それはまるで撒きびしのように、かなり広範囲に散らばって、そのまま2機に吸い付くように引っ付く。

異変はその瞬間起こった。

突然、2機の機体色が、くすんだ鉄のようなグレーに変わったのだ。おそらく、操縦桿も効かないに違いない。

これが、ジェフティの『サブウェポン』の一つ、『ゲイザー』。

サブウェポンは、その名の通りジェフティの追加装備であり、基本装備だけでも十分な戦闘能力をジェフティが持つために、あくまで『サブ』の扱いである。

しかし、その威力は基本装備としても十分な効果を持っている。

このゲイザーは、一切の攻撃力を持っていない。

しかし、使いようによっては、サブウェポンの中でも最強の部類に入る。

ゲイザーの効果、それは相手の動力系に作用し、相手の動きを止めるというもの。

つまり、バスターもデュエルも、動力系、つまりバッテリーをやられ、一時的にだが、動かなくなっているのだ。

ここで2機をしとめるのは容易い。

しかし、ゲイザーで拘束できる時間は短い以上、今は1秒でも時間が惜しい。

デビッドは一気に機体をリターンさせ、アークエンジンへと急いだ。

アークエンジェルが、キラが危ない。

『お前がなぜ地球軍にいる！？なぜナチュラルの味方をするんだ！』[？]

一方、キラはストライクでブリッツとイージス　アスランを中心としたMS部隊と交戦していた。

明らかに『敵』は、自分たちを狙ってきている。

どうやら、ストライクとアークエンジェルを集中的に狙う作戦らしい。

だがキラにとって何よりつらいのは、アスランと戦わねばならないことに他ならなかった。

「僕は地球軍じゃない！」

思わず言い返す。しかし、本当にそうだろうか。自分のいったことが、自分で信じきれない。

でも、ここで戦いをやめるわけにはいかない。

「あの艦には仲間が・・・友だちが乗ってるんだ・・・！」

だが、アスランもまた、友達だ。なのに、なぜ自分は、こうしてアスランと戦っているのだろう。

どうして、アスランが戦場（ま）にいるのだ？

「君こそ・・・なんでザフトになんか！戦争なんか嫌だって、君も言ってたじゃないか！」

そうだ。何よりも彼がここにいることがおかしい。

アスランは、誰よりも争いごとを嫌っていた。多分、自分よりも、ずっと。

なのに、どうして？

キラはそう思いつつも、ビームライフルで次々とジンを落としていく。

しかし、イージスはそれを止めようと幾度となくストライクの目の前をさえぎる。

先程からこの繰り返し。キラの精神的な負担はあまりに大きい。

アスランも、牽制とばかりにビームを打ち込み、キラにとってはそ

れだけでも手一杯だった。

そのため、見落としていた。ジンのマシンガンが先程から何度か自分に命中していることも、そして、ストライクのバッテリー残量をも。

「ガモフより入電！ 本艦においても、確認される敵戦力はMS一機、および例のアンノウンのみ」とのことです！」

クルーゼは考え込む。

この戦闘はどこがおかしい。

確かに、羽付きシエフテイは強力な戦力には違いない。

だが、だからといってあの男が、ムウ・ラ・フラガアーケエンジェルが足つきの護衛をストライクと羽付きに任せて、自身が出撃せずにいるのはありえない。

ムウとはあらゆる点で宿命というべき間柄だからこそわかる。

あるいは、やつの機体のダメージが大きすぎたということか……？

少なくとも、現時点ではそうとしか思えない。

クルーゼ自身が戦っていたのだから、自信もある。

（まあ、いい。そろそろ射程内だ。どちらにしろ……）

ここで落とす。

クルーゼは、アデスに主砲の発射を命令した。

そしてこのあと、彼は自身の甘さに歯噛みすることになる。

突然、ビームライフルのトリガーが利かなくなり、キラは怪訝に思う。

その時点になって、やっとコクピットの中にやかましく警告音アラームが鳴り響いていたことに気づいた。

その瞬間、ストライクの鮮やかなトリコロールが、鈍い鋼色に変わっていく。

まるで、体中から、力が情けなく抜けていくかのよう。

『フェイズシフトダウン』 バッテリーが一定以下になり、フェイズシフト装甲が『固さ』を維持できなくなってしまったのだ。

しまった！

いそいで、キラはデイビッドに助けを求めようと、無線を必死で作す。

しかし、バッテリー残量の少なさと、Nジャマーの妨害とが、それを邪魔する。

そこに、ジンが数機、こちらに迫っているのが見えたとき、キラは確かに感じた。

弾丸が目前に迫る幻。^{レジヨン}自らに迫る自分の『死』を。

しかし、現実はあるからやってきた。

とたんに、コクピット、いや、機体全体が大きく揺れる。

迫ってきたのは、巨大な鉤爪。

イージスのMA形態、そのまるで悪魔の右腕のような、大きなアームだった。

『アスラン！どうするつもりですか！』

通信機からおそらくブリッツのパイロットのものであろう声が流れる。

次にアスランの声がつむいだ音の連なりに、キラは大いに驚いた。

『この機体、捕獲する！』

今、アスランはなんといった？

『でも、命令は撃破ですよ！？』

『捕獲できるのならば、そのほうがいい！撤退する！』

いま何が起きているんだ？

キラは混乱する。

ジブンハ、ドウナルンダ？

「嫌だ！！僕はザフトの艦なんか行かない！」

ようやく状況を飲み込んだキラが、どうにか抵抗しようとするが、ストライクが動かない今、なんとも情けない話だが、キラには駄々っ子のように喚くしかない。

『いい加減にしろ!!』

しかし、その駄々をもアスランは気迫で否定する。

『来るんだ、キラ。出ないと・・・、俺はお前を撃たなきゃいけないんだぞ!』

キラははつとなる。

そうだ。アスランもまた、僕と同じように、戦いを望んでなんかいない。

きつと、ここにいるのも、プラントに徴兵制があるか何かだろう。そうでなかったら、アスランの母が、レノアおばさんが許すはずがない。

しかし、その淡い期待も、アスランの次の一言で打ち砕かれた。

『血のバレンタインで母も死んだ……。俺は・・・これ以上・・・っ!!』

キラは打ちひしがれる。

死ンダ？

アスランノオ母サンガ？

アスランハ何ヲイツテルンダ？

わけが判らなかつた。なにもかも。

もしかしたら、最初から。

ヘリオポリスでの騒動から、自分はもしかしたら、何も理解していなかったのか？

ここが戦場だということも。自分が、戦争の中にいることも。何もさつきから地面だと思っていた足元が、砂で出来た薄い屋根だったような感覚。

キラは、自分から抵抗する気力が急速に失われる気がした。最初からわかつてなかった。

だったら、ここにいての意味なんて、ここで戦う意味なんて、無い・・・。

お前がどんな選択をしようが、俺が守ってやる。

とたんに、デイビッドの言葉が脳裏に蘇る。

二人だけになんて戦わせれないよ。俺たち、守ってもらってるんだから。

トールの笑顔が目には浮かぶ。
そうだ。

デイビッドさんは、キラがどういう相手かわかった上で、コーディネイターだと知ってた上で、気さくに接してくれ、守ってくれると
いった。

トールたちは、どれだけ危険な選択をしているか、覚悟の上で、キラたちを手助けすると決めた。

それなのに、自分が何もわかっていない、それだけで、そんな理由で、戦いを放棄するのか？

みんなを守ることを放棄するのか？

いや。

違う。

自分がそんなことでどうする。

分水嶺は既に超えた。

逃げ場はない。

キラは、操縦桿を握りなおす。

ストライクがイージスの『指』の1本を掴み、引き剥がそうとする。

『・・・キラ！！何を・・・！！』

「駄目だ・・・！！ここで逃げちゃ・・・駄目なんだあああああつ
！！！！」

必死でモーターを回すも、バッテリーのそもそもが少ないストライクでは、イージスのアームを振りほどく力は無い。

その時、ストライクのコクピットが、ジェフティの機影を捉えた。

「キラ！お前何やってる！」

デイビッドに、フェイスシフトの落ちたストライクと、それをがちり掴んで話さないイージスが見えた。

「・・・！デイビッドさん！！！」

キラはデイビッドに気づき、声を上げるも、何もすることが出来ない。

このままビームでイージスを打ち落としても良いが、イージスの爆発にストライクが巻き込まれないとも限らない。

「エイダ！何かいい方法は無いか！」

『『モーニングスター』の使用を提案。』

「相手のバッテリーをすり減らすか……よし！！」

ジェフティは、背部のベクタートラップから、ヘリオポリスで見つけたモーニングスターを選出し、一瞬で空間を展開する。

『な……！！』

イージスのパイロットの　アスランの驚きの声が聞こえ、思念を感じる。

「戦場でクレインゲームなあ……」

ジェフティがハンマーを構える。

「ずいぶんと余裕じゃねえか！」

ジェフティがハンマーを振り下ろし、それは正確にイージスに命中する。

イージスはストライクごと回転しながら飛ばされた。

この手の武器は、MSでの戦闘において、どちらかといえばパイロットへのダメージを狙ったものだ。

しかしながら、PS装甲を持った機体にとっては、ダメージこそ無くとも、バッテリーを効果的に減らす恐ろしい武装だといえる。

そのうえ、ジェフティの馬力は、それだけでもMSを圧倒している。イージスのパイロットは、バッテリーが思った以上に減ってしまったていることに大いに驚いているだろう。

イージスは、防御体制にならねばやられるままだと判断したのか、ストライクを離し、MS形態に戻った。

拘束の解かれたストライクに、デイビッドは呼びかける。

「キラ！離脱できるだけのバッテリーは残ってるか！？」

「もう殆ど残って無いようです……。」

先程の抵抗のせいで、事実、ストライクにはバッテリーが殆ど無い。「チツ！じゃあしつかり？まってる！」

「え！？な、何を……」

キラの疑問をよそに、ジェフティの腕がストライクを掴む。

「エイダ！アークエンジェルカタパルトを目標に設定！目標までの距離を指定！」

『了解。目標までの距離と角度を表示します。』

「キラ！今からストライクをアークエンジェルまで投げ飛ばす！バーニア制御はしとけよ！」

「は……はい！」

「吐かないように気をつけるよ！」

そういうと、そのままジェフティを中心に2機が回転を始める。

正確には、ストライクをジェフティが振り回している、といえるのだが。

回転はだんだんと速度を上げていく。

『角度修正。今です。』

「いつけええっ！！！」

ジェフティがストライクを離し、そのままストライクはものすごい勢いで投げ出された。

ストライクは真空の空間で、速度を落とさず一気にアークエンジェルへと向かっていく。

そこに、ストライクがバーニアをふかし、速度を落とすつつも起動を安定させていく。

デイビッドは、キラが無事にアークエンジェルについたことを確認し、イーリスとブリッツの方を向く。

「どうした？次は俺が遊んでやるんだ。もっと嬉しそうにしろよ。」
ジェフティのパドルブレードを展開しながら、デイビッドがほくそ笑んだ。

その時、ジェフティのコクピットのモニターに、メビウスゼロからの通信を受け取ったことを伝えるメッセージが映し出された。

クルーゼは、先程の自分の判断に激しく後悔し、齒軋りしていた。感覚は突然襲ってきた。

あの言いようの無い、独特の感覚。

すぐにアデスに指示をするが、突然のことに、誰も充分に反応できず、M Aの接近を確認したときには既に遅かった。

迎撃をしても、あの男に、ムウ・ラ・フラガに通用するわけが無く、逆にリニアガンを打ち込まれ、機関部に重大な損傷を受けてしまった。

そして、敵のM Aは離脱し、後には満足な戦闘もできないヴェサリウスのみが残された。

「おのれ……!!」

ムウには、恨み言を言う以外に出来ることはなかった。

一方、アークエンジェルに帰投できた、というより、投げ飛ばされたストライクが、ランチャー・ストライカーに換装し、ゲイザーから開放されたデュエルとバスターにアグニを放った。

両機とも避けられたものの、もはや2機のバッテリーは殆ど残ってはいない。

戦局が完全に逆転していた。

「作戦成功……これより帰投する、か……。やってくれたぜ、あの大尉。」

一方のG 2機にも、艦が損傷したとの報が届いたのか、パイロット二人の驚きを感じた。

同時に、アークエンジェルから信号弾が撃たれ、2機にも撤退命令が来たのか、イージスのほうには未練があったらしいものの、素直に帰っていった。

とたんに、デイビッドの体から力が抜ける。

もう、この場の誰にも戦意は感じられない。

「終わった……。」
いや、あるいは始まりか。
不思議と、デイビッドは不安を感じていたが、疲れきった彼には、それを考える余裕は無かった。
センサーから敵の反応が消えていく。
デイビッドは、つかれきった手にもう一度力をこめ、ジェフティをアークエンジェルに戻させた。

格納庫に、メビウスゼロとジェフティが帰ってくるのを見ていた整備士の一人、マードックは、いまだにストライクのハッチからキラが出てこないのを見て、不審に思い、声をかけていた。

「どうした？」
後ろからムウが近づき、尋ねてきたので、マードックは外部ハッチを操作しながら説明した。

「いや……坊主がなかなか降りてこねえんで……。」
「おやおや。」

そっぴいなながらムウは笑っているものの、どこかキラを心配しているようだった。

ハッチが開ききり、中には、顔に手を当て、ぐったりしているキラの姿があった。

「おい、何やってんだ、ほら。」

ムウは、体を揺らすのが、キラはうめくことしかない。

ムウは、ため息をつき、キラの肩を叩いてやる。

「もう終わったんだよ、坊主。よくやったな……。」

ムウの言葉に、マードックはこの戦闘がキラにとって殆ど初陣のようなものだったことを理解する。

おそらく、ムウは彼が戦闘の緊張感で着かれきっていると思っっているのだろう。

しかし、キラの発した一言に、二人ともきょとんとした。

「気持ち悪い……。」

ふと、二人はデイビッドのほうを見る。
デイビッドは、ジェフティから降りて、
余裕の表情で格納庫を出ようとしていた。

第5話・「フェイスシフト・ダウン」(後書き)

キ「……………」

デ「どうした？」

キ「明らかに僕の扱いが酷いんですが……………」

いやいや、気のせいだよ！

キ「いや！あれは何なんですか！！すごく気持ち悪かったんですよ！！」

デ「あゝ、まあ、なんだ。メンゴ！」

メンゴ！

キ「メンゴじゃない！」

とりあえず次回予告！

キ「逃げないでください！

まったく……………」

こんにちわ！SEEDエンダースの頭を洗うときはリンスインシャンプーを使うほうのキラです！

ここが…………アルテミス…………

え？ストライクにロックをかける？

大尉、どういことなんですか？

次回、SEEDエンダース、「傘のアルテミス」！

次回もまた見てくださいね！」

いつラクスはだせるだろうか……………」

番外編・The past of David(前書き)

種HD化記念!

デイビッドの過去に迫る!!な回。

デイビッドは、アークエンジェルの窓を眺めながら、ふと、疑問に思った。

「そっぴや、俺の過去ってどうなってるんだ？」

デイビッドには『過去』は無い。

比喩ではなく、言葉通りの意味で。

そもそも、彼はこの世界の住人ではない上、最初に死ぬまでの記憶も無い。

しかしながら、あの『神』曰くの『次元の狭間』で、確かに奴はこ
ういった。

いろいろと特典もつけるさ。

過去かな。君がその世界にいても、なんら不思議は無い、そ
んな過去をね。

ならば、今の自分には、ジェフティがこの世界に存在するに足る理
由がちゃんとあるように、自らの存在理由、つまりは過去が確かに
存在するのだ。それに、自分はその一部を既に話している。

ここで、自らの過去について思いをさせておくのも悪いものではな
い。

デイビッド・ブリスキンは、火星の宙域コロニー『アンティリア』
で、ナチュラルとして生を受けた、真正正銘のマーシャンだ。

しかし、マーシャンとしてはともかく、ナチュラルとしては微妙な
ところではある。

デイビッドの両親は、その両方がコーディネイターだからだ。

普通、コーディネイターの親を持つ子どもは、親と同じような遺伝
子操作を施され、親と同様にコーディネイターとして生まれるのが
常識とされている。

しかしながら、彼の両親はそれをしなかった。

彼らは、自分たちが授かった子どもを、『ナチュラル』として生むことにしたのだ。

その理由はわからない。

だが、それが、彼の『才能』を発現させるプラスの要因であったことは確かだ。

コーデイネイターでもないが、ナチュラルともいいがたい、かといって、その混血たるハーフコーデイネイターでも決して無い。

彼は生まれたとき既に異質だった。すくなくとも、地球では。

彼の幸運は彼が生まれたのが火星で、火星ではその環境の厳しさからか地球ほどの差別意識が無かったことだろう。

あと、アンテイリアの事情も関係しているといえるが、そこはまた後にしよう。

彼の少年時代は火星の中ではごく当たり前に過ぎて言ったといってもいい。

ただ、彼はいつも感じていた。口にこそ出さなかったが、自らの『異質さ』を。

友達と遊んでいても、勉強をしていても、両親と食卓を囲んでいても。

彼にまわりつく違和感、それは、彼が自分の生まれにうすうすと気づいていたからかもしれない。

彼がそれを知ったのは、ちょうど今のキラたちと同じ、16になったときだった。

彼の両親が死んだ。

2人はコロニーの『外』、つまり宇宙空間で作業員の仕事についていた。

しかし、そのときの事故で2人は宇宙に投げ出され、発見されたのが1カ月後。

そのときだ。デイビッドが両親の知り合いから、生まれの真実を聞いたのは。

そのとき、デイビッドはどうしたかといえば、別に何もしなかった。

ただ、そのときの彼が、妙に納得していたようだったのが、周りには不審に思えた、というのはあったろうが。

彼の転機は、彼が20になって、彼が火星での作業員の仕事についてきたときだった。

ただ、作業員といっても、両親のような、平和なものではない。
ゾーンオブシエンダーズ
ZOE。それが彼の雇い主の名前だった。

元々アンティリアは、ZOE所有のコロニーだ。

そのため、その住人は、何かしらZOEに関連した仕事に就くのが普通だ。

そして、ZOEの秘密組織的性質上、ZOE所有のコロニーは、火星のほかのコロニーとはほとんど隔絶されている。いってみれば、ZOEは火星内の秘密組織、というよりは、火星の別勢力、といったほうが正しい。

また、ZOEはその性質上、テラナー地球からこう呼ばれることもある。

“宇宙やくざ”と。

デイビッドは、言ってみればその宇宙やくざの『シノギ』の一つである、火星の資源（主に鉱物資源が多い）を採掘する、密猟ならぬ『密掘』を行っていた。

あるとき、採掘した資源を、仲間と共にアンティリアにシャトルで護送していたとき、不可解なことが起こった。

突然、デイビッドが危険が迫っていることを訴えたのである。

仲間たちは、当然彼の言うことを真に受けなかった。

そのときだ、彼らの乗るシャトルにスペースデブリが激突したのは、火星に人が移住するようになると、ある種当然の結果として、シャトルや衛星の残骸、いわゆる宇宙のスペースデブリごみ^{デブリ}が火星の回りに存在するようになる。

ごみ、といってもその危険性は地上での空気汚染だとか土壤汚染だとか言ったようなささやかなものとは比べ物にならない。

これらのスペースデブリは空気という障害物がない分、秒速10キロといった冗談みたいな速さで移動することもままある。

そしてそういったスペースデブリがシャトルやコロニーに衝突すれば、当然無事ではすまない。

幸いにも、デイビッドが寸前でシャトルの操縦桿をひったくり、どうにか避けることができたから機関部にダメージを負っただけです。だが、その後デイビッドはその一連のログをみたZOEの上層部に拘束され、アンテリリアの実験施設に送られることになった。

そして、彼にはもう一つの名がついた。

『ニュータイプ実験体1号』。

実験、といってもそれは大してひどいものではなかった。

その内容はといえば、血液採取、体力測定、能力測定といったデータ採集が主であり、デイビッドが思っていたほど酷いものではなかったのだ。

しかし、ZOEがある組織に吸収されてから、事態は変化する。

組織の全容はわからない。唯一つわかることは、それがテラナーの比較的巨大な組織であることだけ。

仮にもう一つわかることを加えるなら、ZOEに比べて、彼らのやり方が強引だったということだ。

そして、それはデイビッドの実験施設においても例外ではなかった。そこからの出来事はひどいの一言に尽きる。

具体的に言うことは控えたほうが良いほどに。

デイビッド以外のニュータイプがいなかったわけではないが、その全てが死にいたった、とだけいっておこう。

そしてこのときの経験が、彼のニュータイプ能力を皮肉にも引き上げる結果となった。

そして今から2年前、彼の運命は再び大きく動くことになる。

アンテリリアは、さまざまな実験施設を含んだコロニーなのだが、その中の一つに、メタトロンを利用した新基軸の人型兵器、オービタルフレームを研究開発する施設があった。

オービタルフレーム。理論上は当時地球でプラントが研究開発しているとうわさがあつたモビルスーツを超えろといわれていたが、結

局、OFが日の目を見ることが無かった。

メタトロン、その希少性は異常で、ZOEも地球側とのパワーバランスを鑑みて輸出を自主的に制限したこともあり、地球では殆ど研究が進んでいない程である。

OFは、ZOEが発見したメタトロンの使い道、いわゆるメタトロン関連技術を利用するために、機体の殆どにメタトロンを利用しなければならぬ。

そしてそれは結果として、見つかったメタトロンの殆どをOFの研究にまわす必要がある、という結論に至る。

しかし、それでもメタトロンの絶対量が不十分なために、実際の研究はコンピューターによるシミュレーションが殆どで、建造されたOFも少数という結果に終わっていた。

『組織』はそのような現状に痺れを切らし、OFの開発計画を全面凍結。メタトロンを今までのような地球との『取引』に利用することに決定した。

だがOF研究チームは納得がいかなかった。

彼らは自信があった。

曰く、「オービタルフレームは戦争を変える。」と。

そして彼らには確証があった。

それが当時建造途中であった最新型にして最高傑作、『M O F - P 013』ジエフティであった。

そして彼らは建造されていた数少ないOFを用い、ジエフティを切り札としてアンティリアを武装占拠。アンティリアと『組織』の戦争状態に突入した。

しかし、アンティリアの住民がそれをよしとしていたわけが無い。当然、彼らは反抗した。

しかし、OFにMAが勝てるはずが無かった。勿論生身でも。

アンティリアは開発チーム側の独裁状態に陥った。

しかし、その状況が許せない者がいた。それがデイビッドである。

デイビッドはニュータイプ能力と己が身体能力、そして密掘をして

いた頃のかつての仲間たちの協力を得て、彼らの本拠地であったO
Fの研究所に潜入し、起動前のジェフティを発見、そのままジェフ
ティのバイオメトリクス認証に自分を登録。結果として研究チーム
の決起を挫いたのである。

そうして、彼らは一瞬で制圧され、ジェフティを除くOFは全て破
壊されたのである。

しかし、このままデイビッドが戻っても、『組織』に再び実験動物
扱いされるだけ。

デイビッドの仲間はそのをよしとするわけが無かった。

デイビッドが、自分たちの命の恩人が、大切な仲間が道具のように
扱われ、死んでいくのを見届けるなど。

例え自分たちの命の危険がかかっていたとしても。

そして、彼らの命がけの協力を得て、デイビッドは決起のうやむや
に乗じてジェフティと共に火星を脱出。

脱出それ自体に抵抗は無かった。

元から彼は自分の存在に異質さを感じていた。

ただ、自分を助けてくれた仲間たちがそのまま危険な目にあうこと
が、それをどうすることも出来ない自分が悔しく思えた。

そのまま単身、地球の中立コロニー、ヘリオポリスに向かい、1年
半の歳月はあつという間に経過した。

回想を終え、デイビッドは窓を眺めていた。

様々な人物の顔が浮かんで消えていく。

父の顔。母の顔。幼年学校の友達。初恋の相手。初めての恋人。研
究所の職員たち。そして、自分を助けてくれた仲間たち。

それは、確かに『神』の用意した設定に過ぎないのかもしれない。
でも、彼らは確かにそこにおいて、デイビッドにはその思い出があっ
た。

過去にさかのぼって作られた真実だ、なんてことは正直どうでもよ
かった。

彼にとって紛れも無い真実であること。それが全てだ。

「……ありがとう……。」

誰に向けて言うわけでもなく、デイビッドが呟いた。

あるいは、自分がキラのボディガードをするなんて言い出したのも、こいつが関係していたのかもしれない。

もう、あの悔しい思いをしたくない、そう思ったのかもしれない。

そう考えながら、デイビッドは無重力に浮かぶ自分の体を動かし、艦内をうろつくことにした。

少しして、さびしそうなキラの姿を見つけた。

番外編・The past of David（後書き）

時系列的には4話の途中辺り。

しかしまあよくこんな過去を作れたもんだな『神』（笑）。

第6話・「傘のアルテミス」(前書き)

やっと更新だよ!!

デ「今回はずいぶんと時間かかったな。」

き「たら中途半端になっちゃうから本編も長いよ!

あとついにあれも出るよ!

それでは本編をどうぞ!

第6話・「傘のアルテミス」

地球連合がプラントを国家と認めない。

その裏にはコーディネイターへの差別意識が根をはっている、というのは確かにある。

だがこと政治に関してはそのような個人的な理由は大体においてももらしい表向きの理由に隠されることが多い。

そして、この戦争においても有名無実化しているとはいえ、確かにそういったものが存在する。

その理由は、『プラントが自然に形成された領土を持っていない』というものだ。

通常、国家というものは少なからず自然に形成された領土、つまり地球上で、自然現象によつて形成された、石と土と砂で出来た土地を持っていて、というのはもはやい必要は無いだろう。

しかし、プラントにはそれは無い。

その国家を形成する全ての領土が人工的に作られた宙域コロニーのみで出来ているのだ。

ただ歴史的に見て、前例が無いわけではない。

シーランドがそうだ。シーランドは元タイギリスが政治的理由から所有を認めなかった海上要塞を、自称国王のロイ・ベーツ公が国家であると主張したことで出来た『国』である。

しかしながら、シーランドはどの国からも国家として認められていない。

プラントにしる、シーランドにしる、どちらも国際法上の国家の基準を満たしていないために、国家として認められていないのだ。

しかし、シーランドについてはともかく、これから宇宙に進出するであろう人類にとって、プラントのような形の『国家』はいずれ形成されてしかるべきものとしてみるべきではないだろうか。

実際、火星は地球上に無いながらも、事実上一国家の扱いを受けて

いる。

地球人にとって、重力から解放された『新人類』は、忌むべき敵なのだろうか？

それとも、そういった次のステージに進む存在を、彼らはねたんでいるのだろうか？

「デイビッドさん。」

後ろから呼び止められ、デイビッドが振り返ると、キラがぐったりした顔でこちらを見ていた。

「どうした、キラ。殆ど始めての戦闘で疲れたか。」

「ええ、その殆ど始めての戦闘で、誰かさんに思いつき振り回されて、ぶん投げられましたから、ものすごく疲れました。」

キラのいやみに、デイビッドはそうか、と何食わぬ顔で返す。

ふと、デイビッドが思い出したような顔をした。

「そういえば、お前のヘルメットにコーデックを付ける約束だったな。ちよつと待ってる。」

そういつて、デイビッドはジェフティのコクピットから、コーデック操作作用のナノマシン注射器を取り出す。

「キラ、首出せ、首。」

「え！？く、首ですか？い、痛くないですよね？」

キラが狼狽気味にたずねる。

「大丈夫だ、そんなには痛くない。たぶんな。」

いちおう、デイビッドの言葉を信じる気になったのか、キラがしびしび首筋を差し出すと、デイビッドが首筋に先端を押し当て、注射器のボタンを押す。

圧縮された空気が一気に開放され、キラの体内にナノマシンを流し込む。

キラがあまりの激痛に首を押さえながらうめき声を上げる。

「い、痛くないって言ったじゃないですか……。」

「たぶんって言ったる。それとも何か、お前、注射が嫌いか？」

「まただ、とキラは思う。」

どうにも目の前のこの男は、何かと人をからかいたがる傾向にある。思えば、彼と最初にあつたときも、彼は自分をからかいながら話しかけてきた。

それに、ことあの副長相手には、^{ナタル}デイビッドの挑発はその効果を遺憾なく発揮している。

この世には息をするかのように嘘をつく人間がいる、とはよく聞かぬが、どうやら息をするように人をからかう人間もいるらしい。

しかし、不思議な話だが、キラはそんな彼になんだか安心感を感じていた。

いつだって、彼はその姿勢を崩さないからこそ、キラは自分を守るといった彼の言葉が信じられた。

この艦にいる誰よりも自由だからこそ、どんな時だろうと、決してぶれることのない『自分』。

キラは、一人の人間としてという意味で、この男が好きだ。

「まあ、とりあえずこれを掛けとけ。」

そういつて、デイビッドはキラにコーデックを手渡した。

非常に小型のインカムのようなもので、艦橋でミリアリアがしていたものとは形が違う。

「これ・・・一応、無線みたいなものなんですよね。周波数とかはどうするんです?」

『そのコーデック自体は、いまデイビッド・ブリスキンが腕にしている操作端末や、バンダナと同様のナノマシン操作端末です。あなたがナノマシンを注射されたとき、既にそういった設定はされているはずですよ。』

「うわっ！え、エイダ、居たんだ・・・。」

いきなりエイダが話しかけたため、キラは驚いた。

『その言い方は正確ではありません。私は、あくまでジェフティに搭載されたAIですので、私が『いる』のはアークエンジェル格納庫である、と言えます。正しく言い直すならば、聞いていた、と

言うべきでしょう。』

「え？じゃ、じゃあ、僕がデイビッドさんと話していたときの内容とかも……」

『はい。会話ログ内部に記録されています。』

キラの顔に一気に焦りが広がる。

「いやいや、キラ、心配しなくても、お前今までへんなことは言っていないだろ。多分。」

『確認しましょうか？』

「「「「「「」」」」」」

二人の声が完全に重なった。

まあ、そんなことがあった後で、デイビッドがキラにコーデックの特徴や使い方を説明していたとき、ムウがこちらに近づいてきた。

「おお、いたいた。坊主！」

二人がどうしたのかという顔をする。

「どうかしたか？」

「いや、これからアルテミスに入港するんだが、あんたはともかく、坊主に言っておきたいことがあってな。」

「え？何ですか？」

すると、ムウは突然真面目な顔になる。

「ストライクの起動プログラムをロックしておくんだ。お前以外の人間には、誰も動かすことが出来ないようにな。」

キラとデイビッドが顔を見合わせる。

「それ……どういうことですか？」

するとムウは嫌そうな顔をした。

「……行けばわかるさ……」

そういうと、ムウはそのまま行ってしまった。

キラがデイビッドのほうを向く。

「……何なんですか、あれ。」

「さあな。だが、面倒な予感しかしない……」

デイビッドが俺の勘はよく当たるからなあ、と呟く。
実際、キラにも嫌な予感しかしなかった。

程なく、二人はその予感が当たっていたことを理解した。

アークエンジェルが入港した途端、そこで待っていたのは司令官の
ねぎらいでもなければ、ましてや『ようこそ』だとか書かれた垂れ
幕でも勿論なく、現実はいえ武装したMA郡と兵士たちであっ
た。

そして彼らはそのままアークエンジェルの管制室から何からを武装
占拠（おそらく間違っていない）し、クルーたちを食堂に押し込め
てしまった。

アルテミスの仕官の言うことを要約すれば、

「あなた達は味方と判断しきれないため、ちよつとの間身動きを出
来なくさせてもらいます。」

そしてそのまま、一部のクルー達をさつさと司令室に連れて行って
しまった。

これは、言ってみればあまりにあからさまで、無茶苦茶な行動だ、
とデイビッドは心の中でぼやいた。

大方、アークエンジェルとストライクについて、徹底的に調べたい、
とか言うハラか。

あるいは、ジェフティも目当ての一つかもしれない。

そうでなければ、まるで怪しい新造艦をむざむざと入港させはすま
い。

そのようなことをキラたちに説明すると、サイが質問してきた。

「どうしてですか？ジェフティはともかく、何でストライクやアー
クエンジェルを……。」

「あー、それはな。正直ちよつとややこしい話なんだよなあ……。」

地球連合軍、と一まとめに言うが、実際は地球連合、なんて組織は
存在しないといつていい。

21世紀から、EU、ASEAN等を皮切りに、様々な国家の政治的、経済的なつながりを持った連合体が形成されていった。

そして、最終的に彼らはプラントという『敵』に対して、力を合わせ戦うために、一つの組織になった。それが地球連合である。

しかし、そこはそれ、所詮殆どが本音はプラントが独立したらこっちの利益がなくなるから、という理由で集まった有象無象に過ぎない。

結果、地球連合は互いに利権を争い、牽制して、自分達の利益を優先してばかりな状況に終わっていた。

そして、今ここに来ての問題はずばり、『管轄の違い』だということだ。

ここアルテミスは、地球連合の一角、ヨーロッパ諸国とロシアが中心となって形成されたユーラシア連邦所有の基地。

一方、アークエンジェルやXナンバーは、北米大陸から中南米までの国々からなる大西洋連邦の主導で、ほかの共同体からも隠された状態で進められた計画だ。

「つまりまあ、連中も連中で、向こうに利益を独占されたく無えのさ。今言った連中は、どちらも連合じゃトップクラスの発言力を持った奴らだ。それだけに腹の探りあいも苛烈だろうからな。」

「マーシヤンの割りによく知ってるな……。」

ノイマンがため息をつきながら言う。
「まあな、ZOEも、^{宇宙やぐも}馬鹿じゃない。うまい取引には、情報が必要だからな。」

実際にはデイビッドは末端の一鉱夫だったのだが、それでもある程度取引に参加していたということもあり、(Xナンバーについてはエイダの受け売りだが)この手の情報には詳しいのだ。

「まあ、俺から言わせてもらえば、この戦争はなかなか馬鹿らしいと思うぜ。地球郡は自分たちのことばかりでちつとも協力体制に無いし、そもそも理由が理由だからな……。」

デイビッドの言葉にキラが不思議そうな顔をする。

「どうしたんですか？」

「この戦争は元をたどればそもそもプラントの独立戦争だ、と
ていい。俺の聞いた限りじゃ、プラントへの弾圧はかなりひどか
った、って聞く。正直いや、俺は地球側が悪役にしか思えん。」

「デビッドはそこで一息ついてだが、と続けた。
「独立戦争、って言えば聞こえは良いがな、見方を変えれば、結
局はただのテロだ、とも言える。元々、プラントのコロニーだっ
て宗主国の持ち物だったからな。」

「デビッドさんは・・・どちらの味方なんですか？」
キラが恐る恐るたずねる。

「どちらでもないさ・・・。誰も彼も本質を見失い、ただ目の前の
憎しみに全てを傾ける・・・。どちらについても、くだらない。」
デビッドは上を向いて、天井ではない、どこか遠くを見つめる。

「結局、正しい戦争なんて無いのさ。戦争が、人殺しである限りは
・・・な。」

そこに、食堂のドアが開いて、ユーラシアの士官達が現れた。
先頭の立っている禿頭の男が、一人前に出る。

「私は当衛星基地指令、ジェラード・ガルシアだ。この艦に積んで
あるMSのパイロットと技術者、そして例の未確認兵器のパイロッ
トはどこだね？」

その言葉を聞いて、キラが手を上げようとしたとき、キラが耳に付
けていたコーデックから、彼の頭に音が響いた。

キラは驚きながらも、コーデックのスイッチを押す。

「やめておけ。」

当然といえば当然の帰結ではあるが、声の主はデビッドだ。

キラは戸惑いつつも、先程教えられたように声に出さずに返事をす
る。

「どうしてですか？」

「忘れたか？あの時、大尉がストライクにロックしろつったろ。」

「え？あ、はい。確かに、言われたとおりにしましたけど・・・。」

『だったらわかるだろ。ありや連中がストライクを調べようとしてるんだよ。』

『あ……。』

『政治のいざこざに巻き込まれたくないなら大人しくしておけ。いいな。』

ガルシアに、ノイマンが聞き返す。

「なぜ我々に聞くんです？艦長たちが言わなかったからですか？・・・ストライクをどうしようってんです？」

だがガルシアもねっとりといやらしい下卑た笑みを浮かべて答える。「別にどうもしないさ。ただ、せっかく公式発表より先に見せていただく機会に恵まれたのと、なにやら面白そうな機体にまみえたんだ。いろいろと聞きたくてね。パイロットは？」

「フラガ大尉ですよ。お聞きになりたいことがあるんなら、大尉にどうぞ。」

しかしガルシアは人を見下したような嫌味で醜悪な目線で周りを見ながら言い返す。

「さきの戦闘はこちらでもモニターしていた。ガンバレルつきの『ゼロ』を扱えるのは、今ではあの男だけだ。それに、頭数が足りないぞ？」

ガルシアがあたりを見渡すが、誰も名乗り出ることも答えることもしない。

すると、いきなり近くにいたミリアリアの腕を掴み、嫌がる彼女を無理やり立たせる。

「まさか女性がパイロットとも思えんが、この艦は艦長も女性ということだしな……。」

もう限界だった。キラが立ち上がるうとしたその時。

いつの間にかデイビッドがガルシアの横に立っていた。

「な、何だ貴様は。」

デイビッドは何も言わず、ガルシアの帽子を取ると、

そのままぺしぺしとガルシアの頭をはたき続けた。

突然のことに、誰も反応できず、眼を丸くしている。

すると、デイビッドがニヤニヤと笑いながら、ガルシアの頭をはたくの止めずに彼らの方を向く。

「おい、ここにハンプティ・ダンプティがいるぜ。」

ガルシアは何を言われたのかわからずに啞然としている。

「いやあ、懐かしいなあ。俺ガキのころ好きだったんだよ。マザーグース。」

いまだ彼は頭をはたき続ける。

「あれ確か塀から落ちて割れちゃうんだよな。あ、そうか、こいつがこんなところにいるのも、無重力なら落ちないもんね。割れずにすむってもんだ。」

クルーの一人が、思わず噴出しそうになるのをこらえ始めるをみて、ようやくデイビッドが何を言っているのか理解したガルシアが、怒りで顔、というか頭を赤くし始める。

だがデイビッドははたくの止めない。

「おいおいどうした？ゆで卵にでもなるつもりか？まあ、その方がいいかもな。中身が硬くなる分、割れ難いってもんだ。」

ユーラシアの士官達も笑いをこらえ始める。どうやら、結構な数が似たようなことは考えていたらしい。

もはや、ガルシアを除くほとんどが笑いをこらえていた。

「いい加減にしろっ！！ストライクと例のアンノウンのパイロットは誰だ！！」

「ジェフティは俺だ。で、ストライクはそこにいるキラだよ。」

「ふざけるな！」

ガルシアが突然殴りかかる。

だが、デイビッドはいともたやすくそれを受け流し、逆にガルシアを押し倒してそのまま拘束してしまう。

これは、CQCと呼ばれる軍事格闘術の一つである。

この格闘術の特徴は、本来は別のところにあるのだが、それはまた別の機会としよう。

デイビッドはすぐに拘束を解く。

「なにをふざけてるって？艦長が女性なら、ひよっこみたいなガキや、得体の知れない男がパイロットでも変じゃないだろ。なあ？」

「く……！」

ガルシアが悔しそうにしているが、先ほどの流れでは正直滑稽にか写らない。

「で？俺達がパイロットだってんなら、どうするんだ？」

「……いいだろう！とりあえずその少年！お前からこちらに来てもらおう！貴様はその後だ！！気分が悪い！」

かんかんになりながらガルシアがコーラシアの士官達と共にキラを連れていったあと、デイビッドはマードックに満面の笑みで肩を叩かれた。

「いやあ！よく言ってくれたなあんだ！こんなスカツとしたのは久しぶりだ！」

どうも全員が同じ意見のようだ。

だが、キラを連れて行かれたのは正直少しばかり誤算だ。

デイビッドはマードックを制すと、すぐにコーデックでキラに連絡を入れる。

発音音が頭の中に響き、すぐにキラにつながった。

「……デイビッドさん！」

「あゝ、キラ？すまん。少し予想とずれた。」

だが、キラは少しも気にしていない様子で答えた。

「いえ、いいですよ、そんなこと。それにしても、ハンプティ・ダンプティって……。」

「……そこで吹くのはやめとけよ？」

そういうデイビッドの顔はほくそ笑んでいた。

一方、キラはといえば、必死に笑いをこらえながら、格納庫に向かう。

だが、その頭の中は先程のデイビッドの発言でいっぱい、もう嘔出してしまいそうだ。

ガルシアの頭を見て、ハンプティ・ダンプティとはよく言ったものだ。

だが、出来ればもう少し体系が丸いほうが良いかもしれない。

いかんせん、彼は卵、というには年不相応に体型がしまっている。

そこまで考えて、彼は今より体型が丸くなったガルシアを想像しようとしていることに気がついて、すぐに頭を切り替えた。

「ぶふうっ!!」

・・・どうやら、約一名、とめられなかった人間がいたようだ。

一方、いまだ食堂で待機せざるを得なかったデイビッドを含むアークエンジェルのコルーたちは、手持ち無沙汰にしていた。

「あゝ、暇だ・・・。」

『報告します。アンチステルス機能モジュールのロックが解除されました。』

「ん？」

突然のエイダからの連絡に、食堂にいた全員がデイビッドのほうを向いたので、さすがのデイビッドもたじろぐ。

「・・・おいおい、いきなり怖いぞ。」

「ロックって、どういうことですか？」

サイがたずねるのを、デイビッドはエイダに説明するようにいった。『ジェフティは、あらかじめいくつかのサブウェポン使用デバイスドライバや、機能モジュールに一定のロックがかけられています。』

これは、件のアンティリア蜂起以前に、研究者側がジェフティの『盗難』を恐れ、その際の対策として設定されたものだ。

決起の際、ロックの解除プログラムをデイビッドは入手し、ジェフティに入力したのはいいのだが、どうやらロックが複雑になってい

るうえに、デイビッドが一斉に解除するように設定してしまい、結果としてロックの解除に時間がかかってしまっている（という設定になっている）。

「まあ、とにかく、ジエフティはお前らが思っている以上に本当は高性能、つてことさ。しかしまあ、妙なタイミングだな。」

『現在、機能自体は起動状態にありません。起動しますか？』
デイビッドはふむ、と考え込む。

普通なら、ここで使用する必要は無い。

しかし、いまだ確信は無いが、どうも嫌な予感がする。

そして、自分の勘は、そのニュータイプ能力によるものかはわからないが、よく当たる。

「よし、起動してくれ。」

『了解、アンチステルス、起動します。・・・警告。アルテミス周辺に、MS反応あり。Xナンバーのものと思われます。』

「何だと!？」

ニコルは、ブリッツのコクピット内で、うまく潜入できたことに静かに喜んでいた。

アルテミスは、いつてみれば『鉄壁』といって良いほどに、極端なまでに防御力に優れた要塞だ。

アルテミスは、“傘”と呼ばれる現行では究極の防御兵器を持っている。

この“傘”は、早い話が基地全体を覆う、ビームバリアのようなものだ。

このバリアの前では、レーザーや実体弾は勿論、ビーム兵器の類も役に立たない。逆に、アルテミスからの攻撃も行えないが。

ここに入らねたら最後、それこそ兵糧攻め以外にアルテミスを攻略するすべは無く、そして今のザフトには、そんなことに兵力を割けるだけの力は無い。

しかし、向こうとてエネルギーは無限ではない。さすがに、敵がい

ないような状況では“傘”も閉じる。

勿論、“傘”は光学兵器なので、開くときは一瞬。いきなり奇襲されてもあわてる必要性は無い。

つまり、何らかの形でこつそりと映画の『ミッション・インポッシブル』よろしくなとんでもない難易度をクリアしてアルテミスに潜入する以外に、この基地を攻略するしかなかったのだ。今までは。

今ニコルが乗っているブリッツには、地球軍が開発した『とある技術』が使用されていた。

ミラージユ・コロイド。

特殊な粒子を機体周辺に散布し、レーダーからだけでなく、カメラなどの映像からも姿を消してしまう肉眼から以外では絶対に見破られない驚異的なステルス技術。

ミラージユコロイドによって、今彼はアルテミスの誰からも気づかれること無く、アルテミスにこんなにも近くにいることが出来ている。

勿論、それも完璧なわけではない。

エネルギーの消費が激しいため、使える時間は限られ、PS装甲との同時展開も出来ない。

それに、スラスターからの熱紋や、音も消すことも不可能だが、いくらなんでもそこまで求めるのは贅沢だろう。

（今頃、イザークあたりが僕を臆病者呼ばわりしているかもしれないな。）

確かにそうかもしれない。クルーゼ隊の他の隊員に比べれば、自分がどれだけ場違いかぐらいはニコルも自覚するところだ。

しかし、『戦場では臆病者のほうが生き残る』なんて詠み人知らずな言葉を例に挙げるまでも無い。

事実、その臆病者が、ザフトのどんな英雄にも攻略できなかったアルテミスとその鼻先まで捕らえている。

だが、とニコルは臆病者ゆえに思う。

あるいは、あの羽付きだったら。

もしかすると、ミラージユコロイドでさえも見破られてしまうのではないか。そんな風に考えてしまう。

なにせ、理屈はわからないが、一つの事実としてあの機体は、バスターやデュエルの機能を一時的にはいえ封じている。

そこを考えると、ミラージユコロイドが破られてしまう、というのもあながち杞憂とはいえないかもしれない。

だが、変な話だが、それはそれで面白いかもしれない、と考えてしまおう。

いけない。どうも自分は、最近イザークたちに感化されている節がある。

雑事をいちいち考えるのはここまでとしよう。そろそろ、仕事をすべきだ。

そしてニコルは、ブリッツの右腕のトリケロスを構えると、照準を合わせ、“傘”のリフレクターを撃ち抜いた。

「ミラージユコロイド？」

「ああ、ブリッツに装備された技術の一つで、特殊な粒子を散布して、機体をほぼ完璧に隠しちゃうステルス技術なんだが……」

「マードックがそこで口ごもる。」

当然だろう。自分たちが苦心して作り上げたものが、こんなにも簡単に破られてしまったのだ。

因みに、マードックは知らないが、実はミラージユコロイドの基礎理論に関しては、ZOEが作り上げたものだったりする。

そのため、ジェフティがミラージユコロイドを破ることが出来たのも、ある種当然なところがある。

だが、デイビッドもそれは流石に知らなかった。

「エイダ。ブリッツの正確な位置がわかるか。」

「判断は可能ですが、視覚化は出来ません。」

「厄介だな……。」

確かに、デイビッドにはニュータイプ能力があり、相手の思念から、

おおよその位置を掴むことはできる。

だが、デイビッドはあくまでも人間である以上、本能的に視覚に頼ってしまう。

つまり、見えない相手との戦いなんて、訓練すらしたことが無い。

だが、それでも全く手がかりが無いわけではないはずだし、エイダも判断は出来るといっている。

「やるしかないか……。」

すぐにデイビッドは銃を取り出し、サプレッサーを取り付けてから、無限バンダナから麻酔弾のマガジンを取り出す。

「何よりもまずはここを取り戻すことからだな。手伝ってくれるか？」
いうまでも無く、クルーの全員が準備に動いていた。

そのとき、外からのものと思われる揺れが食堂を襲った。

格納庫では、キラがOSのロックを解除するのを、ガルシアたちが舌を巻いて見つめていた。

正直、嫌な気分だ、といわざるを得ない。

自分に集まるねっとりとした気持ち悪い視線、視線、視線。

これならまだ戦場での敵意を持った眼の方がまだ清清しく思えてしまう。

そして、最後のロックを解除した瞬間、アルテミスを地響きが襲った。

「管制室、この振動は何だ！」

『不明です！周辺に敵影なし！』

同時に、コーデックから空電が発せられる。

「デイビッドさん！」

「キラ！敵襲だ！準備は？」

「OSのロックは解除しました！でも、敵影が無いって聞きましたけど……。」

「そいつは後で話す！すぐに出撃してくれ！俺も後から行く！」

「わかりました！」

すぐにキラはコクピットハッチの開閉ボタンを押す。

「坊主！何をする！」

「攻撃されてるんでしよう？こんなことしてる場合ですか！」

操作パネルからソードストライカーを選択し、カタパルトへと歩を進めた。

見張りの兵たちを鎮圧、それに気づいてやってきた兵たちを麻醉弾で眠らせた後、クルーたちはすぐさまアーケエンジルのブリッジに向かい、デイビッドは格納庫へと急いだ。

逃げるガルシアたちを無視してデイビッドはジェフティのコクピットへと乗り込んで、発進シークエンジンを飛ばして（そもそもジェフティには必要が無い）アルテミス内部へと飛び出した。

そのとき、目の前から殺気が放たれるのを感じて、ジェフティを動かしたのとほぼ同時に、見えない空間からビームが飛んできた。

あのままでいたら確実に当たっていただろうことに少しばかりの戦慄を覚える。

だが。

「エイダ、言ってくれただけでいい。敵の位置を教えてください。」

『了解。現在、ジェフティ右側に移動。』

そこまで判れば充分だ。すぐにジェフティを方向転換して、目の前に意識を集中させる。

「そこだあ！！」

すぐさまジェフティから幾本もの光が花卉のように開いて、前方へと弧を描く。

これが、ジェフティの基本武装の一つ、ホーミングレーザーである。そもそも、ジェフティに使われるビーム兵器と、通常のビーム兵器には、決定的な違いがある。

ジェフティの持つそれは、単純な光の塊ではなく、空間の歪曲によって発生したエネルギーを、メタトロンの特性である程度操作したものを武器として使用しているのだ。

そして、それを応用すれば、通常の方法では決してなしえない曲がるビームを打ち出すことが出来る。

しかし、ホーミングレーザーの特性は、相手をロックオンして、レーザーに追いつかせるといふ点にある。

つまり、ロックオンできないこの状況下では、その数によって弾幕を張ることが出来ても、相手に確実に当たるといふわけではない。

しかし、それでも効果はある程度はあったようで、レーザーの一本が何かを貫いたのが判った。

しかし、明らかに致命傷のそれとは思えない。

「くそっ！ やっぱこれでもだめか！」

この状況下でこれは出来れば使いたくは無かったが、どうやらそうも言っていないらしい。

エイダの発言と自身の感覚で、再び相手のおおよその位置を掴む。

そのとき、ジェフティがまるで体に力をため、踏ん張るような構えを見せる。

機体に青白い光がほとばしり、それがとても危険なものであることをあからさまにしている。

これは、ジェフティの、というよりOFに搭載された機能の一つ、「バースト」。

アンチロボットアクター

OFに搭載された半永久機関、UPRは、反陽子エネルギーを生成する。これによって、ジェフティの高出力は成り立っている。

そしてこれを意図的に臨界状態に近づけ、エネルギー出力を大幅に上げるのがバーストだ。

そして、この状況下で、ジェフティは自身の基本武装の中でも最大の威力を持つ攻撃を放つことが出来る。

ジェフティがその右手を掲げると、その掌に光が集まり、青い球体を作り出されていき、徐々にそれが大きくなる。

そしてそれが限界まで大きくなったことを示すように肥大化をとめると、すぐさまジェフティがそれを投げつけた。

おそらく直撃はしないだろう。だが、こいつならそれでもかまわな

い。

デイビッドの予想道理、光球はむなしく空を飛び、そのままアルテミスミスの壁に激突した。

そして、これもまた予想していたことに、激突した光球が青い爆風を放ち、それにブリッツが巻き込まれた。

そして、ばちばちと電気を走らせながら、ブリッツがその姿を現した。

これが、ジェフティ最大の基本武装、バーストショットだ。

はつきりいって、デイビッドからすればここまであげつない兵器はあまり無いと思う。

バーストショットの本質は、完全な面の攻撃。

直撃したら勿論ひとたまりも無いが、それだけでなく、その周辺においても強烈なエネルギーの波を起こし、その破壊力は並みのMSなら確実に壊せるだろう。

アルテミスのあちこちで爆発が起こっている。今の一撃で沈む、というのはさすがにありえないが、アルテミスにも相当のダメージを与えたに違いない。

デイビッドがバーストショットを使ったがらなかったのはこれが理由だ。正直、後々問題になるんじゃないかという気がしてならない。だが、ブリッツが巻き込まれたのが、爆風の外側だったため、完全に破壊するには至らなかった。

だが、ブリッツは機体全体にダメージを受けたようで、ミラージユコロイドも使えないらしく、その上P S装甲も所々うまく機能していない。

ブリッツが、ぼろぼろの機体のバーニアをふかして、あまりにもきこちない動作で逃げていく。

すぐさま追いかけてよとすると、そこにいつの間にか現れたバスターが立ちふさがる。

「まずいな……。」

おそらくバーストショットを見られただろう。あれは別段初見殺し、

というわけではないが、この至近距離でバーストを使うのは危険すぎる。特にバスターのような砲撃主体にはなおさらだ。

だからといってまたゲイザーで……とも行くとはどうも思えない。

「エイダ、アークエンジェルは？」

「ストライクと共にアルテミスの出口付近へと移動中。尚、ストライクはデュエルと交戦中。」

「潮時だな……。だったら！」

バスターを無視し、ジェフティもアークエンジェルに合流しようと高速で機体を飛ばす。

ろくに補給も受けられていないだろうが、この状況下では補給も何も無い。

デイビッドはストライク、アークエンジェルと合流すると、デュエルとバスターに威嚇射撃をしつつ、今にも陥落しそうなアルテミスを脱出していった。

ヴェサリウスの隊長室。クルーゼはそこで、デスクトップに映るあるファイルに眼を通していた。

それは彼の立場では本来なら存在を知ることすらないような非常に機密性の高い代物。だが、彼のある人脈をもつてすれば、この程度いくらかでも閲覧可能だ。

既に、羽付きの正体についてはなんとなく見当がついている。

しかしまだだ。まだ確証が足りない。

このファイルは、その為のピースの一部だ。

後は、彼らに連絡を入れて、あれの正体を訪ねればいい。

もしかしたら、自分の目的に、羽付きが、正確にはその技術が大いに力を貸してくれるかもしれない。

そして、彼が見ているファイルには、『オービタルフレーム』と書かれていた。

第6話・「傘のアルテミス」(後書き)

デ「今回ようやくホーミングとバーストショットが出たな。」
いやあ、ほんとに使いどころが難しいんだよ。威力が強すぎて。

キ「あとアンチステルスもね。」

あれもね。ANUBISしかプレイしていない人にはわかんないけどね。

デ「でもZOEやっててもあれだろ。みんな隠れポーターが見えるぐらいにしか思っていないだろ。それに比べると今回は大活躍じゃないか?」

まあね。

デ「あと気になるのがクルーゼの動向だな。」

キ「そうそう。なんか極秘ファイル見てたし。しかも『人脈』って・・・」

まあ、感想でもいったとおりフラグが地味に立ってますね。

キ「しかも何か気になること考えてたし。」

そこは秘密。とにかく期待してほしいと思います。

デ「あと今回は何気に独自解釈や設定がちらほらしてるな。」

まあそこらへんはね。

?「ちよつとまつですよ!」
ん?

シーランド「僕シーランドいますよ!何ですかあの冒頭は!シーランドはともかくってなんですかとにかくって!」

デ「何でヘタリアキャラがこんなところいるんだよ!」

シ「失礼しちゃうですよ!僕だってちゃんとした国ですよ!今に世界中を震撼させてやるですよ!」

デ「無理だな。」

キ「出来ると思ってるの?」

絶つっつっつっつっつ対ないね。

アンケート

さて、SEEDエンダースをご覧の方々おはようございますORこんにはORこんばんは。

作者です。

さて今回今後の展開についてアンケートをとりたいと思います。

お題は、「キラが今後使用する銃はどんながいい？」です。何か
広島弁ですいません。

私思ったのですよ。

感想ほしいならほしいなりになんかそれっぽいことしないといかん
など。

でもってアンケートとろう思ったのですよ。

で、何でこのお題が言いますと、設定集読んでくださった方はもう
ご存知かと思いますが、今後の展開でデイビッドがキラにCQCを
伝授することが既に決定しているのですが、MGS知ってる方はご
存知の通り、CQCは銃とナイフの組み合わせで生きる格闘術です。
普通ならせつかく2丁あるんだからとデイビッドのガバメント渡せ
ばいいんでしょうが、あいにく作者がそこらへんでなんかひねくれ
てまして、それじゃつまらないと。

なんというか持つてる銃の違いとかで個性があってもいいんじゃない
かと。そういったキャラクターの差別化もありじゃないかと。

じゃあ何にするんだと。決まらないからアンケートとったら面白い
んじゃないかと。そう思っただいなのです。

一応候補がいくつかあるのでまとめておきます。

1 ソードカトラス（ブラックラグーンでレヴィの使用したベレッ
タM92のカスタムタイプ）

2 SOCOM（MGSでスネークが使用）

3 デザートイーグル（MGSでメリルが使用。）

4 通常のベレッタM92

個人的には1が一番の候補です。

この他にも「この銃がいいんじゃない？」というものがあれば是非
願います。

ただその場合、物語の都合上自動式拳銃のみでお願いいたします。
あまり票があつまらなかった場合は、自動的に1とさせていただきます。
ます。

因みに期限はアークエンジェルが地球に下りるまで、つまり砂漠編
が始まる前に結果発表とさせていただきます。

それでは皆様、是非感想欄にご投票お願いいたします。

第7話・「墓標へ」

1945年8月6日午前8時15分

この日、このとき、世界で始めて核兵器が使われた。

そして、それによって、日本、広島県広島市が火の海と黒い雨に覆われた。

具体的な被害についてここで書ききることは出来ない。ただ、最終的に約14万人が死に絶え、多くの人々がその後も苦しんだことは語っておくべきだろう。

それから、世界は炎無き核戦争に包まれることになる。

アメリカとソビエト連邦によって世界は事実上二つに分かれ、その冷たい戦争の中で、世界を焼き尽くす災厄は地球を何度消し去っても足りないほどに増えていった。

やがて両者が緊張状態に疲れ、ソビエトが解体されてからも、核兵器は残った、いや、むしろ増えていった。

そこには、所謂『囚人のジレンマ』が関係しているとか言うが、そんなことはどうでもいい。

ただ、それでも核兵器はあくまで抑止力であって、実際に使われたことは無かった。

そう、コズミック・イラ70年2月14日までは。

だが、それによってユニウス7にいた住民の全てが死に絶えたことは、痛々しい不幸と思うべきなのか、それともその後の後遺症に苦しむ人々がいない分、不幸中の幸いと思うべきなのかは、おそらく誰にもわからない。

それを、形状から“砂時計”と呼ぶ人もいるが、実際は中に砂など入っていないし、そもそも、上下の無い宇宙空間で砂時計は意味を成さない。

宇宙コロニーは、あくまで人が住むために建造されたものだ。

その数たるや、百に及ぶコロニー郡で形成された“国”、それがプラントである。

ヴェサリウスから降りたクルーゼとアスランは、そのうちの一つの中にいる軍事ステーションを出ようとしていた。

どうして二人がこんなところにいるのか、といえばクルーゼがプラント本国からの出頭命令を受け取ったからだ。

大方、ヘリオポリス崩壊の一件についての責任追及、といったところだろうが、この状況はむしろクルーゼには好都合だったといえよう。

羽付きの正体とそれに関連した資料を調べるには、あのままだとどうしても設備も資料も足りないし、何より本国に報告して、『彼ら』とコンタクトを取らせた方がこちらとしても楽だ。

そんなことを考えながら、シャトルに乗り込むと、軍事ステーションにはあまりにも不似合いな40半ばの男が座っていた。クルーゼはそれに驚きもしない。

一方のアスランは、彼の姿を見て、かすかに驚いた風だ。

「ご同道させていただきます。ザラ国防委員長閣下。」

彼の名はパトリック・ザラ。プラント最高評議会のメンバーで、その実質的なナンバー2。そして、アスランの父親でもある。

「挨拶は無用だ。私はこのシャトルには乗っていない。」

おそらくは所謂『お忍び』というものだろう。彼は鉄面皮、というよりは鉄兜のような無表情で答えた。

「はい……。お久しぶりです、父上……。」

この会話を聞いて、二人が実の親子とは誰も思わないような、堅苦しく重々しい空気。

アスランからすれば、少しつらいものもあるだろうが、そんなことはクルーゼには何の関係も無い。

シャトルが動き出すと同時に、パトリックがその無機質な表情を崩さずに口を開いた。

「レポートに添付された君の意見には、一応私も賛成だ。……ま

あ、多少、気になる点はあるが……。」

クルーゼに見せ付けるように、レポートの束で掌を叩く。

「問題は、やつらがそれほど高性能のMSを開発した、ということころにある。パイロットのことなど、どうでもいい。」

アスランが蒼白な顔で父親を見る。パトリックはそれをちらと見たが、その表情にいつぺんの人間らしさも感じられない。

「その個所は私のほうで削除しておいたぞ。……あちらに残した機体のパイロットもコーディネイターだったなどと、そんな報告は、穏健派に無駄な反論をさせるだけだ。」

「君も自分の友人を、地球郡に寝返ったものとして報告するのはつらからう？」

クルーゼが優しく語り掛ける。

そう、クルーゼは既にアスランからストライクのパイロット

キラがコーディネイターであることは聞いていた。ただそのことについて、今のところ思うところはない。

実際、地球についてのコーディネイターは彼だけはない。少数ではあるが、地球軍所属のコーディネイターのMSパイロットというものも確かにいるし、それによっていくらかXナンバーの参考になったのも事実としてあるだろうから、あまりいう必要も無いだろう。

「ナチュラルが操縦してもあれほどの性能を発揮するMSを、やつらは開発した。そういうことだぞ。わかるな、アスラン。」

「……はい。」

アスランが苦しげに頷くのを見て、パトリックは今度はクルーゼを見やる。

「ただ、この羽付き……だったか。これがMSではない、というのは確かなのか？確かに、見た目からしてかなり奇妙な機体ではあるだろうが……。」

「おそらく、間違いないでしょう。それどころか、MSをはるかに超えた存在、といっても過言ではないかと思えますが……。」

クルーゼの言葉に、先程まで彫刻のように冷たかったパトリックの

表情が曇る。

「何を言っておる。いくらなんでも、それは言い過ぎではないか？」
「それについては、評議会で話させていただきます。ただ、そちらは削除しないでいただきたいのですが……。」

いつの間にか、シャトルは目的地へとついていた。
アプリリウス1。最高評議会のおかれている、プラントの首都コロニーの一つだ。

「しかし……参ったな。結局補給はなし、か……。」
格納庫で、ムウがげだるそうにつぶやいて、マリユーがため息をついた。

「早く脱出できたのはいいけど、これじゃあ……。」
アルテミスが陥落し、それが眼くらましになったのか、今のところ敵は近くにはいないのはいいものの、それによってアルテミスからの補給は受けられず、月まで一直線で行かなければならない。

確かに、あの気持ち悪い連中から解放されたのは正直嬉しくはあるが、それ以上に厄介な状況だ。

「……にしても、なんなのよ。ジェフティってさ。」
ムウがうんざりしたというか驚いているというか、とにかくあきれたような顔でジェフティを見上げた。

改めてみると、その美しさが今更ながらによくわかった。

殆ど完全な曲線のボディラインに、搭載されたものはパドルブレードとシールドの発生装置のみ。

純粹なまでに極められた運動性能が、機能美を造形美へと昇華させているのがよくわかる。

そして、その背に付けられたスラスタは、さながら天使の翼を思わせるが、どちらかといえば鳥と形容したほうがいいように思えるのは、その青い機体色からだろう。

一種の芸術の領域にある存在だが、その美しさには不似合いなほど、ジェフティは凶悪な性能を持っている。

ベクタートラップ、バースト、そして何より彼らを驚かせたのが、アンチステルスという機能。

いまだロールアウト前だったブリッツのミラージュコロイドを、基礎技術こそZOE製とはいえ、ジェフティの作られた時点である程度対抗できるほどのものが出来ていたというのだ。

はつきり言つて、あまりにも場違いな存在に思えてしまう。

MSという兵器が現れて、1年も経つことなく、というかそれ以前にMSをはるかに超えた兵器が存在していたというのは、こうして現物を見ても信じられない。

いや、それどころではない。下手をすればジェフティだけで、プラントを含む地球の戦力全てを圧倒してしまうかもしれない。

「あれがここにあって・・・本当にいいのかしら。」

マリューが呟く。

「え？」

「ここに・・・この世界にジェフティがあること。それが、いいことだとはどうしても思えないんです。」

「まあなあ・・・。オーバーテクノロジーどころじゃないもんな、

ありゃ。下手すりゃ、戦争を変えるかもわかんねえ。」

「ええ・・・。」

メタトロン、オービタルフレーム、そして、デイビッド。

その全てが、あまりにも場違いなように思えてしまう。

ジェフティという存在が、この世界を狂わせてしまうのではないか。そんなことを考える。

だが、そもそもこの世界が最初から狂ってしまっているかもしれない。

そうでなければ、今の戦争はありえない。少なくともマリューはそう思う。

だとすれば、ジェフティはこの世界を正しに現れた、神の使者なのだろうか？

そこまで考えて、マリューは首を振ってそれを否定する。

自分で考えておいてなんだが、あまりにも馬鹿な話だ。

ただ、それでもいいかもしれない。神の代行者メタトロンで形成されたジェフ
テイの姿は、当に幸福を与える“青い鳥”と形容するにふさわしい
のだから。

それでも、ジェフテイの存在と、それが世界に与える影響、その二
つが、マリユアの脳裏に暗い影を落としていた。

一方のデイビッドは、たとえば、重力ブロックのとある一室で、キ
ラに銃とナイフを構えていた。

勿論、デイビッドに攻撃の意思は無い。

デイビッドは、今キラにCQCの基本を教えている最中だ。

CQC、その本質は、銃とナイフを組み合わせた、中近距離での戦
闘での切り替えにある。

ザフトでも、ナイフをメインとした格闘は訓練内容に含まれている
が、そこに「銃」というファクターは含まれていない。

その性質上、CQBクロクレスバトルの一種と考えてもいいが、この格闘術がなぜC
QCと呼ばれるのかはわからない。

第一、本来CQCは近接格闘全般を示す言葉なのだが。

ただ、このCQCが、今までの格闘術の中でもかなり異質で、それ
でいて革新的なものであることは違いない。

白兵戦から潜入まで幅広い運用の可能な戦闘術。それがCQCなの
だ。

「・・・とまあ、こんな感じだ。わかるな？」

構えを解くと同時に、デイビッドは説明を終える。

「は、はい。」

「よし。じゃあ、キラには訓練中はこっちのガバメントを渡してお
く。勿論、弾は入っちゃいないがな。」

そういつてデイビッドは銃弾の入っていないガバメントと、CQC
ナイフに似せたゴムナイフを手渡した。

「ある程度上達したら、次はゴム弾での実践練習に入るからな。ま

あ、まずは型を体で覚えてもらおう。」

「はい！」

こうして、キラの訓練が始まった。

『では次に、ユニウスセブン追悼、一周年式典を控え、昨夜クライ
ン最高評議会議長が声明を発表しました。・・・』

宇宙港とアプリリウス市をつなぐエレベーターの壁面に、髭を生や
した上品な印象を受ける中年の男性と、どこか妖精や天使を思わせ
る柔らかい雰囲気少女が並ぶ映像が映る。

男の名はシーゲル・クライン。先程キャスターが読み上げたとおり、
プラントの最高権力者だ。

一方の少女はラクス・クライン。ファミリーネームからも判るとお
り、シーゲルの娘である。

それだけではない。ラクスは今プラントで一番の人気を誇る歌姫と
しての一面も持っている。

アスランは、彼女の屈託の無い表情に心を奪われる。

「・・・そういえば、彼女が君の婚約者だったな。」

クルーゼの呼びかけに反応して、アスランはあわてて視線をそらす。
既にプラントでは周知の事実とはいえ、改めて言われると、根が生
真面目なアスランはどうしてもどきまぎしてしまう。

元々は親同士の決めた政略結婚の許婚とはいえ、アスランも悪い気
がしているわけではない。

その屈託の無い笑顔や、美しい歌声は、彼女が遣伝子操作コーディネイターされてい
る、という事実を考慮に入れても、充分以上に魅力的だ。

ただ、婚約者という実感があるか、といわれると、どうしても肯定
できない。

彼女がどこか現実離れた印象を受ける、というのは確かにあるが、
それ以上に、アスランからしてみれば、世話の焼ける妹（もつとも、
彼は一人っ子だから、この例えが正しいかはわからない）とか、気
の許せる女友達といった感じしかしないというのが本音だ。

「彼女は今回の追悼慰霊団の代表も務めるそうじゃないか。素晴らしい。」

クルーゼはといえば、アスランのそのような悩み（もっとも、ラクスの熱烈なファンであるイザークからすれば、「贅沢にも程がある」などと激怒するかもしれないが）を気にもしないで、いつもどおりの底の知れない微笑を浮かべている。

「ザラ長官とクライン議長の名を引く君らの結びつき。次世代にはまたとない光となるだろう。期待しているよ。」

「・・・ありがとうございます。」

クルーゼが賛辞の言葉をくれるも、アスランはどこか白々しい印象を受ける。

正直に言つて、アスランはこの男が信用ならない。いや、一軍人として、優秀な指揮官であることは認めるし、その点で尊敬もしているけれども、彼個人については、どうにも怪しすぎる印象がある。

それは、彼がいつも仮面で素顔を隠しているから、というだけではなく、彼自身から発せられる、得体の知れない不気味さによるものだろうと、アスランは考えている。

不意に、キラのことを思い出す。

あの時、キラはイージスの拘束から抜け出そうと抵抗した。

アスランはそれを思い出し、少し虚しさがこみ上げる。

思えば、プラントに越してから、彼ほどに心を開いた相手は、今は亡き母のほかにはいなかったように思える。

どうして、キラはあそこにいるのだろう。

あの気弱なキラが、どうして戦場にいるのだろう。

どれだけ考えても、アスランの脳裏には疑問ばかりがぐるぐると流転して、ちっとも苦しみを和らげてはくれなかった。

デビッドは、キラの上達に舌を巻いた。

未だ基本的な型までしか教えていないが、それでもスポンジが水を吸収するように、いや、それより早くといつてもいい位によく覚え

てくれる。

さすが、コーディネイター、というか、それ以上のものを感じる。一方で、ガバメントを構えるキラの動きから、デイビッドは既にキラに適した拳銃を考え始めていた。

体にあつた銃を選ぶ、というのは重要だ。特に、CQCに関しては自分の動きの癖にあつた銃を選ぶことで、そのパフォーマンスは大幅に変わることになる。

「いいぞ。特に若い連中つてのは、銃の手軽さに頼りやすいからな。ナイフの腕を鍛えるのはお前くらいから始めればかなり有利に働く。」

キラの隣に立つて、細かい指導をしながら、デイビッドは今後の練習メニューをくみ上げ始めていた。

「・・・そういえば、どうしてデイビッドさんはCQCを使えるんですか？」

ふいに、キラが尋ねる。

確かに、宇宙やくざの、それも末端の鉾夫であつたデイビッドには、CQCが使える事実は、あまりにも不自然だ。

「・・・。」
ただ、デイビッドにとって、それは正直触れてほしい話題ではなかった。

「昔、ちょっとな・・・。」
デイビッドの少しつらそうな顔に、キラはそれ以上聞くことが出来なかつた。

デイビッドがCQCを使える所以には、彼のニュータイプ能力が大いに関係している。

彼が与えられた過去の、『負』を司る部分の、そのもっとも大きな、暗い闇。

ニュータイプ実験場での、実験の一環として行われたうちの一つ。

早いところ、それはニュータイプ能力の限界を定めるために行われた『殺し合い』。

ナイフ捌きも、射撃の腕前も、全てがそこに起因する。ただ、デイビッドはそれから逃げることはしない。例えどんな過去でも、例えそれが作られたものであると、関係なく全てがデイビッドの『今』をかたどっているのだから。それに、記憶ではない、正真の人殺しは既に成した。今更、そのような過去に縛られることはしない。デイビッドはそう誓って、訓練に戻った。

アプリリウス市、プラント最高評議会。

それぞれ専門の研究分野を持つ12の市の中から選ばれた12人の議員達、彼らがプラントのいわばブレインであり、その中心には先程ニュースに映っていたクライン議長が座っている。

議会場は、そこにいる人間にのみ照明が当てられているために、まるで劇場のようないでたちだ。

議員の中には、同じクルーゼ隊のイザークやディアツカたちの父母の姿も見える。

「・・・以上の経過から、ご存知いただけると存じますが、われわれの行動は決してヘリオポリス自体を攻撃したのではなく、あの崩壊の最大原因は、むしろ地球連合軍、及び我々が羽付きと呼称するアンノウンにあったものとご報告します。」

淡々と、しかしはつきりとクルーゼが主張すると、そのまま彼は自らの席へと下がる。

ただ、一つの事実として、彼が要塞攻略用の所謂D装備を施したという点が、アスランの胸のうちに引っかかるものを残す。

しかし、議員達はそんなこと気にもしない

「やはりオーブは地球軍に与していたのだ！条約を無視したのはあちらの方ですぞ！」

「しかしアス八代表は・・・」

「地球に住むものの言葉など、あてになるものか！」

「しかも件のアンノウン！それを連中が作ったものでないとする確

証などどこにも・・・」

「・・・しかし、クルーゼ隊長。」

紛糾する議論が、パトリックの静かな、しかし迫力ある声で止んだ。
「その地球軍のMS、果たしてそこまでの犠牲を払ってでも、手に入れる価値のあるものだったのかね？」

まるで台本どおりの展開であるかのように、クルーゼは滑らかに応えた。

「その驚異的な性能については、実際にその1機に乗り、また取り逃がした最後の1機と交戦経験のある、アスラン・ザラより報告させたいと思いますが。」

そして、クルーゼはそれもまた予定調和のものであるかのように、アスランに出番を譲る。

いや、実際にあらかじめ決まっていたことかもしれないとアスランは感じる。ただし、父とクルーゼ隊長の間の暗黙の了解として。

「まず、イージスという呼称のついたこの機体ですが・・・。」
台本を渡されただけの素人が舞台に立ったような心持で、アスランは報告書　あるいは、台本か　を読み上げる。

本当にまるで寸劇の様だ。しかも、“観客”たちにはそうと知らせない、安っぽいドッキリ番組の類の。

ひとしきり台本を読み終えたところで、アスランは観客　議員達を見渡す。

みると、クライン議長ただ一人が、プロデューサーパトリックを見つめて、いや、睨み付けている。

「・・・以上、データが示しますとおり、ハードウェアとしての性能は、われらザフトの次期主力として、現在配備が進んでいるシグーを上回るものといえましょう。・・・クルーゼ隊長のご判断は正しかったものと、私は信じます。」
議員達はいえ、そのほとんどが青ざめ、不安げにきよるきよるとしている。

「こんなものを造り上げるとは・・・ナチュラルどもめ!」

「でもまだ試作機の段階でしょう？ たった5機のMSなど・・・」
「だがここまで来れば量産は目前だ！ そのときになって慌てればいいとおっしゃるか!？」
アスランは理解する、パトリックとクルーゼ、二人の演出家の目的を。

彼らは観客たちに恐怖を与えようとしている。

恐怖ほど、人間の心をかき乱し、操るものは無い。

賢者でも勇者でも、一度恐怖を植えつけることが出来たなら、いとも簡単に動かすことが出来る。

紛糾し、熱狂する議論。だが結論が出ることなく、そのまま尻すばみに落ち着いていく。

そこに、パトリックが静かに、しかしはっきりとした声で語り始める。

「戦いたがるものなどおらぬ・・・。」

その言葉にみな聞き入る。

「平和に、穏やかに。幸せに暮らしたい。・・・われらの願いはそれだけでした。」

もはや、羽付きのことなど誰も見向きもしていない。

そこから、パトリックの口調は急に激しくなる。

「だが！ その願いを無残にも打ち砕いたのは誰です!？ 自分たちの都合と欲望のためだけにわれらコーディネイターを縛り！ 利用し続けてきたのは！ われらは忘れない・・・あの、血のバレンタイン、ユニウス7の惨劇を!！」

キラとデイビッドがストライクの整備を終え、食堂に向かっていった。どうして二人がストライクの整備をしているのかというと、キラはフラガに言われて、デイビッドは彼もまた一応言われはしたのだが、元々ジェフティにはナノマシンでの自己修復が行われているので、必要性が無く、暇をもてあますのもあれだからと手伝うことにしたというわけである。

二人が味気ない艦内食のメニューをとり、席につくと、二人の目に赤い髪の少女がこちらを見つめているのが見えた。

「ん……？あいつは……。」

確かヘリオポリスで見た顔ではなからうか。

「おい、キラ。あいつ、誰だ？」

「ああ、フレイですか。」

デイビッドがフレイに近づくと、フレイは小動物よろしくびくっと反応する。

「？……どうした？」

そういいながらも、彼のニュータイプ能力は、既にフレイがどのような人物か読み取っていた。

「あ……あの……。」

「ん？」

「ど……どうして？」

彼女のうちには、コーデイネイターへの差別感情がある。ただ、その感情はどこか空虚な印象を受けた。

「どうして……キラのボディガードなんてやるの？」

このご時勢ではよくある話だ。周りの意見に流され、なんとなくそういうものと思い、深く考えもせず、本心でもない、あまりにもお粗末な差別意識を持つようになる。

「……どういう意味だ？」

大して本気で思っていないからこそ、そういったものはたちが悪い。

「だって……キラは、コーデイネイターなの？だから……。」

「それだけの實力があるから、守る必要がない？」

フレイが言いよどむ。

「い、いえ……そういうわけじゃ……。」

「あんまりそういうことは言うもんじゃないぜ。」

そこに、マードックが声をかけてきた。

「お、坊主たち、やっぱりここか。」

「お、おやっさんか。どうした？」

おやつさん、とはデイビッドが勝手にマードックにつけたあだ名である（因みにデイビッドしか呼んでいない）。

なお、デイビッドはムウのことも勝手に旦那、と呼んでいる。

「艦長たちがおよびだとさ。」

「補給を受けられるんですか？」

「おいおい、それどこだよ。」

キラとデイビッドの質問にムウは歯切れの悪い答え方をした。

「受けられるというか、まあ、セルフサービスって言うか・・・。」

「セルフサービス？宇宙にやドリンクバーも自動販売機もないぜ？」

そこに、マリューが割^{ヘルト}ってはいる。

「私たちは今、デブリ帯^{ヘルト}へ向かっています。」

それが意味することにいち早く気づいたデイビッドが、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「そういうことか・・・。まあ、しかたない、といえばそうか・・・。」

「どういうことですか？」

キラがたずねるのを、マリューが引き受ける。

「・・・デブリベルトには、宇宙空間を漂う様々なものが集まっています。そこには無論、戦闘で破壊された戦艦などもあるわけで・・・。」

「もしかしてそこから・・・！！」

「『補給』・・・しよつってことだろうな。」

驚くキラたちと、暗い面持ちのデイビッド。しかし、ムウは開き直った様子で言う。

「仕方ないだろ？そうでもしなきゃ、こっちが持たないんだから。デイビッドはため息をつくが、それでも否定は出来ない。

「あなた達にはその際、ポッドでの船外活動を手伝ってもらいたい」

マリューも、そしてムウも、この行動自体にためらいがないという

わけではないことは、デイビッドもわかっている。だからこそと、デイビッドは少年たちに諭すように言う。

「たしかに、楽しい仕事じゃない。だがな、死人には食い物も水も無用の長物だ。だったら、聞こえが悪いが、こっちが有効利用とする方がいい。」

それでも、彼の口調に苦々しさが確かににじみ出していた。

「さて、地球軍製のMSについてはそれぐらいにしていたでいて、今度は羽付きについての話をしていただきたく思います。」

議論が一段落したあたりでクルーゼが仕切りだしたのを見て、アスランは察する。

先程までのステージはいわば父と彼の二人のものだった。だが、ここからは違う。ラウ・ル・クルーゼによる独演会だ。

「待ちたまえ。そのアンノウンも地球が作ったものではないのかね？」

シーゲルが言うように議会のほとんどが羽付きも地球軍が作ったものと思っっている。

「それについては、こちらの映像をご覧いただきたいと思います。そういつて今度は、羽付きとの戦闘記録が映し出される。」

「まず、外見からお分かりいただけるように、羽付きは根本的なフレーム形状からして、MSとは違います。」

そこについては彼らも理解していることだ。確かにその姿は、戦場で圧倒的な違和感があることは、素人でもわかる。

「次に装備です。こちらの右腕に装備されたブレードは、一見するとジンの重斬刀のような実体剣の部類と思われませんが、実際には重斬刀を切り落としています。」

映像が、ミゲルの残した戦闘データに切り替わる。

「また、この装備は収納状態では、我々が鹵獲したMSの装備するビームライフルに酷似した性質のエネルギー照射兵器としての性質を持っています。」

続いて、ジンのミサイルを打ち落としていく羽付きの映像。

「更に、デュエル、バスターが羽付きと交戦した際、この2機は原因不明のエネルギーダウンに陥り、その後の調査でも機体に異常は見られませんでした。しかし、戦闘記録から、羽付きが投げつけた『何か』・・・その物体は、2機の機能が回復したのと同じ頃に消えてしまいました。・・・」

それについてはアスランも驚かされた。おそらくはバッテリー系統に影響を与えたものではないかと思われる。

「更に、この機体はイージスとの交戦中に何も無いところからどうやったのか武器を取り出し使用しました。」

イージスの記録映像。実際何度見ても信じられない。

議員達にも動揺が走る。

「そして、これは先程届いた情報ですが・・・地球軍要塞、アルテミスにて、羽付きとブリッツが戦闘、それによりブリッツが中破、パイロットは無事とのことです。」

アスランが眼を見開く。ブリッツの性能や特性を知っているだけに、以下に羽付きが驚異的な力を持っているかがうかがえる。

「以上の点からしても、この機体は我々の常識を遥かに超える性能を持っていることが伺えます。さて、問題はここです。この機体がおかしいのは、その性能の高さです。現在、これほどの性能を持った機体は、確認される限り、羽付きを置いて他にはありません。しかし、これが地球軍のものであると仮定すると、あまりにも水準が高すぎるのです。」

たしかに、あれほどの性能があれば、Xナンバーは必要がない。

「考えられる可能性は二つ。地球軍がG計画と平行してあれを建造していたか、もしくは・・・別の勢力のものか。」

議会が一気に騒がしくなる。

「別の勢力だと？どういうことだ。」

「まず、先程言ったとおり、この機体はMSとは思えない形状をしています。この時点で、何らかの別の技術系統が存在すると思っ

いいでしょう。そして、地球軍にそれがあつたのか、といわれれば、おそらくは“NO”ではないでしょうか。これほどのものを作れる時点で、既にジンに匹敵する性能を持った量産機が存在しなければならぬはずですから。だとすれば、これは新たに作られた技術が羽付きを作れるほどのものだった、あるいは別の勢力がそういった技術を持っていたかのどちらかであると考えるべきでしょう。」

「では、一体どこが、羽付きを作ったというのかね？」

シーゲルの質問に、アスランも答えることは出来る。

だが、正直に言って、それは正しいのか判らない。

「可能性といたしましては・・・火星ではないかと。」

「駆逐艦だ。エンジンをやられたんだな・・・。」

まだそれが何であつたかを知ることが出来る程度に原形をとどめた残骸が浮かんでいる。

デイビッドたちは、デブリベルトでの“補給”をしに来ていた。残骸を避け、先に進んだとき。

デイビッドの体に戦慄が走った。

氷河期ではないかと思ってしまうほどに凍りついた大地。

しかし、氷河期のものにしてはあまりにも文明的過ぎた。

一面の麦畑は、水分が気化、冷凍されて枯れたまま凍っている。

おそらく人工の海であつたらうものは、真空中で沸騰したまま凍ったために、異様な形で固まっている。

無機物である建物だけが、凍らずにそのままているのが異様で、おぞましさを感ずる。

それは、いまや無慈悲な鉄くずと化した、かつての農業用コロニー。血のバレンタインの被害者達。

“ユニウス7”。

「ひでえな・・・。」

デイビッドがつぶやく。

凍りついたかつての大地だったものにストライクとジェフティが降り立つ。

デイビッドが無重力用の小型バーニアを装着し、その“大地”に降りると、そのおぞまじさがいつそうに感じられる。

それは船外作業服に身を包んだキラ達にとっても同じようで、みな葬式のように黙っていた。

「エイダ。ここは？」

デイビッドが尋ねるが、実際にはもうわかっている。

『はい。ユニウス7。いわゆる血のバレンタインで、地球軍の核攻撃によって壊滅したコロニーです。』

デイビッド達が納屋として使われていたであろう建物の中に入ったとき、彼らは全身の毛が逆立った。

それは、そこに住んでいただろう親子の亡骸。

宇宙空間に生身の人間が投げられると、長くても15秒しか持たないという。

そして、そのまま酸欠で死に至り、次には体中の水分が気化し、あつという間に干からびながら凍りつく。

この親子は当にそれだった。

母親はわが子を守ろうとするかのように抱きかかえているものの、その子の性別がわからないぐらいの効果しかもたらしていない。

そして、母親も子どもも、その体は不気味な木乃伊になっていた。

かつて古代のエジプト人は、死者の復活を願い、その死体を木乃伊にしたというが、この有様にはそのような雰囲気は微塵も感じられなかった。

復活の望みすら感じさせない絶対の『死』だけがそこにはあった。目玉の取れかけたデイベアが、まるで二人にささげられた供物のように漂っていた。

『C・E・70年、2月14日。地球軍のメビウスが核ミサイルを発射。それによりユニウス7は壊滅し、その内部にいた24372

1名が死亡しました。これが、地球、プラント間の戦争状態を引き起こした事実上の最大原因とされます。』
エイダの淡々とした説明だけが、彼らの間にむなしく響いた。

「あそこの水を……！？本気なんですか？」
キラが驚きの声を上げる。

キラ達は、いったんアークエンジェルに戻り、マリユールに事の次第を説明した。それからしばらく後、ナタルが事務的にユニウス7の氷を利用することを告げたのだった。

「あそこには1億トン近い水が凍り付いているんだ。」
「おい。ちよつと待ちな。」

理由にならない事実しか告げないナタルを、デイビッドがいさめる。
「幾らなんでも、そいつは無えだろ。」

「そうですね。あのプラントは何十万もの人が亡くなった場所で……。」

『私は、ユニウス7での水分の供給に同意します。』
デイビッド達が一斉に多目的端末を見る。

『理由は、1、ナタル・バジルール少尉の発言の通り、大量の水が存在するということ。2、現在、確認できる水がユニウス7にしか存在しないということ。3、現在の艦内状況から、これ以上補給を先延ばしにするのは不可能であることの3つです。』

キラとデイビッドがマリユールのほうを見やる。

「その通りよ。水は……あれしか見つかっていないの。」
マリユールは苦しげに顔を背ける。

「誰だって、出来ればあそこには踏み込みたくないさ。」
それはそうだろう。実際、マーシヤンで、この件には微塵も関係しないデイビッドだってそうだ。

「けど、しょうがねえだろ！俺達は生きてるんだ。ってことは、生きなきゃなんねえってことなんだよ！」

ムウの声には、明確な戸惑いがあった。

「・・・オービタルフレーム？」

「はい、おそらくはそれが、羽付きの正体だと思われます。」
ふむ、とパトリックはクルーゼから渡されたファイルに眼を通した。
あの後、議会は荒れた。それこそ、クルーゼの予想以上に。

そしてそのことは、シーゲルの望みとは裏腹に、プラントの更なる
戦闘意欲の向上につながる結果となった。

いい兆候だ。地球を刺激するよりも、プラントのほうが正直難しい
分、これは嬉しい誤算といえるだろう。

ただ、羽付きについては、これ以上は自分ひとりで調べるのは正直
つらい。

だからこそ、あの議会とこの場は、重要なターニングポイントだ。

「メタトロン・・・？あれが使われているのか？だがあれは・・・」

「はい。確かにメタトロンは、使い道がわからない代物のはずです。
ですが、このファイルの信憑性を考えれば・・・あるいは。」
パトリックが顔をしかめた。

「“やつら”も厄介なものを作ってくれる・・・。」
クルーゼはアスランを見つけると、近づきながら語りかけた。

「あの新造艦とMSを追う。ラコーニとボルトの隊が私に指揮下に入
る。出港は72時間後だぞ。」

暗くさびしい真空を、ミリアリアの放った花束が舞っている。

勿論本物ではない。避難民の子どもと一緒に作った、折り紙
で出来た花束。

だが、そこにこめられた哀悼の思いは紛れもなく本物だった。

デイビッドは、その花束をなんともいえない顔で見っていた。

『時間の無駄です。作業の迅速な開始を提案。』

「そういうな・・・こういったことも必要なんだよ。」

『理解不能です。』

ふつと、デイビッドが笑みを漏らす。

「言葉を話しても、所詮AIはAI……か。」
『その通りです。それが何か？』

エイダの意見は正しい。実際、いつここに敵が迫るか判ったものではない。

それでもデイビッドは、祈るように瞼を閉じた。

ミゲルは考えていた。

独房の中はそれほど薄暗いわけでも汚いわけでもなく（元々アークエンジエルは新造艦なので当然だが）、比較的快適な類に入るのだろうが、それでも有り余る退屈はどうしようもない。

尋問でもあれば話は別だろうが、実際には尋問どころか、誰かが顔をのぞかせることもなかった。食事を運んでくるときと、あの男が来た以外は。

あの男……デイビッド、だったか。

兎に角奇妙な男、という印象しかない。

民間人で、しかもナチュラルの癖に、あの羽付き……確か名前はジェフティだったか、あれに乗って戦い、しかも自分を負かした。

それだけではない。暇さえあれば彼は自分のところに冷やかしに来ていた。

ただ彼の場合、どうも捕虜になった間抜けなコーディネイターを馬鹿にしに来た、という雰囲気ではない。

あの男は、どちらかといえば常日頃からあんなふうであるように思える。

そのデイビッドが、先程妙に神妙な面持ちでストライクのパイロット
ト　　いつかのアナウンスからして、彼がキラというのだろう

とともにやってきた。

デイビッドは、自分達がいまユニウス7にいて、そこから氷を切り出す旨を伝えた。

ミゲルは怒り、怒鳴りつけた。コーディネイターにとって、そこは

侵すべからざる聖域、というべきものであり、そこがナチュラルどもに汚されると感じた。

『お前らナチュラルは、俺達のことをごみ見てえにしか思ってたねえんだろ！』

キラがつらそうな顔をして、独房を去ると、デイビッドは静かに口を開いた。

『なあ、もしも、ナチュラルを守るうとするコーディネイターがいたとしたらどうする？』

『え？』

『俺は、そういう変わり者をひとり知ってる。・・・あいつだ。』

『な！？どういうことだよ！？なんでコーディネイターが、ナチュラルなんかのために戦うんだよ！』

『さあな。でもま、そんなあいつのボディガードをしてる俺が、変わり者なんていえた義理じゃあないってのは確かだが。』

そういったあと、デイビッドは頭を下げ、ユニウス7のことを詫びて出て行った。

なぜ、キラは戦うのだろう。

自分は、ナチュラルが嫌いだから戦っていた。そう思っていた。

でも、本当にそうだろうか？

よくよく考えてみると、自分がナチュラルを憎む理由はあまりないことに気づく。

そもそも、ザフトにいるのだって、元はといえば病気の弟の治療費を稼ぐためだ。

別にナチュラルが憎くて、殺したくてたまらない、というわけでもない。

じゃあどうして、ナチュラルが嫌いだの何だの言うようになったのか。

それは多分、みんなが言っていたから、という結論に行き着くに違いない。

周りが自分達を上位の存在と信じ、声高々にコーディネイターの存

在を賛美する中で、結局流されるままに同意した結果だ。大して本気だったわけでもない。

ミゲルは、黙ったまま天井を見ていた。

氷を切り出す作業が続く。

少しでも多くの氷を切り出すために、ジェフティはベクタートラップからグランドスラムを出して使用していた。

「・・・退屈な作業だ。」

「そういわないでくださいよ。とても大事な作業なんですから。」
まあ、確かに周りに敵がいなか見ているだけのキラのほうがずっと退屈だろう。

そのとき、コクピットに警報が鳴った。

「エイダ！どうした！」

『周辺に敵を確認。機体コードより偵察型のジンと推測。』

「・・・なんでこんなところに!？」

ジェフティとストライクがほぼ同時に武器を構えた。ジェフティはパドルブレードの柄を、ストライクはビームライフルの銃口を。

その場を緊張が走る。もし見つかったら、厄介なことになるのには目に見えている。

できれば、何事もなく過ぎ去ってほしい。

二人の願いを聞き届けるかのように、ジンが反転した。

デビッドが安心して息をつく。

だが、その直後ジンが再び反転した。ジンの視界には、アークエンジェルの作業ポッドが移っていた。

「ばかやろう！何で気づくんだよ！」

ジンがライフルを構えた瞬間、それより早くジェフティがライフルを打ち抜く。

「なんで・・・!!！」

次の瞬間には、ストライクの撃った一条の光が、ジンを撃ち抜き、ジンは爆発の後跡形もなく消えた。

『あ……ありがと、二人とも!』
カズイの声がした。今あそこに乗っていたのは、彼一人だったのだらう。

『マジ死ぬかと思ったぜ……』

『ストライク、ジェフテイ、何があった?』

「いやなに、ちよいとした、招かれざる客、ってやつさ。もうやつつけたよ。」

キラが何か言うより早く、デイビッドが軽く報告を終えた。
実際、キラがまともに報告できるとは思っていなかった。

デイビッドはコーデックのスイッチを入れると、キラに繋いだ。

『デイビッドさん……』

『キラ……大丈夫か……?』

『僕は……僕は……』

キラの声には、明らかな動揺がある。

『あの場では、当然の判断です。』

『……エイダ?でも……』

『あれは“敵”、です。あの状況では、撃墜することが最良の判断だったといえるでしょう。』

『でも僕は!殺したくなんか……無いのに……。ただ……みんなを守りたいだけなのに……。』

『キラ……』

『僕は……コーデイネイターなのに……ナチュラルの側で戦って……ここだって、地球軍が……。』

『理解不能です。』

『……え?』

キラが気の抜けた返事をする。

『あなたの考えには、16の反対意見が上げられます。第一に、あのまま、ポッドが撃墜競れる可能性があったこと、第二に、その後、本隊に報告される可能性があったこと、第三に……』

『もういい、エイダ。』

デイビッドがさえぎった。

『デイビッドさん……。』

『キラ。いいか。撃つことをためらうな。でも、撃つときの痛みは、決して忘れるなよ。』

『……。』

『でなきゃ……お前は自分を見失うだろうからな……。』

『お話の途中ですが、報告です。国際救助チャンネルで、救難信号を探知しました。』

二人がモニターを見ると、あまりにも小さな浮遊物が浮かんでいた。

「つくづく君達は、落とし物を拾うのが好きなようだな。」

ナタルがため息混じりにつぶやいた。

目の前には宇宙用の救命ボートがどっかりと居座っていた。

これが先程まであまりにちっぴけに眼に映っていたから不思議だ。

「そういうなよ。あくまで人命救助だからよ。」

「だが、何事にも限度がある！」

デイビッドがやはり気に入らないらしいナタルが怒鳴りつける。

「はいはい。説教は後で聞きますよ、と。で？どうよ、おやっさん。」

「

マードックがデイビッドのほうを向かずに答える。

「ロックは解除した。……開けませんぜ。」

空気の抜けるかすかな音をさせ、ハッチが開く。

周りの兵士達が銃を構えると同時に、デイビッドをすぐにガバメントを抜けるように構える。

……が、すぐ後に彼らは腰を抜かすことになる。

『ハ口……ハ口……』

ハッチから現れたもの。それはピンクの球体だった。

いわゆるペットロボットと言うやつらしい。球体の一部がパタパタと耳のように羽ばたき、中心には目……のようなものがおさまっている。中心を走る曲線の溝が、まるで口を思わせる。

「ありがとうございます。ご苦労様です。」
ハッチの向こうから、今度は優しい、穏やかな声が聞こえた。
中から声の主が現れる。

自然には存在しないはずなのに、決して不自然さを感じさせない、
柔らかで美しいピンクの長い髪。

絹シルクのような白い肌と、慈愛に満ちた水色の瞳。

細身の体の先には、世の女性の理想ではないかというような美しい
指がそろろう。

おそらくはキラたちと同年代であろうこの少女が、ゆったりとした
服をたなびかせながら舞う様は、（宗教的な意味では）無神論者で
あるデイビッドに、本物の天使が現れたのではないかと錯覚させた。
「あら・・・あらあら？」

慣性にもっていかれるままの“彼女”を、キラが手を掴み彼女はゆ
っくりと動きを止めた。

「ありがとうございます。」
“彼女”が穏やかな笑みを浮かべる。

デイビッドは、キラがその笑顔にどきりとしたのがわかった。

「あら？」
“彼女”が、キラの軍服を見て、不思議そうに辺りを見回した。
「あらあら？」

その口調はおっとりとしているが、決して鬱陶しさがなく、むしろ
穏やかな安らぎがある。

「まあ・・・これはザフトの船ではありませんの？」

“彼女”が状況を認識すると同時に、エイダがデータベースから
彼女の正体を導き出していた。

「あなたは、ラクス・クラインですか？」

少しびっくりしたような様子を見せた“彼女”が、声のしたほうを
向く。

「ええ。そうですわ。・・・ところで、今のはどちらから聞こえた
んでしょうか？」

「おい、エイダ。．．．だれだ。こいつは。」

『ラクス・クライン。現プラント最高評議会長、シーゲル・クラインの娘です。』

デビッドのほうからエイダの声がしたので、“彼女”
ラク
スはまた驚いた。

第7話・「墓標へ」（後書き）

さて、やっつこつこつこつこのフレイとラクスの登場です。

ラ「待ちくたびれましたわ……。」

デ「ラクスはともかくとして、フレイはもっと早く出せたらうに……。」

うん……。大分タイミング逃しまくった……。

でも今回を逃すわけには行かなかったからね。大分無理やりなところがあるけど、何とか入れることにしました。

キ「どういこと？」

今回、この作品を書くに当たって、一つのテーマとして、「ガンダムSEEDを見つめなおす」というのがあるわけだけど……

デ「……って、そんなんがあつたのか。」

あつたんだよ。で、その一環として「ラクスという人間について掘り下げてみよう」というものがあるわけ。

ラ「どういことですか？」

ラクスというキャラクターについて、担当声優の田中理恵さんも、小説版の解説で「よくわからない」といつてまして。

ラ「……。」

そこで、ラクスについてもつと掘り下げて、ラクスがどんな人間かを、独自解釈も含めて考えてみようと思ってるんですよ。

デ「それがフレイとどんな関係があるんだ？」

そのための方法として、ラクスとフレイを対比させてみようと考えたわけです。

二人とも、境遇は同じような感じなんですよ。

キ「父親一人で箱入り娘で……確かに同じだね。」

そういう意味では、この二人は実に対照的な関係にあります。

ラ「つまり、フレイさんを掘り下げることと私を、逆に私を掘り下げることとフレイさんを掘り下げようと考えているんですね。」

つまりそういうこと。

キ「今回の大きな動きは、クルーゼとアスランのお父さん、それとプラント評議会のあたりだね。」

実際ここが一番重要。それだけにここにどれだけジェフティを介入させるかで悩み、時間がかかることになった大きな原因です。

ラ「それと気になるのは、ミゲルさんとフレイさんに関する描写ですけど……。」

そこはかなり独自解釈なんだけど、みんながみんな本気で差別意識持つてるってどうなのか、とか考えた結果、メディアリテラシーや、先の大震災での、風評被害の問題についてとかに絡めて、この“作られた差別意識”に行き着いたんです。

キ「あのさ、ラクスがこのコーナーにいるってことは、ラクスもメインキャラ扱いな訳？」

ええまあ、そうですね。はつきり言ってメインヒロインです。

デ「……ってことは俺がキラのどちらかにくつつくのか。どっちだ？」

まだ内緒です。ただ……

ラ「ただ？」

デイビッドはこんなだし、キラもデイビッドの影響で性格的にも魔改造される予定だから……

大変なことになるね！主にエロい意味で！！

ラ「ええ！？」

まあ気をつけてね！エロい意味で！！

デ「お前それ言いたいだけだろ。」

そんなことより次回予告をどうぞ！！

ラ「ごきげんよう。SEEDエンダースの同じ髪飾りを10個は持っている方のラクスですね。」

あら……ここはどこなんでしょうか……？

ザフトの船ではないようですし……。

ということとは地球軍でしょうけど・・・。

ところで、あの方は一体誰なんでしょうか？

次回、SEEDエンダース。第8話・「ザフトの歌姫」。

次回もよろしく願いますね！」

・・・最近この何とかの方で何にするか迷う自分がある・・・。

デ「凝り性の癖してこんなことやりだすからだろ。」

キ「しかも今回のバーナビーのパクリだし。」

・・・ソウデスネ。

ここからは少し真面目な話。

今回冒頭に広島島の原爆についてと、その後の核兵器について少しだけ語りました。

広島県民の私にとって、8月6日というものはとても大きな意味を持っています。

先の大震災の影響で、福島の原子力発電所が臨界事故を起こしたことは、皆さんにとっても記憶に新しいことでしょう。

さっきも少し触れましたが、福島の件で一番の問題となっているのが、いわゆる風評被害です。

こういったものの原因の主なもの、放射線について、被爆についてよくわかっていない心無い人間が、勝手な解釈で勝手な行動を起すことにあります。

つまり、『無知の罪』です。

ミゲルやフレイと同じように、周りに流された結果、というものでしかないのです。

これは今に始まったことではなく、前々からの、日本人のメディアリテラシーの未熟さが招いたものであることを、私達は認識せねばなりません。

私が原爆の被害について、あまり詳しく書かなかったのも、原爆について、放射線、原子力について、皆さん一人ひとりがきちんと調べ、考えていただきたいという思いがあったのこともあるのです。

福島の方々が、少しでも救われますように。

世界で最初の被爆地、ヒロシマから。 豪商院影正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2228w/>

機動戦士ガンダムSEED Z.O.E~the blue bird~

2011年12月25日00時48分発行